皆人民上への政道に歸し、國主油斷なく國境を守るなれば、此人々忽ち生捕らるべしと、心分つべき方なく、密に袖の内にて卦を起し、占うて見たりけるに、不吉に當りしかば、心決せずして暫時呻吟する所へ、大矢野作左衞門來り、此事を聞くに、葦塚疑ふ所をいひければ、大矢野大音上げ、何ぞ吉凶を以て試みんや。長崎を窺ふは、我輩の望む所なり。死するは我も人も、早きか遲きか迄の事、勇士の思入、留むとも留まるべからず。其望に任さるべしといひければ、終に返書を調へて返しける。其使の後姿を眺め、葦塚猶心決せず心樂まず、自ら立ちて歩行し濱邊に出で、海の面を打眺め久しく立つ。浪の色甚だ悪しく見えければ、葦塚忠右衞門手を丁と打ちて、大事去れり、必ず渡邊小左衞門を失ふべし。是又味方の弱味なり。始め勝に乘じて富岡の城を攻むるに、城堅固にして拔く事能はず、今又長崎を計略するに、其事不慮に出で、必ず功をなさじ。天命なる哉。終に夫れ島の中にして事止むべしと、獨言して歸りしとなり。斯くて渡邊小左衞門は、水主と自ら舟を出して急ぎしに、汐合甚だ悪しく、長崎へ着く事能はず。其中目附船檢見多く漕合ひけるを、漸々として漕

拔け、長崎へと計り急ぎ行くに、夜に入りて漸く田の浦といふ所へ着きぬ。漁家の本に寄り一夜宿り、長崎の樣子を聞くに、こゝは宇土の下なり。此邊此頃は、天草一揆起れるとて、島々舟着く毎に御番嚴しく、夥しき軍兵にて固め居る中なれば、此舟の如きも、商物にても、慥なる請合なくては、何處の浦と雖も寄り難しといふ。其話に便りて小左衞門も、又天草の大將の才智一揆の超過したる樣、且天草の法の奇特など語り見るに、中々聞入れず。今の世、何者が出でたりとも、世の中變あるべきや。天草にも、いらざる事して、身を亡しなん人の多き事抔と、他領の人は、談合殊の外違ひ、此舟の衆も、何とやらん心元なき人達なり。早く他領へ着き給へ。此所は小浦の事なればこそ案内もせで、一夜泊めたりなどいふ程に、何卒夜に入り長崎へ着かんと、又舟を押出したりしに、天運や盡りけん、海上大汐不意にさして、忽ち舟を、方角違細川殿の領分、肥後國川尻といふに流し寄せける。此所は則細川の家老長岡監物よりの與力並に家人、大勢にて守り居る。此日は別して、海上の舟の往來を改むる最中なれば、頓て前後より大勢取包み、皆々生捕られて段々吟味あるに、則一揆の

渡邊小左衞門捕はる

張本四郎時貞が實父渡邊小左衞門に紛なかりければ、早速手伽足伽を入れて禁獄し、卽時に江戸表へ注進あり、其後御吟味ありけれども、母も小左衞門も、互に死に變らん事を爭ひ、命を惜む氣色更になし。耶蘇の法などの事、御尋ねありしかども、一向不案内にありければ、先づ其儘に差置き、追ての調略を待たれける。斯くて原村には、渡邊小左衞門舟路間違ひ、肥後の川尻にて生捕られたりと聞えければ、村中の人民、聲を上げて恨み泣き、軍心皆撓みけるに、大矢野・千々輪・葦塚等急に駈來り、大きに勇め利害を說き、今は小左衞門殿弔合戰より外あるべからず。先づ此事を四郎殿に隱密にもなるまじ。急ぎ申送り、彼の人若し深く歎きなば、是大將の器量に非ず。又別に大將を選むべしと、葦塚・千々輪・大矢野等相談究め、四郎太夫方へ申送り、其返事を相待ちけるに、遖に一揆の惣大將に選れし程の四郎が返答潔し。父小左衞門事、今更是非に及ばず。凡人倫の道、親子の別程切なるものはなしと雖も、斯く大義を思立つ砌、已に父母の恩に背けり。各を始め三萬人の軍卒、皆我父の如し。我も人も遠からぬ死の緣、頓て上天菩薩の御前にてこそ言譯致すべし。一人の爲

に、三軍の民心を落さんや。早々肥前・肥後を切靡け、小左衞門殿の弔合戰こそ望む所に候。今日の歎、各餘り心に懸け給ふなと申遣しければ、葦塚・大矢野・千々輪已下の者共、扨は此人大將の器量は備はりしや、あら賴もしや〳〵と上下安堵して、此上は彌小左衞門殿の志を繼ぎて、島原領の一揆を取集め、深江村に謀略し、松倉の根城高久城を奪ひ取り、腹癒に攻屠れやと、四郎が返答を、普く一揆の百姓原に見せて、其上にて諸役人殘らず呼集め、其後葦塚忠右衞門、軍士を勇めしは、惣じて父を生捕らるゝ事、不吉に似たりと雖も、先例皆ある事なり。昔周の文王も、敵の爲に捕はれとなり給ひ、其子武王、敵を亡し周の世を開き、天下を保ち給ふ事、八百餘歲なり。又漢の高祖と申す帝は、始め御父太公を、敵の楚の項羽といふ天下無雙の勇將に生捕られ、對陣の度々、此太公を引出し、陣を退けずんば、忽ち煮殺さんといひ、或は鼎に油を湧し、其上に俎板を置き、此上に彼太公を横に置きて、陣を退けよと呼ばはりし事ありしとなり。樣々に謀を廻らし、終に鴻溝といふ所を限り、國を境ひ和睦して、彼の父太公を迎へ返し、其後又軍を起し、終に項羽を亡し、漢の天下四百年の基

を起し給ふ。其外前漢の王陵・南京の高祖・和朝の義朝・甲斐の信玄、近くは奥州の伊達政宗、皆是父子難あつて、其家榮えし例ならずや。却て敵に恨を增し、諸軍心を一にして、金石の如く義を立て、突けども射れども顧みず、切らば刀に趨りかけられて戰ふべし。九州二島、日あらずして打靡け、軍船兵糧前後を圍み、花の帝都を指して打上らんに、大物難波等防ぐとも、尊氏歸洛の先規に習ひ、井伊・本田・榊原・藤堂・板倉・酒井の輩、備播二州の間に切亡し、天帝の旗を、此日の本に吹靡けんは案の內、各心を落されな。差當り松倉高久城代、近日押寄せ打果さん。勇み給へや人々と、詞すゞしく座を立ちける。

葭田三平智略の事井藏奉行兩人一身の事

斯くて深江村には、葭田三平、葦塚が密謀を受け、種々工夫を廻らし、先づ支配地下の中にも、口を利き一揆にも一味すべき者、其器量ある者二三人を密に招き、各先づ聞き給へ。天草の一揆次第に廣がり、近々に最早九州一統になりぬべし。さあらば此郷、早く一揆に一味して、先づ急難を遁れたきものなり。扨一揆に一味すれば、當年來年來々年の年貢は出さず、作り取りといふ定なり。一揆に一味なければ、目前に押入り亂妨するなれば、各能く覺悟して、早々一味し給へといふ。何れも三平、常常村の惡しき事いはぬ者なれば、いかさまとも、庄屋殿次第たるべしといふ故に、然らば外々へ沙汰あるべからず、高久の城へ一手立して、高名したる後、天草所々の一揆共より、此郷の一揆を敬はす樣に手立あれと、是等をば返し、夫より密に藏屋鋪に行き、代官奉行中尾甚太夫・山脇七左衞門兩人に對面して申しけるは、いかに御聞き候や、今天草大江村に一萬五千の兵を集め居る、彼が宗門の本國伊留滿伴天連にも、內々物語の事候へば、頃日に黑船共着岸致すべしとも申候。先づ差當り原村の變亂御聞及びの前、申すべきにあらねども、內々所々に一味の味方此ある由申候。誠に龍の雲を得、虎の山に寄るが如しとや申侍らん。寺澤の家中、本渡にて一戰ある由、忽ち大將の三宅藤兵衞・並河九兵衞等討取り候て、其後一陣も張合ひ申難く、富岡へ逃籠り候とも申し、最早一揆に降參仕るとやらん承り候。寺澤家は十二萬三

千石、中大名に候所、一戰に及ばず敗軍仕候由、況や松倉の御家は、先づ小身にも御座候上、近年御政道惡しく、諸人倦み果て候へば、誰彼こそ一揆に一味して、味方の負仕出し候やらん。武勇も此度は詮なき事に候。其故は人間の世界さへ、大劫とやらんの大火は、大地の底より火燃え出で候へば、萬民遁るべき所なき通り、天迄燒拔けるとなり。今此一揆も、縱令武士防ぎても、國中の土百姓皆々一味仕候はゞ、大地の火になりたる如く、防ぎ難き者と存候。是は武邊の立たざるにも非ず、國政の宜しからずとて、此一揆起る事止む事を得ず、天性といふべき者なり。上深江村・中江村も今一揆に組し、渡邊小左衞門・佐志木佐治右衞門なども、一揆の一將になり候上は、最早今あなた方の身の上に相懸り申候。所詮一揆共、松倉公の手際には鎭まり申さず候と存候へば、早く一揆合體の御心になされ候方、御身の爲、萬全の謀と存候。一揆は九州半も打從へ、天下の節度使に敵對申すとも、五度七度は勝負あるべく候。何れになりとも御了簡次第に候。官軍へ御加はりなされ候とも、自由と存候間、此度は唯我等が御勸め申す如く、一揆に御從ひ候はんや。又は一揆を御引受け、御合

戰も候やと、威しかけたる言葉に、兩奉行返答し兼ねて見えたりしに、三平又申しけるは、各樣方、一揆に御敵對候へば、御下知に隨ひし私事に候へば、御供仕候へ共、私支配を始め百姓中は、中々義理を得申さず候へば、一揆に組仕候と存候。さ候へば彼の聞及びし明智日向守が如く、竹鑓の最期と存候へば、扨も口惜しく候といひければ、兩人の奉行、面色青く變じ、いかにや三平殿、其許の詞尤に存候なれば、我々も一揆に組すべきなり。併し新參とて、土百姓共に部役に使はれんは、死すともなり難し。其許の御働にて、中老分に用ひ給ふ樣に賴む由いふ。三平大きに喜び、則受合ひ、一揆徒黨の判形を取るに定り、家內殘らず一揆へ引取り、下深江村一揆一味の誓約極りければ、寬永十四年九月五日に、馥田三平は、忽ち高久の城へ注進に出づ。此頃も每度申上候如く、原村の一揆段々廣がり、上深江大半、一揆に組仕候由相聞え申候。下深江村の儀は、御城付兵糧米も籠め置かれ候へば、御油斷なされ難き所に御座候。然るに近鄕動亂仕り、又近村へも悉く亂妨仕り、土民共安き心は是なく候。且承り候へば、頃日原村名主渡邊小左衞門、川尻にて生捕られ候由、是により天草へ

加はりの大將へ申遣し候由、押付大勢押渡り候て、打潰し申候由沙汰仕候。是に依り一兩日は、上中深江村・原村の一揆の者共、うろたへ申す由承り候。さあれば此間に、先づ下深江村の御城米、殘らず御引取然るべく存候。私組下近年困窮、其上課役多く候へば、今年貢皆納御免遣され候はゞ、此度の御奉公に村中を相催し、急度守護仕り、次に近隣の一揆も、四五百人御切捨て候はゞ、御留主居の忠節、此上もなき事に御座候と、憚乍ら奉存候。若し天草勢着陣仕候上には、いかに思召す共叶ひ申さぬ事に候。只今原村變亂の間に候へば、早々御勢出し、御尤に奉存候。百姓の心も、只今定り申さゞる間に、年貢御免仰付けられ、隨分相働き申樣、仰渡され然るべく存候と申しければ、高久城代の松倉十兵衞、委細に是を聞き、尤の事なり。代官奉行中尾・山脇はいかゞと申されければ、三平則兩人の御内狀も御座候とて、出し見せければ、松倉十兵衞喜び、成程是より軍勢差遣し申すべし。此頃は、一揆悉く大軍と聞及ぶ故、城中を大事と計り思ひて、追討も延引す。一揆の中に斯る變亂あるこそ幸なれ。其上深江村の鄕民、其方が勸に依つて、忠節の心あるの段祝着候。成程當年

松倉十兵衞下深江村の一揆を攻む

の年貢皆免し、來年は半免にして取らせ申すべき間、其方隨分働き、上深江村の一揆共を、殘らず討取り申す樣心得らるべし。彌明後朝急度勢を出し追討すべきなり。又藏入の兵糧米は、其砌悉く城内へ運び取るべし。是又人數配り傭人夫等、其方取計らひ世話致すべしと、内談一々終り三平を返し、夫より十兵衞、彌出城の用意して、城の留守居は、松倉但馬を初め、在番奉行・町方奉行・城番組・堀付組等、彼是三百餘騎、方々門々を堅め、籠城用心して相守らる。打出づる大將には、城代一老松倉十兵衞、番頭筒井丈左衞門・下野小助・佐脇治郎左衞門三人、騎馬の侍卅九人・歩の士四十人・鐵炮五十挺・長柄卅本・雜兵合して五百餘騎、下深江村に打向ふ。

南島變亂記第七畢

薗田三平智略の事幷藏奉行兩人一身の事

南島變亂記第八

松倉十兵衞敗軍の事幷大矢野鎗術働の事

去程に松倉十兵衞は、寛永十四年九月七日の卯の刻に、島原高久城を立ちて、精兵勇士五百餘人、下深江村に出張して、河原表の廣野に陣し、何方へ押向ひなんと、未だ定まらず。定めて下深江村の者共、案内に來るべきなりと、暫く見合せ居たりける。昔より、彼を知り己を知り、然る後軍を押す。彼を知らずば、軍を出すまじと聞えしに、人頼みなる軍勢遣ひ、哀れ捗々しからずとぞ見えにける所へ、下深江村の名主霞田三平、健に出立ち、武具相調へ鑓提げ、究竟の百姓原五六十人召連れ走り來り、扨も一揆原、上深江村に屯仕る所に、各様御出陣、御旗先を見ると早、日頃の氣勢も落し候やらん、遁れ走り申候。急ぎ追討し給へと注進する。則松倉十兵衞是を聞き、大きに喜び笑ひ、いかさま百姓一揆は、さもあるべき事ならん。急々に追討せよと、十七町の所を、平一散に駈付けたり。既に上深江村に押付けて見るに、一人も見えず。百姓原此時に、追々二三十人も注進に來り、一揆は此次の小森村へ、唯今取込みと申す故に、城兵出張して是を見るに、内々霞田三平疑兵をなして、百姓原を二三百人、村々へ歩み行く如くするを、城兵共是を見て、謀略とは夢にも知らず。すはや一揆原、此間にて追留めて打果せよ。先頃天草にて、寺澤衆の戰とは、事抜群に違ふべきぞやと、土煙を立て、跡先も見ず追懸けたり。此後に殘る城中の雜人原、或は小荷駄掛りの者などは、霞田三平、其邊邑々の親類兄弟などを以て、密々に招かせけるに依り、下賤の者は、大方一味して駈付くる振して、村々より外す者は多かりける。先手の戰士は、是を夢にも知らず、揉みに揉んで急ぎけるが、又半道計り走りたる故に、馬は白泡人は息切れ、歩行立の武士も一所に集り、扨も臆病の百姓原かな。斯程の心底にて、能くも此度の一揆思立ちたるぞ。切て一鑓にても合せず、殘念なりと大きに嘲哢する所へ、追々百姓來り、唯今下深江村の御藏米を奪ひ取り、運び去ると申來

る。時に松倉十兵衞・筒井丈右衞門を始めとして、南無三寶盜人共の業ならん。彼奴原が後へ廻り、盜賊をなす以の外なり。元來此事一大事なり。一俵にても奪はれては、武士の恥辱此上なし。急々押付けて討果せと、健なる武士を勝つて十九騎・歩兵六十人・雜兵三百人、馬の手綱搔繰つて、矢聲を出し駈立つる。追々同勢も駈付くれば、是に氣を得て駈けゝれ共、馬は鎧武者を乘せたり、侍は具足にかたをいけ、中間は長柄に持重り、今朝より走り草臥れたる上、又もや揉みに揉んで、一里計り駈けたり。下深江村に押付けて藏を見れば、一揆一人もなし。こはこそ天狗の所業か、今朝より二里餘り走り廻り、大きに疲勞して、又此所に敵にてもあるに於ては、少しの働もなるべきに、一人も相手なき故に、今は心弛み、殊に藏米も其儘あり、心の張合拔けて倦勞れ、唯働く者は目計り、皆々肩息にて水を呑む。松倉十兵衞大きに怒り、注進の百姓共を引出させ、扨々麁末なる案內者共かな。霞田三平出ませい〳〵と呼び廻る。先づ第一心得難きは、藏奉行中尾・山脇の兩人なるぞ。今朝より罷出づべきに、今に於て何處にある事ぞと、大聲擧げて喚かれける所へ、俄に陣貝鯨聲、

下深江村の伏兵四方より起る。一番に一揆惣將軍葦塚が陣代、同苗葦塚忠太夫、采幣を取つて靜に進めば、葦塚左內は、究竟の一揆二百人を引きて眞先に進む。同勢彼是五百人・鐵炮五十挺、天帝の旗一流颯と差上げ、一度に鬨を噇と上る。又一方の河原表の方より、千々輪五郎左衞門華やかに鎧着て、速なる一揆勝り立て、百五十人同じく鬨を合せける。又一方より佐志木佐治右衞門が手下二百人、大矢野作左衞門が勢二百餘人、四方の面より取圍み、鐵炮を放ち懸れば、只今にも大地坤軸へ引入るやと、肝を失ふ計りなり。松倉十兵衞、こは如何にとうろたふるを、家老筒井丈右衞門・下野小助、馬を並べて立上り、いかさま敵の爲に計られたりと覺えたり。さあり とて物々し、何程の事あらん。先づ藏屋敷に取入りて、二人の奉行と一つになり、防ぎ戰ふべしと、御藏の陣屋へ入らんとすれば、あら思ひ寄らずや、陣屋の鐘一聲を鳴らして、喚き駈出づる一揆原、天帝の旗一流颯と差出す程こそあれ、眞先には、是迄忠臣と思ひし霞田三平、賴み切つたる奉行の中屋甚太夫・山脇七左衞門、究竟の一揆三百餘人、鐵炮を二段に構へ、曳々聲出して押詰むる。此時城兵肝を潰し、今朝の疲

勢に心弛みたる所へ、頼みに思ひし味方は敵なり。何れも腰抜け、力落して働らかず、雑兵士卒は、皆道端に轉び伏し、我々一揆に組すべし、せんすまる〳〵と呼ばはる聲に、猛き武士も力落して、河原の方へ我れ知らず引いて行く。三方の一揆、鬨を作り追懸くる。松倉十兵衛引返し、餘り無念の仕合なり。いかに一揆共、松倉十兵衛とりて聞及ばん、大剛の者なるぞ。一揆の輩、我と思はん者あらば、一鑓の勝負せよと、齒噛をなして踏止る。是を見て松倉小八・近藤仁兵衛・同新八、馬廻廿七騎、一度に噇と盛返す。此時一揆、鐵炮の手を以て打立てなば、早速功をなすべきに、今朝より手間取つて、其上武士大に疲れたるを見て、唯も打拉ぐ者の如く思ひける故、葦塚・大矢野が下知をも待たず、諸手の一揆五六百人、蟻の如く群りつゝ取圍む。松倉十兵衛些とも怯まずして、近習の者に鑓を組ませ、自ら一番に聲懸けて突懸り、一文字に駈破り、矢庭に十三人突伏せければ、近習の面々、思々に高名してけり。是に依つて一揆突白まされ、心驚く所を、筒井丈右衛門・下野小助、胴勢を以て引返せば、一揆四五十人討たれて、蜘蛛の子を散らすが如く逃散りける。大矢野作左衛門是を見て、

深江村・原村等の者共が手業にては、斯る事仕出さんと思ひしなり。敵一度勇を附くれば、今朝よりの疲勞蘇る者なり。いで一當あてゝ見すべしと、馬を弓手に乘放し、鎌鑓を打振つて、斯様の所こそ武士の役目なり。我が働を見よやとて、押懸る松倉勢に、會釋もなく突入れば、松倉十兵衛が近習四五人、鑓を結んで突懸る。大矢野が劒術を得たる其上、十文字の鑓をば、就中通達の者の事故、片膝附けて、前一本を揉上げ、四五本を一同に卷結んで支へたり。城兵共拔かんとすれども、中々働かさずして、元へ手繰り寄せ、鑓の穗先をはつし〳〵と踏折る事、三本二本は、兩手に持つて引奪ふたり。透さず松倉の近習の若者二人、鑓を捨てゝ拔連れ打込むを、大矢野は、父の讓りの二尺八寸ありける忠宗の刀、青海の如くなる大業物を振翳し、二人共に只一打に切倒し、後より進む一人を、横樣に抱いて生捕にし、我勢のそゝけたるを押直し、敵を睨んで立ちたる體、實に異國の燕人張飛、我朝の朝比奈三郎とも いひつべし。松倉小八・近藤仁兵衛、同じく續いて切つて懸る處に、千々輪五郎左衛門躍り出で、大の眼をくわつと開き、島原へ渡りてより、刀は今日が拔き始めぞやと、

父五郎左衞門が、昔朝鮮國にて譽を取りたりける伊勢正宗の大太刀、打振り〳〵打つて懸る。

按ずるに、大矢野が帶する所二尺八寸の忠宗の刀、青海の如くなるといふ。古今銘盡にも、忠宗といふ鍛冶なし。按ずるに其頃のあら身は、當國の名巧忠吉ならんか。又青海といふ名目もいかゞ、青虹ならんかといふ人あれども、爰に肝冷ゆるが如く限りなく凄じきを、九國の里の諺に、青海の如くといひける。又千々輪が刀伊勢正宗、是又勢州には、正宗といふ鍛冶なし。恐らくは村正が子の正重を言誤りたるか。按ずるに彼村正又は正重の二代は、最上の手妙なるを以て、私に伊勢正宗と稱するか。近代に神田白龍子が新刀銘盡に、井上和泉守國定法體して、井上眞戒といふ、俗是を大坂正宗といふとある。然る時は千々輪が家に祕藏して、伊勢正宗といへるか。此類なるべし。

忽ち先に進む近藤仁兵衞が高股切つて、どつと打倒せば、近藤が近習七八人群り懸るを、千々輪大音上げ、推參なりと叫びければ、一太刀も合さず逃散りける。松倉小

八、こは卑怯ぞや。侍共此場を逃げて、生甲斐もあるべからずと、力足踏んで躍り進む。千々輪優しやとて、例の刀を以て、拜打に切つたるに、肩先より脾腹迄切り、兩輪となつて左右へ倒る。近藤新六・下野小助、今は是迄ぞと切つて懸るを見て、葦塚左内是にありと走り懸り、新六を取つて組しけれ、下野小助は、大矢野に討たれける。是を見て原村・深江村等の一揆共、あら夥しの天草の大將達や、實にも一揆を起すならば、斯程の人もなくては、斯る事の出來ぬ事ぞや。天晴大將の御働や。いで大將の跡をくろめんと、六七百人、むら〳〵になつて押懸る。松倉勢は、散々に打破られ、大將松倉十兵衞さへ、捨鞭打つて逃出す。同勢崩れ引いて行く。筒井丈右衞門は、追來る一揆を睨みて、後へ乘下りて働くにぞ、松倉十兵衞等、程を經て引きたりける。されば番頭筒井丈右衞門、其日の出立鎧の毛色、殊に美事に出立ちけれ

ば、葦塚左内・千々輪五郎左衞門・葭田三平・大矢野作左衞門など、いかさまあの鎧は、奪ひ取りて着たきものなり。生捕にして分捕にせばや。おびき出し押包みて、組んで討たんと計りける。筒井も此振を見てければ、隨分身を守り、働き〳〵退きける

が、終に四人に取卷かれける。筒井は年六十歳なり。今朝よりの戰、大きに疲れ、此四人と取組むべくもなかりければ、生捕となりてうき恥見んよりはと、自ら太刀取直し、喉笛に突立て、田の中へ倒れ入らんとするを見て、左内・三平走り懸りて足を捕へ、己れが首を何にすべき。甲冑こそ所望なれと踏倒し、具足を剝取りける。松倉勢此所にて、討たるゝ者夥し。一揆は彼是千五百人、野山を荒し追懸け行く。松倉十兵衞辛き命を助かり、後陣の勢彼是二百人計、馬を進めて行く所へ、小松原の細道より、一手の勢打つて出で、敗軍に打つて懸る。何者ぞと見る所に、彼天帝の白旗一流颯と差上げ、上總三左衞門・天草玄札・駒木根・鹿子木等の一揆原五六百人、關を作つて打つて懸る。松倉十兵衞肝を冷し、一騎駈に駈けにける。此時も松倉勢、討る者麻の如し。已に十兵衞も危き所へ、高久の城に殘りし松倉但馬、軍勢を出して救ひければ、纔に免かれ、城中へ逃籠りけり。城より出づる時は、究竟の勇士五百人、雜兵彼是一千餘り、松倉家中の事なれば、武具は華かに出立ち、嚴めしく打立ちしに、晩景に至り、城中へ返し入る兵は、纔に數十人には過ざりける。一揆今日の

分捕武具又鞍置馬、其外數知らず奪ひ取りぬ。其後一揆前後の備一手となり、兵糧を使ひ休息させ、扨第一は深江村の糧米ぞとて、此邊三鄕の小船近邊の獵船悉く集め、下深江村の兵糧藏の戶前を打毀ち、悉く舟に積載せ、原村の新藏迄運送す。佐治木佐治右衞門に、天草玄札を差添へ、原の本村飯小屋迄遣す。其日は殊に往來汐時はよし。何の苦もなく運び取る。員數二萬八千俵、又大豆四千俵、其外雜穀其限を知らず、只一日の中に運びけり。大矢野・葦塚・霞田等、兼て葦塚忠右衞門が見積に任せ、一揆を四頭に分ち、一手は城を攻め、一手は其後の陣なり。一手は外廓の藏々、又は町にある藏々共を發き、武具兵糧を取り奪ふ。一軍は暫く町中に控へたり。葦塚忠右衞門が積りの如く、松倉の家中、近鄕より集まる兵もありけれども、唯今敗軍の後なれば、心後れて、唯城中を持堅めたる迄にて、雜兵一騎駈出づる者もなし。高久の城下の町々は、近鄕に之なき程の福萬の所なり。其上城中の武具の多き故に、焰硝玉藥の藏も、外廓樹木茂りたる中にあれば、諸手の一揆鐵炮を禁じ、此玉藥藏を發きて、多くの火藥を取運ぶ。扨こそ原の城中、鐵炮棒火矢地雷火にも事缺か

ざりしは、皆此浮田家、貯へありし所の火藥なり。されば此手殊に大事なればとて、惣目附千々輪五郎左衞門自身乘押へて、原村迄引取りける。其外三の丸前武具藏にも皆々押込みて、殘らず奪ひ取る。城中是を見乍らも、只持口定め弓鑓詮議のみにして、一揆共に、悉く武具を奪はれける。守護のあるまじき恥辱なり。一揆は其後町内心の儘亂妨して押行く。金銀米錢はいふに及ばず、衣類器財、作込みし味噌醬油、是等の諸道具椀鍋釜迄一つも殘らず、大波の如く引奪うて立去る。誠に廣大の事なり。此時一揆は諸方に立散り、慾心德に目昏れて、制すと雖も備なし。本陣葦塚忠太夫・同左內・葭田三平・大矢野作左衞門、是等纔に百五十人計り、陣を堅うして待懸けたり。其外上總三左衞門・駒木根・鹿子木等の輩さへ、亂妨狼藉に打交りて備なし。此時城中には、大勢の奇武者集りけれども、打つて出づる評議は一つもなし。一揆唯今是へ攻め懸る。此所を防ぎ、彼所を支へよといひて、鐵炮石弓立連ねて待ちけれども、一揆は折々闕を上ぐる計にて、終に寄せ來らず。翌日未の刻迄城中を竦め居て、亂妨思の儘に仕盡しければ、此裸城攻落して何かせんとて、勝鬨上げて引取りけり。若し城中より附慕ふこともやとて、葦塚・大矢野下知して、駒木根八兵衞・鹿子木左京に、鐵炮の手垂二百人、後陣の左右に備へて引きしかども、城中より一人も出でざりけり。一揆共、心の儘に所得して、戰ふ心更になく、喜び勇みて引取りたり。此勝軍は、葭田三平が奇謀に出で、骨も折らず十分の勝利を得、數萬の兵糧武具を奪ひ取る。尤も大矢野・千々輪が働少しとせざれども、向はで原村に殘りたる葦塚忠右衞門が見積、一つも違はざりける、智謀の程こそ恐しければ、諸軍是を感賞す。

是れ風雷耳を覆ふに及ばずといふ術、敵を、強く攻むる時は、敵武具火藥の藏を自ら燒亡して立退き、空しく數里の空地のみ。一揆の利にあらず。

南島變亂記第八畢

南島變亂記第九

天草、島原を合す事幷四郎時貞渡海の事

葦塚忠右衞門は、一揆八月十三日に始りしより肺肝を廻らし、早速異國伴天連等へも、兩三度迄内通の船を出すと雖も、海路は漫々千萬里を隔つれど、何ぞ物便りあるべきや。又今の世は、吉利支丹伴天連なども、外國を望む如きの器量の人も盡きけるにや、終に便とてもなかりけり。さらば此地に楯籠り、春秋を送るべき城地ありやと見廻りけるに、此原村の上なる古城こそ、誠に天よりなせる名城と見極めければ、内々用意はしたりける。今度葭田三平が謀計調うて、彼の高久の城地、心の儘に押詰め、内々武具火藥、目に餘る程分捕しけるに、其邊の一揆又三四千人も加はりければ、今は天草の本陣一所に合せなば、究竟の勇士二萬人には及ぶべし。是にては

如何なる軍術もなるべしと覺えければ、さらば長崎へ押渡らんと窺ふに、海上には松平薩摩守より、薩摩潟あくねきといふ所に兵船屯し、島津家の一統新納伊集院が輩、一揆若し海上へ出でなば、追討すべき氣色、中々船路へ出づる術は叶ひ難し。長崎の湊岬・大村五島などの名家諸士、威令備うて相待つ。是又小勢にては叶ひ難き有樣なり。此上は渡海の望を止めて、肥前の國中を打平げて、其後謀を廻らすべし。然れば天草と兩所へ分れ入る時は、味方の勢強く、此所へ一所に集り、其上にて計略相定め、出でて戰ひ、入りて守るの評議を極め、急ぎ天草へ此事を申送るに、彼地にも大將四郎を始め、古老大頭小頭等の面々、兼て出勢の覺悟して、今や〳〵と待兼ねたりし事なれば、大きに喜び勇み、舟の用意兼て仕置きたり。先月の合戰に、唐津勢の舟も多く奪ひ置きし事なり。其外に近鄉の漁舟共數百艘に取乘り、天草所々富岡抔にて奪ひ取りし諸財寶金銀・兵糧・武具・雜穀・椽・板戸・柱門など迄、殘らず舟に積み、原村へ押渡り、軍兵男女凡て二萬七千餘人、境の如く靑竹さへなき程の事なり。犬猫迄も連れ渡りしとや。執着の法を尊みし故にやあらん。籠れる時、葦塚忠

右衞門、大勢は無用なり、兵を勝つて小勢にて籠城せんといひしかば、此法義の因緣により渡る。四郎太夫時貞迎に出づる。惣人數六千人、天帝の旗百本、風に飜して打迎ふ。海よりは天草の軍兵男女二萬七千人、前軍一萬餘騎、大將四郎時貞を守護し、大小の旗二百流押立つる。又向の山際には、殘る所の一萬七千人、原の津々浦々山に飜翻して、誠に時ならぬ雪の如く吹靡け、實にも未鑑に、野山白旗を靡けんといひしも、今日に符合せり。一揆の棟梁葦塚・大矢野・天草・千々輪、其外佐志木・葭田・中尾・山脇・上總・駒木根・鹿子木の輩、鎧華かに一縮し、濱邊に下りて、四郎太夫時貞を舟より靜に上せ來る。其粧ひ器量骨柄、此程天草にて隱分拵へたりければ、邊も輝く計にて、吳郡の綾蜀紅の錦、日の光に相映じて、土民共は兼て四郎を知りたれども、今又見違へて、天上より下り來る天帝と雖も、御粧斯くはあらじと恐れ敬ひける。

四郎時貞諸將に式禮して、此程の軍勞を尋ね、國家の懸引を談じ、一人々々に夫々の挨拶を遂ぐるに、皆軍陣の事にして、我家の事一つもいはず。天然大將の器備はりしと見えにける。行末の事は知らざれども、民間に生れ、忽ち四萬餘人の大將と冊かれ、威風天然と備はりしは、誠に不思議の若者なり。禿髮に結直して、唐冠の甲を着したれば、彼の未鑑に言置ける、奇代の仙童といふは是なるらん。此日寬永十四年九月廿一日なり。彼慶長十八年、上津浦の伴天連歸國より、實に廿五年なり。五五の數にぞ合ひし。扨其後原村に假屋を建て、夫々の役人を定め、上下の衣紋も、昔の田作獵漁釣者の類には非ず。富岡・高久を始め、其外諸村の富家大家の衣類等、皆奪ひ取りて配分し着たれば、原村忽ち三都の景色をなし、音聲こそは島の夷なれ、人の往來遊び酒盛の多き事は、花の都にも、おさ〳〵劣らじとぞ見えにける。其後四郎時貞は、我舊宅に立入り、上總三左衞門に始終の物語を聞き涙を流し、一類の人々を寄集め、最懇に挨拶し、其後持佛堂を開き、代々の位牌を並べ、別けて小左衞門日頃願ひし三尊の佛を下し、是に則ち小左衞門・老母・妻女三人の俗名を書記し、上座に

具へて座を下り、生ける父に向ふが如く、不孝の子四郎某、一旦兵書の端を見誤り、家を變じて國となすは、丈夫の本望と申す事を深く尤と存じ、天草の一揆に棟梁となり、嬉しく前後打忘れ、一味致し候所、父母却て是が爲に捕はれとなり給ふ段、千悔すれども甲斐なし。千年此罪を詫ぶるも詞なけれども、頓て目出度上天菩薩の御前にて、申譯致すべし。但人間五十年の世、久しと思へど、永くとも一夢なり。我も人も遠からぬ假の世、頓て彼の國に生れ合ふべき賴みなれ。今已に四萬餘人に守護せられ、此家に立歸り乍ら、此體を御目に懸けざる殘念さ。言葉にも述べ難し。何卒諸將の氣を勵まし、天帝の恩護を以て肥前を打隨へ、念なう父母を迎へ返し、生前の對面とは存ずれども、天下の討手に向ふなれば、最早互に首にての對面とこそ存候へ。但し今、原の古城に楯籠るに極まらば、此館に直に引取り、本陣を我宿所と定め、唯今名を書きし三尊を後に置いて、共に謀を談ずるならば、生前に面を合するも同じかるべし。構へて何事も前世の事と思召し、彌御生害あるべしと、涙を流しいひけるに、一類一座の人々、涙を催して感じける。さればこそ原の古城の本丸は、則

一揆、原の古城に據る

此渡邊小左衞門が座敷なり。彼三尊を床に飾り置きけれども、葦塚忠右衞門・大矢野等大きに諫め、新參の一揆一味も候もの、正法の佛像は、何とやら宜しからずと申すにぞ、原の城の隱れ所荒神が洞とて、人知らぬ穴住居の所へ移しける。されば亂終りて後、此本尊を見付け、四郎時貞こそ他宗門なれ。正法の三尊ありし抔といひしは皆誤なり。別本天草軍記にも、三尊の佛像ありて、四郎時貞は他宗門と書きしは是なり。十七歲の四郎、何ぞ自宗他宗と心を入るゝ念あらんや。一筋に一揆を思立ちたる迄なり。宗旨をいはゞ、いふにや及ぶ、彼耶蘇の邪宗なり。後人能く味ふべし。されば愈原の古城に籠るに定りしかば、一番に先づ渡邊小左衞門が家を、本丸に引きて大將の座とし、是を彼の家を變じて國となす、暫時武道の榮華ぞと思直して勇みし事、是又暫しの本望ぞと、後に聞えてやさしけれ。

原の古城の事幷籠城始末の事

抑肥前島原領原村の古城といふは、九州二島の名城の跡、往古より此城に籠る人、終

原古城の要害

に落城せし例なし。中古鍋島家の出城なり。鍋島の先祖は龍造寺和泉守隆信と、武勇智略の人なり。日本戰國に入りて日久しき頃、天草島へ引籠り、其後此原の要害に出張し、出ては戰ひ入りては守り、終に肥前・肥後を打從へ、今子孫に榮華を殘し、本家は卅五萬石、肥前國佐賀に在城。別家は肥前小城・同肥前蓮池・同肥前鹿島等なり。皆此家の子孫なり。慶長六年天下一統に靜謐なれば、此原城を明捨てられし城路なり。先づ東南は海上滿々として、岸は屏風を立てたるが如く、其上に岩石嶙巡として樹木荒け立ち、半腹迄も常々荒浪岸を洗ひ、舟懸りなく鳥も翔けられぬ要害なり。北は大沼大澤田、人馬の足入懸引叶はぬ切所なり。西一方こそ大手にて、麓は芝原、篦ため形、平地に似たる辻坂、上は嶮岨切所にて、本丸は雲に聳え、麓は常に百間四方の平場あり。矢懸り遠く防ぐに利あり。其前に敵を引受くべき場所、百餘町に連なると雖も、道は纔に一筋なり。南の方に突出でたる尾崎あり。是も昔より出丸に用ひ來る、誠に天のなさしむる要害無雙なり。縱令十萬廿萬の大軍にても、攻むる所は、一萬に餘る人は用なし。防ぐに甚だ便あり。其上山の頂廣うして、

男女大勢取籠るに甚だ利あり。人質は本社荒神が洞などに入れて置く時は、軍を耳に聞かざる地なり。其上に水澤山にして、山上に池七つあり。別して荒神の洞の前に、大なる湧出づる泉水あり。飛石捨石面白く立ち、其間に四季の躑躅、又異なる草花咲き、人も掃除せざれども、常に塵一つもなく、天然と庭のかゝり築山の如し。されば葦塚忠右衞門とても、大勢籠るなれば、此山に思定めける。山上冷水多き事、是第一と頼みける。此水を飲んで見るに少しく辛し。是金氣なり。金生水の理なるべし。今時秋なり、秋は西なり、國は西國なり。西は金に屬すと其白色し。我れ天帝の旗色、皆白木綿を立つ。旁理に叶ひ覺えければ、此山を根城と定めけるに、本社峯の傍に、廻り二抱ひ餘りなる梨子の大木あり。常に此木より風雨起る。されば今度葦塚忠右衞門此所へ來り、繩張を始むるに、此梨子の樹より風雨起りて、繩張を始むる事能はず。三度迄下山しけるが、餘り不思議に覺え、本社の峯に詣で、丹誠をなし申しけるは、我れ今異國の法を引きて、日本の諸將に敵對するに似たりと雖も、全く功をなす心に非ず。只浪人の義を盡し、智勇用ひ盡して、快く戰場に討死せば、靜平

の世の本意是に過ぎず。曾て異州の神をして、此土に廣めんと欲するには非ず。我は草間に飢死する者をして、戰場に死するを榮とする者なり。寺澤・松倉の如く、百姓土民に辛く當る國主をして思ひ知らすも、又我國の益ならずや。神暫く此地を借し給へと、再三して祈りけるに、神も納受ありけん、何の事なく日和も續き、城普請頻に捗行きける。然るに此山、凡て龍造寺隆信の神靈や殘りけん、當城攻口、毎度鍋島家武勇あり。されば鍋島甲斐守を始め、其支旗の向はるゝ時は、一揆いつにても、心の儘に働ならず、鐵炮も多くは的外れて、鍋島家には當らず。此手に多く一揆の大將勇士討死なり。是皆此山神の助力あるに似たり。されば城中の兵も、功はならずと雖も、心の儘の働はなしたりけるとぞ。其上天下の御名代板倉内膳正殿を討取り、六度迄大軍を追崩す事、土民の輩にしては、古今未曾有の手柄、不思議なる働なり。扨葦塚忠右衞門、評定衆・番頭殘らず集會して、申談ずる趣は、已に今度の一揆發端は、八月十三日なり。其以後手合本渡りは、同月廿五日なり。又島原深江村鑓合は九月七日なり。日をさし指を折つて見るに、追々江戸へ注進あるべきなれば、遲くとも十月に入らば、江戸御下知ある、べき討手向ふべし。最早他所へ一人も出づる事無用なり。又此所にて大軍を防ぐ事叶ひ難し。島原の城を攻め取る事は安けれども、分内狹くして大勢取籠り難し。四國・九州に兼々聞及ぶ名城は、幸ひ此原村の上の古城は、日本國中の軍勢、三年攻むるとも落ちぬと、國諺にもいふなれば、此所へ一所に楯籠り、心々天下の大軍を引受け、花々しき軍して、慶長已來の眠を覺さすべし。折よく若し一二年も籠城せば、如何なる變、又は如何なる天運に叶ひたる味方の、出來まじきにも非ず。其上幾度も〳〵天下の討手を駈惱まさば、自ら名は日本に響き渡らん。近き世大坂籠城して、樣々軍に討死してさへ、子孫の名譽とはいふぞかし。兎角籠城然るべしといひければ、評定衆・番頭迄も、此儀尤も然るべし。天草四郎時貞に伺うて、九月廿六日は吉日なりとて、彼の原の古城に鍬初あり。繩張は葦塚忠右衞門司ると雖も、龍造寺隆信の仕置かれたる古法を考へ、自分の作略を入れず、本城・二三の丸・惣曲輪・帶廓、又虎の口・升の方・矢倉々々・水の手の扇繩・切所の詰々迄、大奉行には葦塚忠右衞門・天草甚兵衞、其外赤星・千々輪の輩・十七人の評

一揆原の城を築く

定衆・卅二人の中老分、立替り〳〵駈廻り、下知裁判殘る方なく、二萬人の歩卒、身に引かけ相働き、出水の如く民家を毀ち、大なる家の材木を持運びて、一時に城を取立つる。惣百姓我家とて、拵ふるを殊の外喜びければ、人足晝夜の分ちなく、二萬人とは申せ共、ぬけ〳〵四萬餘の人民共、手傳ひて拵ふる程に、最早本城より外廓・二三の丸・詰の丸・人質廓・荒神が洞・道々・柵・逆茂木等、虎口々々の石弓迄忽ち出來し、城中諸役人の假小屋兵糧竈所、殘る所なく建揃ひ、塀櫓迄悉く出來濟めば、片端より戸板に帋を貼り、墨にて狹間を切り、或は繪計りの所もあり、或は切開けし所もあり、手寄に付けて仕上げたれば、遠目に懸る時は、誠に金銀箔地の堅め、鉛瓦白壁の櫓々と見交す計り、目を驚かす有樣、寄手の肝をぞ冷しける。扨兵糧・玉藥・鹽・味噌・薪十分に取納め、天草・島原の二ヶ所には、惜むべき物一つなき程に取込めたれば、何不足なしと見えける。されば十月十四日を吉日として、肥前守四郎太夫時貞、諸將を引具し入城する。前後の行列目を輝かし、勝軍の禮に、燈火三度燈し、勝鬨と上げさせて、原の城に引移り、諸事の法令、葦塚忠右衛門が下知を守り、諸場の奉行諸役人、悉

く相定め、兼て天草人積り上げ、猶ほ又四老頭を定め、所謂上總三左衛門・馥田三平・佐志木佐治右衛門・會津宗印、中老分には大浦四郎兵衛・林田藤平・上津玄蕃・久田左衛門・渡邊傳左衛門・堂島・津島、小頭の小將は布津村吉藏・秦澤休澤・高來傳治・山本與茂作・中尾甚太夫・山脇七左衛門・八代喜太夫、其外遲參猶多く、皆諸手の攻口を配り、引分々々番所を定め、身を塵埃より輕んじて、一同志を合せ、一城牢と金鐵の如く、惣じて廿一手組なり。天帝の旗三百流、廿一組の小旗には、皆横文字の相紋あり。何一つ不足なく調ひ、究竟の一揆二萬千三百人・足輕一萬八千九百餘人、都合四萬二百人、死を一擧にぞ守りける。

されば此時愚民は、兵糧諸具の類夥しきを見て、是にては落つる事あらじと思ひけり。葦塚又折々強き事いひて慰め、堅城には仕立てたれども、大矢野・天草・馥田・赤星などの類、切て此間に、大名の一所も、此宗門に傾きし人ありて、使者にても差越すならば、城中頼もしく思ふ所なるべきに、諸國何の通路もなく、又豐後の萩原へ、越前の一伯公流罪なれば、密に引込んでもやと使を遣しけれども、是又下

賤の人を用ふる事なれば、利害說くとも屆かず。哀れ此頃に、彼吉利支丹黑船の一艘も着けよかし。無理に商人船なりとも、大勢遣し引込んで、城中に楯籠らせ、諸國の公邊を恨むる人々を、味方に引入るべきものをと、方々聞合せけれども、運や天に叶はざりけん、其年は商人船さへ、異國の通路はなかりける。されども此年の八月の通路、程經て南洋國へ通じけん、寛永十七年に、尋ね旁の商船一艘着岸す。吉利支丹も近き島々は、七八百里の間なれば、日頃は一日に、必ず便ある地も多かりけるに、日本神德の故にやありけん、葦塚・千々輪など、心中には覺悟してけるとなり。抑南蠻吉利支丹國は、別名イスハニヤ幷ポルトガル・カステラといふ。海上日本國より凡一萬二千餘里なる由、此國世界の繪圖を以て見る時は、唐土日本よりは、西の方に當る國なり。然るに南蠻と號するは、此國の手下亞媽港、呂宗等、日本の南の方に當る故、南蠻と號する者なり。一說に、南海に往來する故、南蠻と號すといふ。此說非ならんか。唐土日本に來る外夷の船、南海より往來せずといふ事なし。皆南蠻といふべき理なし。されば此耶蘇宗は、天然と南島の

人是に歸す。今此天草硫黃島も、中國より見れば西海なれども、實は是れ南島なるものなり。已に琉球國史を、南島史といふが如し。故に此書も南島といふ。夫れ亞媽港は、廣東國の南に當りて、日本より海上九百餘里、呂宗は臺灣國の南に當りて、日本よりは八百餘里なり。是に近き小島マンエイラハ、マンカヘツタハカシナン等あり。アケレスは、日本より海上一萬千七百里。

是等の國々、寛永十五年より、長崎入津は停止なり。されば華夷通商考に曰、寛永十七年庚申五月十七日、呂宗國より黑船一艘、長崎に入津す。同六月中旬、江戸より上使あつて、南蠻人七十四人の內、六十一人誅罰あり。船は津ろすん浦にて燒亡せらる。殘る十三人は、日本に來る事本意にあらざる事、明白なるに依つて赦免あつて、唐船の古船乘捨一艘給はりて歸國す。本國にて此旨を語り聞かせ、再び日本に來る事勿れとなり。上使加賀殿氏なり。長崎奉行大河內氏なりといふ。是等彼葦塚が通路に依つて來る所なり。

南島變亂記第九畢

南島變亂記第十

板倉內膳正出陣の事 幷 板倉着陣の事

斯くて江戸表には、西國天草の注進懶の齒を引くが如く、先づ大坂迄は、船にて多く來ると雖も、大坂よりは一所に陸路になり、押續き追々早打、寺澤・松倉は勿論、長崎奉行西國所々の御代官諸大名は、鍋島・黑田・細川・有馬・立花・小笠原等を始として、每日五度、大坂へ早打船着きければ、卽時に又御注進は、青竹棒の時なし。宿次諸大名の注進は、自分の宿の早打にて、大坂より江戸迄の往來、道幅五人並にして、走り續きたりとかや。言語に及ばぬ火急の注進なり。町中の雜說には、異國より黑船來りて、唐の大軍、西國へ攻め入りたりとの評判、何の譯なく騷ぎ以の外なり。江戸表の早打、噂區々なる故、騷動上を下へ返す。西國方の諸大名、何れも安き心なく、如何

なる椿事になるらんと、諸人騷ぎ以の外なり。江戸表、始め評定の時の老中酒井讃岐守・阿部豊後守・安藤對馬守・松平伊豆守・板倉內膳正五老の衆中、幷に若年寄・寺社奉行を始として、諸人殘らず登城、一大事の御評定故に、御三家御譜代の衆、井伊・本多・榊原を始め、皆々御出席、評議區々なり。此節當世の智惠者とて、諸人持囃す松平伊豆守、進み出でて申さるゝは、今度注進の次第を察するに、寺澤・松倉兩人の領分仕置宜しからず、非分の義あり。百姓原徒黨して、奉行代官を殺害し、是非に及ばず一揆を企つると相見えたり。然る上は誰なりとも、上使として下向あり、此所に於て卽時に訴に出づべし。御聞屆あるべきに極り、忽ち平均すべきの條、餘り難しき騷動に及ぶ程の事にもあらず。又畢竟百姓原、大將とてもなき一揆風情、天下に對し何と軍仕るべきや。併し先づ寺澤・松倉兩人は領分の事、早速着到さるべき事に存ずるの由申さる。諸人此儀に同じ、此日は是にて退出す。早速上聞に達し、寺澤・松倉は急ぎ下國あるべしとの事なり。兩人畏り奉り、卽時に出立づべしとは思へども、遠路といひ、殊に今度國元の亂合戰の節なれば、武具の用意路次の費用、彼是

調ひ難くして、五七日延引に及びける。然るに今度殿中の評定、水戸黄門公一人御不得心なり。其中に西國より段々注進重なり、次第に廣がる樣子により、毎日登城御評定之あり。然るに一揆も、俄に原の古城を取立て、人數三萬に及び楯籠るとの注進、是に依つて殿中御評定も段々變り、寺澤・松倉の面々油斷なく、路次も早打にて登り申すべき上意なり。扨松平伊豆守信綱の裁判として、御目附中兩人着登させ、一揆の樣子糺明し、訴訟の事あらば聞屆け、寺澤・松倉へも差圖致し、何事も悉く早速江戸へ注進あるべき旨相定る。時に水戸黄門公の御意には、近頃合點の行かざる伊豆守批判なり。今度の一揆發端は、耶蘇切支丹の邪宗より事起り、天草島中一筋になり、唐津留主居發向の刻、島子・本渡の渡しに合戰し、一揆希有の軍慮を廻らし、唐津勢に打勝ち、多くの物頭共を討取るの樣子、是中々百姓計りの寄合にて、左樣の働思も寄らず、地頭に恨み不足一遍にて、代官を殺す事ならば、早速江戸へ頭分の者罷出、公儀直訴に相願ひ申すべき事なり。百姓原計にては、命を捨てゝも、是程には久しく一味はせざる者ぞや。案ずるに此儀は、事を切支丹に寄せ、內には先年大坂落城の節、死殘りたる者共、或は武道通路の浪人共、困窮に迫りて事を起さんと計る者なり。然れば天下の沙汰として、粗忽の下知は無用なり。今目代等の者を遣しても、夫に應せぬ時は、程を知らざる天下の評定と、人の嘲を受くべし。其上海陸數百里を隔てたる所をば、度々江戸への注進も、中々往來日數懸りて無用なり。其內急の事勝なるべし。何にしても此度大變大事なり。唯御名代として、老職の中一人差遣されて、機を計らひ其變を考へて、西國の諸大名へ注進して御下知を傳へ、早速追討然るべし。度々江戸へ注進して御下知を相待つ、近頃延引の事に候と、急度仰せられしかば、此儀又尤と相極り、御評定も變りて莫大の沙汰となる。併乍ら此上御名代の御下向に於ては、定めて早速一揆平伏すべき事は必定なりと、上下さまで驚く人もなかりけり。唯水戸黄門公御一人、事を大事に取らせられ、將軍家へも仰上げられ、御直捌になり、仰出さる。先づ鍋島・有馬・立花の面々御暇下され、早速西國御發向、逆徒追討仕るべしとの御仰にて、御目附衆御目代等差添へられ、段々急に發向せらる。又天草島一揆追討使として、細川越中守在國より、直に發向仕るべ

板倉重昌島原に向ふ

しとの御下知、是へも御目代御目附衆差添へらる。御目代の御上使は、板倉内膳正重昌を召出され、上意には、今度天草・島原表百姓原、一揆を企つるに付、追討の上使仰付けらるゝ上は、下知裁判の事、時宜に依つて差圖を加へ候て、早速平均仕るべし。諸大名軍法を守らせ、麁忽の働不覺なき樣、申付くべきなり。着滯る事あるに及びては、近國の諸大名へ下知催促苦しからず。御添下役には、兵糧意儉等の爲として、豊後府内の御代官石谷十藏・牧野傳藏兩人差添へ、此兩人、板倉内膳正下知に隨ひ申すべき旨、御奉行の奉書下り、板倉内膳正には御時服御拜領、暫時も急々に打立つべしとの御下知蒙り、内膳正は御城より直に出立ありければ、家中被官は左右を聞き、追々道中迄駈付々々する。近代未聞の騒動なり。されば門外海道筋は、早打早追諸國の使者諸國の大名、況や御上使、何事なるぞとうろたへ、御殿中此儀に携はる人々は、何事に水戸黄門公の御うろたへや、さしてもなき百姓原の亂に、多くの大名の動く事ぞやと、内心に笑を含みけり。斯くて板倉内膳正重昌は、御城より小人數にて、急々に出立ありけるに、士卒追々駈付け、又道中筋幷に近國の諸大名よりは、

附使者是あり、段々大勢になり、此人數皆々手前々々の賄にて、他の世話にかけず。惣じて斯樣の節は、上使には自然の御用等もあるべきやとの用意に、道中筋城主郡主、御上使御馳走の爲め、物頭役一人づつ、鐵炮足輕等身上相應に出す格式なり。已に惣軍勢三千餘人に及び、板倉殿御威勢日々に盛なり。元來江戸表にて、水戸黄門公も、事を大切に取らせ給ひ、其外の人々には、別に騒ぐ事もなく、先づ觸先使大坂より今日明日の御着にては、軍船調ひ候段聞えければ、幸ひ兄板倉周防守、京都所司代相勤め居る故、則立越え軍議を聞きてもと、京都板倉殿へ立寄り申され候へば、板倉周防守、殊の外喜びにて、御上使御入とて嚴重の掃除、家中へも不禮是なき樣にとの事なり。内膳正御入候へば、頓て周防守出迎ひ、居間の書院に御通り、人々の對面床しく演べ、睦しく御咄、盃など出で、内談私用は格別なり。扨周防守申されけるは、今度は大役忝しと思はるべし。人も多きに、斯樣に兄弟共、顯官大役仰付けらるゝ事、身の爲め家の爲め大慶之に過ぎず。殊に今度其元儀、一揆追討正使の由、滿足の儀に候。扨副使相役には何方にて候や。飛使を以てなりとも相役へ挨拶申入度事

に候とあれば、内膳正申さるゝは、いや副使相役と申すは御座なく、我れ一人に仰付けられ候なり。周防守驚き、左候はゞ、又副使相役を願ひ申されざるやと。其時に内膳正申されけるは、今度仰付けらるゝ上意急に候て、座席より直に打立ち申す程の族、其上百姓一揆の事に候へば、副使相役抔願ひ申すも、いかめしき儀と存候て、一人役御受仕候由申されければ、周防守不興の顔にて、つと立ちて勝手に入られけるが、近習の侍を呼んで、内膳正殿に、表書院に御通りなさるべき旨なり。内膳正心得す思はれ乍ら、表書院へ通られければ、周防守布上下に改め出迎ひ、白木の三寶に土器載せ前に置き、正使御一人の事に候はゞ、一時の御油斷も恐多く候。今日暮に及び候とも、本海道の伏見へ御出、御本心尤に候。申迄はなく候へ共、今度一揆の追討、若し御心に任せぬ儀候はゞ、御覺悟と存候。武士の上にて珍しからず候へ共、門出の儀に候へば、兄弟今生の暇乞の盃を仕るべしとて、土器にて酒宴ありて相別れ、其夜の中伏見へ出御、宿陣ありけるとなり。さればこそ正月元日の合戰、思合さゝるる事となりぬ。後に此事江戸表へ聞えければ、内々水戸黄門公にも悔み思召すにや、

其故にこそ、重ねての御上使松平伊豆守、正使として下向の時は、副使戸田左門、相役の命を蒙り、則此以後彌必ず相役を定められけると聞えしなり。扨板倉内膳正は、大坂へ着せられけるに、船調ひ兼ね、如何の事とや思はるゝ内に、四國の船奉行蜂須賀阿波守より、御上使馳走の船、夥しく浪を分けて漕附けば、則是に取乘りて、九州へ赴きける。風波殊に荒く、舟懸も所々滯りければ、阿波船能く力を盡し漕ぎ急ぎければ、程なく豊後の國に着岸し、府内の目附石谷・牧野の兩人へ、兵糧の相談を遂げ、何れも召具して日數重なり、十月廿五日島原表へ着陣なり。高久城主松倉豊後守先達て到着、上使を待受け、本丸へ迎へて、諸軍勢は皆々家中の居宅を點檢して、當分の陣營とす。上使の御着陣に付、諸方より相伺ひ御下知を待つ。第一に長崎の御代官馬場三郎左衞門、來りて御下知を承り、早速歸りて長崎を堅め、張番嚴しく相守る。又寺澤領分天草島一揆追討使は、先達て細川越中守御下知を蒙り、出陣ありと雖も、一揆は悉く天草を引拂ひ、島原へ引退き、殘黨一人もなく靜謐なる故、其勢直に島原表原城へ向つて、一揆追討致度旨相願ひ申さる。江戸よりも御差圖來

り、板倉內膳正差圖次第。原の城へ向はるべきに極りければ、一番に寺澤・松倉と同陣して、原の城へ討手に向ひける。細川越中守も、後に內膳正差圖に依つて、原の城へ向はるゝなり。斯くて上使の御本陣へ、領主を始め近國の諸大名段々發向して相詰めらるゝ。高久の城下は尺寸の地もなく、大軍滿々たれば、此威光に恐れ、一揆原早速御訴訟申上降參すべく思ふ所、案の外原村古城の一揆共、靜まり返つて音もなし。御上使島原へ着陣は、十月廿五日の未の刻なりしに、其夜城內より、杉の折一荷浦肴一籠・手すきの天草帋二丸、右三種を臺に載せて尋常に仕立て、文箱一つ、上書には、御上使へ上ると書付けてあり。夜明けて番人是を見て、卽時に石谷・牧野兩目附へ注進する故に、其儘上使へ訴へて、諸役人立合にて、扨こそ推察に違はず、百姓共訴訟を出したるぞ。先づ急ぎ開き見よと、杉の折を見るに饅頭なり。其丁寧なる事、上方の製と雖も及ぶ事なし。折の仕形、獻上物の法を外さず。是を以ても、城中萬事自由を知るべし。天草いかにも淸らかにつき立て、籠肴も何れ上魚計りを選んで丁寧なり。是城內萬事自由にして、土民共にあらざるを見せて、寄手の肝を拉

がんとす。扨又文箱の狀に、

乍恐謹而申上候。今度遠路御上使御下向、御人數被差遣候事、私共身上冥加相叶、過分之至存候。我々一揆雖似麁忽之儀、天草島中幷島原領百姓原、近年者地頭寺澤兵庫頭・松倉豐後守邪曲利欲苦仕置申事年久鋪、偏不安生涯故、傾耶蘇宗門相背公邊法令、罪科死刑相究者歟。依之不得止事如斯之仕合候。急度可被加御成敗之條、當然之儀奉存候。猶其節期一戰時候。恐惶謹言。

寶永十四年丑十月

一揆首頭

渡邊四郎太夫時貞

葦塚忠右衞門在判

大矢野作左衞門在判

葦塚忠太夫在判

千々輪五郎左衞門在判

御上使上る

斯の如く調へありければ、御上使を始め、各委細御披見なされ、大に立腹あり、慮外千萬、言語を絶したる憎き奴原なり。第一公儀を輕んじ、討手の武門を侮る條、此上もなき逆賊なり。卽時に踏潰し、今に思ひ知らすべしと、齒を噛んで憤り、頓て軍勢を催促あるに、兼て江戸表より御下知の衆中、急ぎ雲霞の如く馳集り、末々の諸將迄大に憎んで、嘗て一揆を和らげ、降參さする謀はなかりけり。是皆葦塚忠右衞門が肝より出で、斯く一揆を憎ませ、味方を堅めける謀なり。若し初より慈悲を以て、二心なく和睦を先とせられば、日本一州を敵に受けて、二心を生せざる者あらんや。忽ち一揆われ〳〵になり、快き一戰もあるまじきに、葦塚が一計より鐵石の如し。板倉內膳正も、慶長十九年大坂の役、木村長門守と同じく、若年の使節、天下に目を驚かせし英雄、智勇發明の人と雖、少し短慮の失ありて、終に葦塚が謀略に、出る甲斐なく、土民の爲に命を殞する事は後卷にあり。是又天なるかな命なるかな。惜むべし惜むべし。

赤星內膳在判
天草甚兵衞在判

南島變亂記第十畢

板倉內膳正出陣の事幷板倉着陣の事

南島變亂記第十一

原城一番攻の事幷立花勢敗北の事

板倉内膳正島原着を聞いて、兼て江戸表より御下知の衆中急ぎ馳集り、先づ第一に肥前佐賀龍造寺の城主鍋島信濃守勝茂・嫡子紀伊守元茂・二男甲斐守直隆父子三人、其勢二萬人にて着陣なり。立花左近將監・子息飛驒守八千餘人、有馬中務大輔・同玄蕃頭・二男左衞門尉、彼是一萬三千人、其外追々着陣。上使の下知を守り、島原高久の城下に野陣を張り、翌日御上使幷御目附等、原の城邊に着陣、近日惣攻あるべき軍令、段々其備組手配等、大概城中より見透して、兼て覺悟の前なり、其手配を定む。先づ本丸に惣大將四郎太夫時貞・天草甚兵衞・同玄札・森宗意・軒山善左衞門・有馬休意・葦塚忠太夫、凡て一揆二千餘人。二の丸には葦塚忠右衞門を大將として、同左内・四鬼

丹波・時枝隼人・堂島對島・上總三左衞門・駒木根八兵衞・鹿子木左京、一揆原二千人楯籠り、三の丸には、大矢野作左衞門を大將として、頭分は大江治兵衞・有馬久兵衞・戸島宗左衞門・松竹勘右衞門・三宅治郎右衞門・鵜川八三郎・菅寸善兵衞、健民二千二百餘人。滯曲輪惣構へは、大將千々輪五郎左衞門・赤星内膳・葭田三平・山田右衞門・楠浦八兵衞・大浦四郎兵衞・久田七郎右衞門・打田木工之亟・有馬長助、其外小將集勢五千餘人にて堅めたり。大江口は布津村代右衞門・會津宗印・上津玄蕃。二の丸取出には田崎刑部・上總助右衞門、何れも集勢千五百人。出丸口は柄木右京・佐治木左治右衞門二千餘人。夜廻頭多崎久藏・池田清左衞門、其外使番目附役兵糧奉行鐵炮頭、夫々の兼役相勤め、惣軍勢二萬三千餘騎、鐵炮九百挺・乘馬七十疋、其外の女童は細野口浦邊に出で、磯菜を拾ひ貝を取らせ、海苔を集めて食事の助とす。旗は二間に一本づつ立て、皆白木綿なり。誠に高山に白雲飜り、高間の雲といひつべし。其下には、必死を極めたる諸浪人・百姓原四萬餘人、英氣を含んで楯籠る。敵寄せ來らば、馳落さんと待懸けたり。斯くて板倉内膳正大物見として、城の近邊五六丁迄乘付け見廻し

給ふに、案に相違の形勢かな。高山の城取軍祕を盡し、白旗三百流西海の嵐に吹靡かし、其陰に軍勢往來して、虎口々々に鎧武者共多く相交りて、湯洗ひ馬引立々々して、要害堅固にし、勢森々然たれば、中々急に落城すべき氣色ならず。諸大將も心に大きに驚き乍ら、勇氣を表に顯はして、追付け一攻あるべしと、何れも辯を揃へ申さる。板倉内膳正申されけるは、此城の體、一揆に勝れて甲斐々々しく見ゆれば、此旨江戸へ注進し、西國大名は、一邊に出勢せらるべき段、重ねて申觸れべし。然れども百姓原の事なれば、手業の程何事かあるべきなれば、一攻惣懸りに乘付け見るべしとて、十一月十四日を一番攻と定め、追手の先陣は立花父子、其勢一萬餘騎、其頃は御名代板倉内膳正重昌三千餘騎、幷役人諸國の添使、中の手は有馬一家一萬三千人、寺澤・松倉先陣たり。出丸口は鍋島父子、御目附榊原飛驒守父子相添へ、都合四萬九千人、竹束龜の甲の類悉く用意して、曳々聲上げて攻上る。追手の先駈立花左近將監は、士卒を下知して、將軍家御名代の御先手なり、他人に先を越えらるゝなと、兼て申含めらる。元來勇猛の立花の家筋、家中士卒に至る迄、誰か一人後るべき、勇み進んで、寅の刻より城下に押詰めて、夜のほの〴〵と明くる頃、一同に鬨を上げ、彼篭たり形なる平草山を、段々押上る。其勢大龍の雲を卷上るが如し。大手の曲輪は、一揆の勇將千々輪五郎左衞門堅めたり。態と旗の手を下し、閑り返つて控へたり。立花の先陣小野和泉・十時三彌・立花五郎左衞門三千人、爭ひ進んで押上る。され共城中靜まり返つて音もせず。扨は一揆恐れて本城につぼみたるぞ。只一時に揉破れと、竹束龜の甲を打捨て、既に堀際迄詰寄する。千々輪五郎左衞門是を見て、時分はよしと思ひ、白旗一流颯と差上げければ、是を相圖に四方の櫓、思も寄らぬ林の中石の間にも、旗を擧げ鬨を作り、健に鎧うたる武者立上り、組頭堂崎・大江・布津村等下知して、鐵炮二百挺筒先揃へ、一時に打出す。寄手大きに驚き、すはや竹束龜の甲よといふ所へ、四方より大石大木を投懸け〳〵戰ふ所へ、大筒小筒先を揃へ、隙間なく打立つる。天草は元來鐵炮の出所、皆々名人共なれば、あだ玉は一つもなし。忽ち先手二百餘人打殺され、先手一軍捲り落されて、半死半生の者數を知らず。是を見て千々輪五郎左衞門下知を傳へ、大江・時枝・楠浦・堂島四人を大將として、一揆一

千人、四組に分けて鬨の聲を上げ、鑓先を揃へて、山を眞下りに突いて懸る。寄手の大將立花父子三人、麓より是を見て、百姓原に追立てらるゝ事やある。追竦めて乘破れと、身を揉んで下知あれば、一番に立花三郎右衞門踏止つて、只今投掛けし大木の上に躍り上り、鎗を振つて立戻れば、十時三彌兄弟・小野和泉・綾部清兵衞、押續いて取つて返し、此勢に付きて、平田平左衞門・岡田久右衞門・小野彌十郎を始めとして卅七人、鎗を揃へて進みける。一揆千餘人と鎗を組みたり。然れども此芝居は、すらり〳〵と辷り、下り坂なれば、我れ知らず落下りて、物別れになり、立花三郎左衞門計りは、足溜に材木あつて、唯一人大勢に取込められ、終に討死したりける。立花飛驒守是を見て、口惜き次第なり。此所にて討死せばやとて、馬より下りて突いて上るを、父左近將監遙に見て、飛驒守討たすなと、采幣を取つて下知あれば、恥ある勇士共千餘人、天下御名代の御覽の前ぞ。穢く引くなと恥しめ、鎗を下げて押上る。此時飛驒守廿歳、若武者の勇氣に任せて、一番に鎗を入れらるれば、一千の精兵一同に捲り立つる。十時十兵衞一番に立ちて、堂島對馬に手負はせ、其他の一揆七八

人突いて落す。此時千々輪五郎左衞門は、出丸の合戰を危みて、行向ひける後なれば、二の丸より葦塚忠右衞門此樣子を見て、一揆二千餘人を引いて懸合ひ、横の山手に鐵炮の手を伏せて、同勢を目に懸けて、選み打に打落す。眞先に進んで懸りける十時十兵衞是を見て、鎗を上げて葦塚に打つて懸る。葦塚忠右衞門心得たりと鎗を組み、片膝折つて突懸けたり。葦塚忠右衞門手練の老將なれば、十兵衞あしらひ兼ね、其上葦塚左内、父の働を危み、入替らんと横に進み來るに、心驚きけるにや、片足を踏外し、遙の谷へ轉び落ち、岩角に打當り、微塵になつて死にゝける。一揆共一同に聲を擧げ、天帝の罰思ひ知れと、手を叩いて噇と笑ふ。立花勢今朝よりの爭に疲れ、又此の勢に氣を呑まれて、怯むと見ゆる處を、兩方の山手に下知し、谷越に鐵炮を打懸けさせ、寄手漂ふ所を、鎗を入れてぱつと追下し、其間を乘廻して下知をなし、人數を纏めて、足輕く城内へ引退く。立花左近將監腸噛をなし、一揆共に追下さるゝ條、天下の物笑ひ、口惜き次第なりと、怒らるゝ事なれども、物離れになりしかば、又無理なる事も流石なり。本陣指して引退く。今日此手の家老立花三郎左衞門・十時

十兵衞・平田治部右衞門、其外武士討死、雜兵は手負夥し。中の手は松倉豐後守・寺澤兵庫頭兩人は、面々領内の一揆なり。先陣は勿論身に懸りたる事故に、平草山を一文字に攻上る。殊に大手の將立花家、早軍始まる故、大きに勇みて坂脇迄押上りたり。續いて有馬父子兄弟三人一萬三千人、備を配つて駈上る。此時寺澤家老三宅藤右衞門、富岡より歸つて供奉したりけるが、兵庫頭を諫めて申しけるは、當城は中々猥に落つべからず。其上此邊を見たる所、足場能きやうに候へども、軍になつて、以ての外敗軍の地なり。如何といふに、地足下りにして、難儀の場所なり。此中段の足場能き所に旗を立て、味方の先陣追立てらるゝ時、横鎗に急度持こたへ給へといふ。軍老の見積もだし難く、寺澤兵庫頭、坂を左へ押上りて陣する故、有馬父子は、坂中より麓へかけて陣を備へたり。去程に城中の一揆原、寺澤・松倉の旗を見て大きに喜び、外の敵千萬騎より、唯望む所は此兩家の内、大將の首を討取り、日頃の宿意を晴らすべしとて、帶曲輪に居合ひたる一揆三千餘人、赤星・千束・山田・駒木根・鹿子木等、郭を拂うて打出で、闕を上げ鐵炮打懸くる。松倉の軍勢、本渡・深江兩所にて、大きに手懲して、一揆を見ると、蛙の蛇に向ふ如く形縮まり、漸々鐵炮を打返す。是を見て一揆共氣を得て、大木大石を投懸け、一人にても踏止まる者あれば、駒木根・鹿子木等選み打に、鐵炮にて打落し、隙間なくかけしかば、少しも堪ふべき。松倉勢一番に崩れければ、寺澤先陣も同じく敗軍し、足取下りの平草山、すらり〳〵と辷り落ち、一人も返し合せて、戰ふ者はなかりけり。一揆共は勝に乘り、闕を作りて切つて下る。有馬先陣敗軍に押立てられ、既に崩れんとする所を、寺澤の家老三宅藤右衞門、待設けたる事なれば、諸軍を下知し、大長刀を水車に廻し、旗本を以て盛返す。眞先に進む一揆二人、左右に薙ぎすたる者共なれば、颯と引いて、敵慕ひ上れば、荒手を替へて切下る。三宅藤右衞門三度の駈合に、敵六人迄討取つて、坂中に踏止まる。藤右衞門が働、敵味方共に感じける。其中城方に引具開えければ、華塚下知して兵を引上る。此手も一揆共勝軍して、闕を上げてぞ引取りける。

鍋島甲斐守武勇の事幷甲斐守乳母神前に死する事

此時出丸の攻口は、鍋島の受取なり。抑今度逆徒追伐に、一番攻より落城に及ぶ迄、諸軍第一の勳功は、鍋島家と甲斐守直澄なり。自身の働き比類なく、一番乘前後三度、七路の戰皆切勝つ。殊に落城詰の丸合戰、武勇を顯し、其名天下に震ふ。此鍋島家は、先祖より武功西海に轟き、太宰少貳が末孫、肥前國に居住する龍造寺和泉守隆信の末、平左衞門尉清久が子孫、鍋島加賀守直茂、關ヶ原の節、東照神君へ內談にて、幼少の御公達並に女中方を、伏見の御城より京へ退け參らせ、大功を立てらるゝ。子息信濃守は、西國方として御敵對すと雖も、老父加賀守直茂に免じて、罪科御免のみならず、本領安堵せられ、其後信濃守、御當家へ忠勤して、武名高く家門繁昌せらる。此所に甲斐守は、右信濃守二男。然れども國腹にて、父の愛子なり。此人の傅鍋島三左衞門、無二の忠臣にて、彼が妻、乳を參らせて育て上げ、當年十九歲になり給へり。彼の乳母は男子の如く、常々側を離れずして、唯養ひ君の出世を望み思へ

り。其上氣猛く義厚く、女には珍しき人柄なり。若殿大切の餘り、二男にて國腹なる事を悔み思ひて、常々佛神へ御出世を祈らるゝ。然るに今度島原出陣に付、女乍らも伴せんと願ふを、夫三左衞門も、深く止めてける。又甲斐守も、世間の流布旁、無用の旨申留めらるゝ。乳母聞いて、少しも苦しからず。古木曾義仲の妾巴は、いつも軍の伴して、一方を承り、士大將一人の替を勤む。城の九郎が姉の坂額女は、越後の國荒井に岩船の城を守る。結城友光が母は、主君の公達を軍中に介抱せり。近くは慶長五年勢州津の城に、富田信濃守の妻が働、山口右京が妾の乳母は、加州大聖寺の戰場に討死す。何れも武勇名高く、譽を末世に殘し、笑ふ者一人もなし。昔より例ある事なれば、是非伴せんと望む故、此趣信濃守へ伺ふに、勿論心底は尤なれども、併し其頃の世とは、大に風儀變りたり。我差圖にて召具せん事、世上の稱もいかが。決して無用にせよと申渡さる。留主に殘るを乳母大きに殘念に思ひ、女の身は口惜しき事なり。此上は死して後、供すべしと思詰めて、若殿の產神にて、龍造寺の後の山、瀧尾大明神に參籠して、

鍋島直澄の武勇

按ずるに佐賀黑髮山大智院、寺領三百石にて、鍋島家父祖の碑あり、山上に嶺頭石あり。此下に大池あり。往古鎭西八郎爲朝、大蛇を射し所なりとて、大蛇が池ともいふ。此水、瀧尾の瀧へ落つる。

此明神の神前を立去らず。此瀧の水に打たるゝ事三日、夫よりひしと斷食して、一情に祈願せしは、今度御氏子鍋島甲斐守直澄、島原表の軍功諸人に秀で、隨一の手柄を顯はし、家名を興させ給へと、自ら女の事故、戰場の供叶はず、唯今神前にて、斷食立願一命を取らせ給へ。魂魄は戰場に立ちて、若殿を守護し參らせたしと、一足立に立ちて、終に一寸も去らず。六十に近き乳母、神前にて立竦みに息絶えたり。誠に珍らしき忠節なり。さればこそ甲斐守の乘馬、陣中にて不思議あり。又彼の乳母後神に立ちて、ようせうの如く見えしとかや。時に寬永十四年の冬より、原の城攻、甲斐守先陣して、出丸を攻めらるゝ事五度、殊に勇を顯はし進まるゝ。曾て薄手も負はず。翌年二月六日、出丸一番乘、本丸詰の丸、共に人先に乘破り、城中宗徒の者共、多く此人の手に死す。比類なき勳功とて、肥前國蓮池五萬三千石を賜はり、本家後見として、

天下の稱美に遭ふ。昔より人の一念も確ならずと雖も、是又奇異の老姥なり。されば同日卯の刻に、諸手の勢、皆軍を押すと見てければ、鍋島家にも劣らじと攻上る。元來此出丸は、山尾崎鵜首形にして、遙の上に松山あり。山の裾、殊の外狹き所にて、上は大きに廣し。既に逸雄を先手坂中迄攻上れば、鍋島信濃守下知して、惣軍一時に鬨を上げて押上る。出丸の大將柄木左京亮・佐志木佐治右衞門二千餘人、鐵炮二百挺にて堅めしかば、些とも恐れず、寄手を思ふ圖に引寄せ、鐵炮を隙間なく連べ放し、漂ふ所へ、大木大石を投落す。先手の軍勢、谷底へ捲り落され、上り兼ねためらふ所、鍋島甲斐守直澄、生年十九歲、水色の鎧に金唐冠の甲を着し、紅の母衣をかけ、白旗の差物にて、枯草の山邊、唯さへ上り難きに、昨夜一通り時雨れて、所々は氷つてあるを、馬上ゆゝしく只一騎、眞先に楯の一重も限らばこそ、人もなげにぞ乘上る。敵も味方も是を見て、あれよ〳〵と驚きけり。鍋島の大軍、主君の乘上らるゝに勇み、先手の先陣是非なく押上り、出丸近く押詰めたり。三の丸の惣大將千々輪五郎左衞門是を見て、其爲にこそ、滯曲輪を懸けたり。いで打落して見すべしと、横合の

谷切より、百挺の鐵炮を一度に打立てたり。蜘の子の如く集りたる鍋島勢の事なれば、仇矢は更になかりけり。先手大きに難儀に思ふと雖も、山の麓には、主君信濃守、麾を取つて控へ給ふ。眞先の中段には、甲斐守、馬上にて乘上らるゝ由なり。此節一揆原の的になつて、討死すべき約束なるべしと、一人も退かず、竹束楯を突竝し、第一には横矢を防ぎける。出丸の大將柄本左京・佐志木佐治右衞門時分はよしと、山上より大木大石をばつと投懸け漂ふ所へ、鎗を揃へて一千人、喚き叫んで突き出でたり。楠浦八郎兵衞・大浦四郎兵衞・久田七郎右衞門、五百餘人の健武を引きて、横合に鎗を入れ、鍋島の先手二千餘人、眞先に逆に捲り落さる。山の口は狹し、立振舞なり難し。人雪崩をついて敗北する。其中に甲斐守直澄、乘つたる馬の動きもせず、流矢一つも當りもせで、太刀拔翳して突立ちたり。楠浦八郎兵衞是を見て、天晴敵や勇將なり。此人を討取らば、寄手惣敗軍となるべしと、鎗打振つて躍り懸る。甲斐守につこと笑うて、靜に馬を立向ふ。楠浦焦つて鎗を上げ、甲斐守の鎧の胸板をはつしと突くに、茗荷の金物に當りて、鎗の穗先ぽつきと折る。こは無念と鎗を

捨て、手取にせんと飛懸るに、忽ち直澄の馬は高嘶して、兩足を上げて、彼の楠浦をどつと踏倒す。あら口惜しやと起上るを、甲斐守馬上より、拜打に切られけるに、頭二つに切割られ、眼睛迸りて死してけり。是を見て信濃守、采幣を取つて身を揉み、甲斐守討たすな、此勢に乘上れと、敗軍を立直し、二陣を繰替へて攻上る。鍋島三左衞門、甲斐守の馬に縋り付き、暫く退き給へといへども、松山の砦乘取らずんは、誓つて退くべからずと、猶も進まんと向はれけるこそ、誠にゆゝしき大將なりと、感せぬ人こそなかりけり。

南島變亂記第十一畢

鍋島甲斐守武勇の事幷甲斐守乳母神前に死する事

南島變亂記第十二

千々輪五郎左衞門勇戰の事幷馬術鍛練の事

千々輪五郎左衞門は、追手の合戰、味方打勝ちぬと見えければ、出丸口心元なしと、楠浦等を遣しけるに、早速馳返り、楠浦討たれて、寄手又松山へ取上ると聞えしかば、こは不思議なり、楠浦は並々ならぬ武藝の達者、心勇猛にして、一騎討の勝負などは、容易く討たるべき者に非ず。又進む追手の中、悉く追立てたるに盛返され、寄手又進む由心得難し。いざ駈向ひて、駈散らさんと打向ひしが、此體を見て大きに怒り、彼が馬を乘覺えたるや。いで物見せんと、唯今湯洗しける馬に鞍置き、卽時に打乘つて、彼深木七郎右衞門が鎧の黑絲縅に、白毛の切つたる差物にて、大身の鎗を提げ、出丸の虎口に乘出したる勢、誠に爽に見えたりける。此時甲斐守は馬を駈据ゑて、

龍造寺和泉守隆信五代の孫、鍋島甲斐守直澄なり。一揆原出でて降參せよ。さなくば忽ち踏潰すべしと、大音聲に呼ばはり給へば、千々輪是を聞き、こはそも器量に似合はざる惡言なり。いでさらば名乘るべし。我先祖は尾形三郎惟義が嫡流、肥前國數代居住す。我父は加藤肥後守清正の家臣、朝鮮日本に武勇の者と呼ばる。然るに加藤家斷絕に依つて浪人する、千々輪五郎左衞門といふ、恥ある武士なるぞ。然りと雖も運極りて困窮し、今一揆の內の其一人なり。我手の內の鎗を試みて、荒言は吐き給へ。いざ參りぞふと、山の平場なる所にて、兩方人交もせず駈合ひける。天晴能き見物なり。千々輪は大坪流馬の名人、昔の本間孫四郎・小栗判官が曲馬にも、おさ〳〵乘增さるべき有樣なり。諸人の目を驚かす。鍋島甲斐守は、日頃左迄達者とは思はざるに、此馬鞍壺の靜かさ、疊の上に座する如く、

術を振うて駈合ひ、若し流矢にて味方打もやと、雙方の矢玉を犇々と止めける。山上山下手を上げて見物する。古今稀なる壯觀なり。千々輪は鎗の達人にて、數度甲斐守の鎧に突當ると雖も、一鎗も裏かゝず。千々輪大きに怒り、我鎗先には、天魔も耐るべからず思ひしに、不思議の事とて鎗を捨て、太刀を拔翳して押懸り、はたと切る。鍋島も心得たりと鎗を捨て、太刀の勝負、犇々と切結ぶ。雙方兩眼の光星の如く、受けつ流しつ、拂へば開き、蝶鳥の翔けるに似て、雷光の閃き、早業太刀音、今は早敵も味方も、酒に醉ひたるが如く、二人の爭ひ見物す。于時甲斐守の乳人三左衞門、只一人此所へ來り、あれ〳〵御大將の、斯る匹夫業はあるべからず。そこ退き給へ。老武者の腕弱くとも、己れ一太刀の勝負ぞと、千々輪に向ひて働けども、五郎左衞門が荒馬踏立て〳〵、近所へ寄せず。終に三左衞門を踏飛ばし、勝負の付かぬは殘念と、甲を取つて投捨て大童にて、無法微塵と打合ひしが、勝負あらざれば、千々輪いひけるは、天晴武藝通達の大將かな。拙者常に思ふは、縱令如何なる人なりとも、三太刀とは合さすまじと思ひしに、中々の事及び難し。御大將も今爰にて是非勝負

し、討死あるべき所にも非ず。又某も、此所にて討死する時は、城中の一揆共力を落し候者多し。旁以て無用なるべし。大勢敵味方の見る所、御大將に譽を讓り奉る。是我が臆するに非ず。此城戰終る時は、必ず我首は、君に差上げ申すべきなりと、馬の頭を引返し、平一散に、出丸の松山へ乘入りたり。鍋島の諸軍勢幷に御目代・御目附衆・榊原等を始め、諸手一同に甲斐守を譽む。此上は早々引取られよと、一同に呼ばはる故、甲斐守直澄、武勇を顯はして本陣に退かる。誠に古今無雙の働、諸人兩手を上げて感ずる計なり。されば此甲斐守、出丸七度迄乘り、終に原城、翌年二月廿八日落城の時、千々輪五郎左衞門が首、契約通り渡しける。既に寄手惣軍退去する時は、未の下刻なり。是れ原城の一番攻なり。諸軍勢皆々陣々へ歸りければ、討死手負夥しかりし程に、上使板倉內膳正殿を始め、御目代御目附大に驚き、扨々侮り難き城の有樣かな。此體にては、急々には落城すべからず。さらば西國の分は、境を隔てたる所も軍勢を催促し、大軍を以て一拉ぎに押潰すべし。先づ此趣江戶表へ注進すべきなりと、評議大きに變つて見えたりけり。

此時追手立花氏の軍、子息飛驒守、振悉く能かりしとなり。中軍押上る節は、天草の民兵内足津長右衞門・多崎久藏などが手より、敵に難儀させよとて、不淨糞を城中より、運び出して投懸けたり。立花の軍勢、殊の外迷惑しける。葦塚是を聞き大きに戒め、陣中は軍神といふ者是あり。不淨をなす方、必ず負くるものなり。故に妖術さへ好まず。斯る事ゆめ〳〵あるべからずとて、大きに戒め、後より鹽を吹き、清水を打懸け〳〵しけるを、立花飛驒守又糞を撒くぞとて、退かれけるとなり。此時は水なる事、定なりとかや。

天草外本に、穴を掘りて糞を流して防ぐといふは、斯る一手切のある事なり。自然と糞道に掘當りし事なるべし。

東武再び評定の事 幷 黒田賴母諫言の事

御上使板倉内膳正重昌、十一月十四日の一番攻、城中強く防ぎ働きしかば、暫く軍勢を退け、此上は第一長崎の警固となし定めて、諸將に差圖ありける。是異國の賊船、如何なる手組にてか、押寄せまじきにもあらずとて、俄に大村因幡守・五島佐渡守・相良遠江守は、長崎の警固と定められる。又松平大隅守は、兵船を揃へて、一揆原若し要害を離れ海に浮み出でば、一人も餘さず打取るべしとて、内々磯邊の方へ陣を押出させ相構へたり。御名代板倉殿は、本陣を小高き處に移し、目印の旗押立て、夫より段々陣屋を構へ、御目附中幷諸方の附使者人數、次第を守りて相備へ、鍋島父子は、出丸の攻口五丁隔てゝ幕を張り、立花父子・有馬一家の陣は、追手へ押出し、竹束を重重に付けたり。寺澤・松倉は差當る敵故、一番に備を出し、城中の通路を切取らんとす。先づ江戸より一左右之なき内は、城攻無用との評定あり。斯くて板倉の注進、江戸表へ着きければ、時の老中諸役人、殿中にて御評定ある。何れも大きに驚き、先づ原城の地形繪圖を見るに、山上の陣取、古法に叶ひ、虎口馬出、地理を得て兵糧兵具澤山に、必死の勇兵三萬計、殊に鐵炮は、出所の種ヶ島の者共楯籠るなれば、中々難しき軍なりとて、一番攻仕損じたる次第、鍋島甲斐守の武勇抔、悉く言上に及ぶ。水戸黄門公、扨こそ予が斯くあるべしと思ひし事よ。是はゆゝしき大事なり。此時

四國・中國、萬一逆亂發する時は、天下の大事ぞや。急ぎ大勢討手を差向けられ、然るべしと仰せられし故、西國在城の諸侯は、直に駈向ふべし。又在江戸の輩は、急々御暇遣され發向あり、大名の人別には、細川越中守忠利・同若狹守、惣軍勢三萬餘人、秋月佐渡守・伊東出雲守、兩將合せて八千五百人、松平右衞門佐光之・黑田甲斐守長重・同宮內少輔、惣軍三萬餘人、小笠原右近將監・同苗內匠頭・同備後守・同壹岐守、惣軍二萬八千、中川佐渡守・木下右衞門佐・松平東市正・毛利主膳正、凡九州の軍勢殘らず發向す。凡て十萬餘人、夜を日に繼いで出陣す。是故に、西海道には上を下へと返し、御使番御目附中、皆々其一組々々毎に差添へられて、事の嚴重なる、詞に述べ難し。自然落城遲延に及ばゝ、追々注進すべしとの事なり。去程に西國の大名、悉く原の城に馳集り、大軍靡然として、御名代板倉殿の陣へ向うて法令を守る。板倉殿下知として、細川越中守・同若狹守、惣軍三萬餘人、兵船にて下深江村へ着岸なり。其船を以て、城の東南の方櫛山口・細野谷は、此城の裏手にして、女童の楯籠る丸あるべし。此口へ大筒を打込んで、城中の肝を取拉ぎ、早く降參せんの定なり。黑田左衞

門佐・嫡子肥前守・二男甲斐守・同采女正三萬人は、入替へ押詰むべしとの事なり。之に依つて立花左近將監・嫡子飛驒守は、中の手に替り、有馬一家殘らず水の手の口・扇の廣場二三十町程の內に陣屋を備へ、始の軍勢合せて十六萬二千餘人、各甲の星を輝して、稻麻竹葦の如く打圍めて、皆陣取堅固なれば、目を驚かす有樣なり。城中は百姓原の一揆、定めて此勢には弱るべしと思ふ所に、何を賴み何(いつ)を待つてや、一揆少しも怯まず、愈旌旗を押立て〳〵、重々に虎口を相守り、靜に城を相堅む。敵攻上らば駈落さんと、鎗先揃へて待懸けたり。一揆の心ぞ不敵なり。諸大將幷御名代・御目代、何れも板倉殿の本陣に會合して、軍議區々なり。其內に有馬中務少輔殿、殊の外老年なりけるが、進んで申さるゝは、先づ城內は百姓原なり。浪人少々打交り楯籠れ共、大將とすべき者なきやらん、若輩なる四郎といふ百姓の子を大將と聞く。軍法にも、五事七計各皆御存知の上なり。されば敵味方を算ふるに、味方は數代武門の舊家なり。軍兵十六萬、皆是譜代恩顧の武士なり。敵は一揆土民なり、其上俄の

寄合勢なり、大將はなし、殊に二三萬に過ぎず。多く城中に旗を動かし太鼓を打つは、女童の部にして、切つて出づる勇兵は、五六千人に過ぎずとこそ思ふべければ、富士禪定する者、夜中に上る事、當世專ら致す。夜中は脇へ目の行かず、歩む程の明なれば、高き事に、心の驚く事なし。今も其の如く、多くは篝を燒き松明を持たせなば、矢掛鐵炮弓などは、明らかになるべし。味方今宵暮前より支度して夜攻をなさば、十六萬に四方の敵、何ぞ敵すべき樣なし。一定落城と存候。一刻も早く今晩城攻御尤と申さるゝ。其時一同に、成程御尤の了簡とありける時、末席に有合ひける黑田賴母は、陪臣乍ら大家より、皆々二三人づつも、軍功の者評定へ召連れらるゝ故同席なり。賴母は、則黑田右衞門佐二男にて、肥前守の弟なり。家老黑田三左衞門の養子なり。知行三萬石、組士相備、共に五萬石の身上なり。父子共に此席にあり。細川殿長岡有吉小笠原二木寺澤の三家も此席にあり。則進み出でて申されけるは、末席の賴母體、御意見をこがましく候へ共、評定に候へば申上ぐるにて候。有馬公御意の如く、七計を論じては、一つも相調ひ敵し申さず、片押にも潰し申すべき事乍ら、併し七謀にも增りて、城內に利を得たる事、男女强弱はともあれ、必死となつて地の利を守る。誠に金鐵の如く堅まり居候へば、城內悉く死し盡し申さずば、城は落つまじきに候。一人死を極むれば、萬人に敵すると申候へば、輕く思ふべきにあらずと存候。夜軍の事、御尤にもあるべく候へ共、我々承り候は、敵大軍にて候か、或は敵に油斷の隙候かを考へ、夜打夜軍は仕候ものと承り、堂々たる天下の兵、明らかに勝申す筋御座候に、却て夜軍なされ候はゞ、是味方變の基と存候。我等存候は、先づ城內の一揆共の心を和らげ、土地々々の親類を以て御招き、段々善言を以て御宥めなされ、浪人と百姓との心割々になさる方、御尤に存候。是等も手緩く思召候はゞ、九國の中へ御觸候て、健なる人部數十萬人御集め候て、水の手出丸扇繩一面に掘崩させ、軍勢の中よりも、段々加勢を入れ掘崩させ、通道を拵へば、嶺上の大木大石崩れ落ち、足懸のある究竟の大路二筋三筋は、などか出來ざらんや。其砌大軍を法の如く立て、嚴しく攻立て候はゞ、落城と存候。今此の儘に御攻候はんは、人のみ打たれて、功あるべしとも存じ申さずと、憚る所なく申しければ、長岡二木有吉三

宅其他大名衆〔以下原本缺文〕

南島變亂記第十二畢

南島變亂記第十三

一番攻夜軍の事幷有馬壹岐守討死の事

斯くて諸手の軍勢、何れも待設けたる事なれば、寛永十四年十一月廿四日の七つ時諸手一同に用意して、惣軍十五萬八千人、不意に陣を押出して、竹束を突き楯を突き押上る。此原の城は、扇を廣げたる如くの芝山にて、上る程狹く、末又要害なり。黑田小笠原立花等、逸雄の先手六七千人、蟻の集る如く押上る。折節嵐浦風時雨れて、芝原には霙交り吹懸り、草の上は軍勢足、霜解のして道辷り、歩み難しと雖も、諸萬人相互に鎗引合ひ聲を掛合ひ、坂半過押上り、鐵炮を打たんとすれども、味方の鐵炮に雨覆なき故、火蓋に水入り、口藥に雪吹込んで火移り兼ね、火繩の火も消えて、中々打たれず、最早嶮しき城攻なり。一揆原少しも騒がず、山上塀の上は、玉火松明

灯燈數千燈し立て、其勢唯白晝の如く、法令嚴重なり。兼ねて葦塚忠右衞門籠城の砌、駒木根に談じて是をなす。玉火といふは、樟腦を臼にてはたき、古酒を以て練固め、丸くなして火を付くるに、水中に入りても消えず。殊に冬浦の事なれば、時雨勝なるべければ、樟腦松明たるべしと、櫻の皮に岸藻を卷きて拵らゆるに、大雨の中と雖も、雨はじき能くて消ゆる事なし。其上火繩は、朝夕殺生に馴れし手細工なり。雨覆を懸けたる故に消えず。故に城中鐵炮は彌盛にして、唯百千の雷落懸かる如く、打懸け〳〵鯨波を上げ、石材木を投下し、此所を詮と防ぐ程に、先手夥しく討たれて色めき立ち、進み兼ねて見えける所に、出丸口には、例の紅の母衣水色の鎧着て、或は水色の鎧の事、武要雜略・卓要略程に見えずいかゝ。或は曰、黑糸なり。又曰、薄黃なり。然るに此水色といふは、銀のさね桃色の糸を以て威すをいふ。名目の出所未詳。

傳に、水色は桔梗なり。源三位賴政に給ふ所の紋、水色なり。今桔梗を用ふるなり。

鍋島甲斐守直澄、馬を三角に躍らせ、眞先に駈上らる。信濃守本陣の軍兵共是を見て、押續き馳上る。然るに甲斐守の手は、兼ねて玉火の用意したりければ、乳人鍋島三左衞門、出丸の道筋四方へ打配りて攻上る。枯草に火燃え付きて、風は山下より吹上るに、小雨は少しも構はず、段々松山へ燃え上る。すはや出丸は乘破りたるかと、諸手一同に鬨を上げ、彼篭ため形なる芝原六七丁横幅十四五丁の所を上らんとすれども、外々の諸軍は火もなく、空は暗し雨は降る、足は辷り踏止まらず。此の所を見澄して、城中より柵陰へ出で、一時に石弓を切つて放ち、是は藤綱にて、大木大石を木に結び付け置きたるを、今繩を切つて落すなり。其響は、百里にも聞えやすらんと夥しく、寄手の大軍周章てける所を、鐵炮を以て思ふ儘に打つ程に、死人手負山の如く、遙麓へ捲り落されて、一人も進む者なし。死骸手負山下に累々たり。今晩最早戌の時に至り、惣大將軍板倉殿の先陣迄、崩れ懸りしかば、御名代より下知あり。て、城の構嚴重にして、守透間なし。夜軍は叶ふまじきぞ、皆々引退き、明日軍議あるべしとて、軍使東西に駈廻りて、下知頻なり。故に幸の事なりと、元來心に進ま

二番攻夜軍敗る

ぬ者多ければ、黒田・立花・小笠原・長岡・二木等、皆々引具を吹きて、先陣を纏めて引返す。此所に出丸口鍋島甲斐守直澄、諸軍の引具・上使の早使來ると雖も、少しも聞かぬ振して、味方を下知して攻上る。此所城内の一揆原は、彼の玉火平草山に燃え付いて、一面に煙立上り、雨に降ると雖も、霜月の枯草にて、其根は乾きたる故、唯一盧に燃え上る。風は浦より吹上ぐるに依り、出丸の小屋先危き故、一揆の大將柄木右京・佐志木左治右衞門等、四方の小屋を守つて火を防ぎ、立悴ゆる計りなり。時に爰なりと甲斐守直澄、手勢を引いて押上る。又後より信濃守の軍勢共、追々馳付き、大筒小筒を打交へて、平打に打懸けゝるに、一揆原大きに打縮められ、既に難儀に及びけるに、葦塚忠太夫・軒山善左衞門、五百餘人にて打つて懸る。二の丸よりも葦塚忠右衞門・同左内・鹿子木・駒木根・四鬼が輩千五百人、鐵炮百五十挺を兩道に分けて、芝原の火には嘗て構はず、出丸の松原に寄添うて、一時に打立ちたり。鍋島殿の軍兵、玉筋に行懸り、散々に打立てられ、皆矢除して平伏に、後退りにぞ退きける。甲斐守些とも恐れず、諸手皆退きけれ共、當表に於ては、敵に一鎗も合せずしては退くまじ

と、獨言して馬を乘直し進まれたり。鍋島三左衞門、馬の水口に縋り付き、鐵炮頻に候。平に退き給へと申しければ、甲斐守眼を怒らし、天の矢は遁れず、汝知らずや、木曾殿粟津の流矢、退くとも、命助かるにもあらず、同じく進めと下知せらるれば、葦塚忠右衞門、此體を見て四方を下知し、諸軍皆軍を退けたり。爰は例の鍋島の荒武者よ。千々輪が話にも聞置きたり。大將一騎にせば、討取るに易かるべしと、白髪頭に鉢卷しめ、諸手の英士を勝つて、瞳と突いて下るに、鍋島の先陣三千餘騎、雨雲覆ひ、黒闇の如く、寒風烈しく、鎧皆氷り手はかゞまり、殊に案内は知らず、終に一揆の勢に突立てられ、遙の麓に捲り落され敗軍なり。其中にも甲斐守唯一騎、少しも退かず、馬を竪横に躍らせて、自由に働き給ふ。此馬一度も爪折せず、一揆の者共近く進み寄ると、踏倒し喰殺す事夥し。忽ち一條の血路開けて、大路を乘るが如し。一揆の大將葦塚父子、此働を見て、いかさま鎗打つ者の類は仕損ずべし。唯組打にして、手取にすべきなりと、大手を廣げて駈寄り、甲斐守も葦塚と見てければ、爰は敵地なり、おびき出して討取らんものをと思はれければ、駈寄れば馬にて踏ませ、馬を捕

ふれば切拂うて、麓の方へ下られける。葦塚父子、三度迄甲斐守の鎧に飛付きたれども、宵の時雨に鎧氷り、手辷りて取外す。甲斐守、葦塚が白髮頭を打割らんと、三度迄切りしかども、葦塚も軍術逞しき者なれば、終に討たれず、互に我知らず麓迄下りけるが、葦塚ふと心付き、南無三寶、是は段々敵に引出さるゝ者なり。夜中の働詮なき事ぞと、父子二人平一散に、出丸の松山へ駈上りけり。甲斐守も、終に馬を乘下して、物別れにぞなりにける。葦塚も城中に歸り入りて、奇代の勇將と、甲斐守直澄を感じける。されば城中にも、此後出丸攻口を大事に抱へて、左右なく打出づる事なかりしとぞ。有馬中務少輔賴利（後番頭從四位侍從）は、今夜の合戰、全く我口より出で、諸手の嘲になり口惜しゝ。其上黑田賴母の金言をもどき、重ねて彼に詞遣も面倒なり。爰に軍議して功を立て、嘲を防がんと思はれければ、坂中に陣を止め、嫡子賴元・二男筑後守・同姓左衞門佐など、會集していひけるは、昨日の評議は、御名代に決すと雖も、謀は先づ當家より出す。諸手多く此謀に同意せず、黑田賴母が詞を、尤とするが故に、我一身の恥辱たり。然らば何卒當手不思議の功を立て、嘲を防ぎて、公儀の御

感に預かるべし。手を空しうして、諸將と同じく麓へは引き難し。思ふに今宵總軍押詰め、城中も能く防戰したる事なれば、其後大きに油斷すべき事眼前なり。是信玄初陣に、海野が城を落せし時に似たり。今引歸して、當手計り明日の朝合戰を勵むならば、一方はなどか破らであるべきや。今城中を見るに、水の手出輪、さまで防ぐ體もなく、又城中軍勢多く守る體もあらず。明日新に城攻する時は、御名代の軍令を背くになりなん。只今今晩引後れたる風情して、山の半腹に夜を明し、明日明行く横雲の頭に、急に切つて上らば、戰不意に出づるなり。必定大功あるべしといひければ、何れも尤と同じける。有馬家一族一手一萬五千人、靡々と用意をなす。先手の大將有馬壹岐、進み出でて申しけるは、定まりし上、申すはいかゞに候へども、此謀尤に似て候へども、同じくは衆人と同所に御陣進められ候方、然るべく候はん。今日の事は、一時の評定なり。恥といふべからず。明日の軍は披駈なり、萬一打負けぬる時は、又々天下の笑種なり。且油斷すべき輩とも見えず、只一手にて向ふ時、若し城中の一揆一所に打合うて、大勢出づる時は、當手戰六かしくもや候はんとい

ひけるに、中務大輔大に怒つて、汝臆病の事をいふ者かな。斯迄軍議決定の上に、何ぞ敢て勝負の論をいひ、敵の大勢を恐れんや。今不思議の功を立て、諸手の大軍に鼻あかすべし。汝心に服せずんば、退いて我本陣を守れ。近頃、日頃に似合はぬ言分なりといはれければ、壹岐守赤面して退き乍ら、今日を討死と思ひ定めてければ、古郷へ遺言を細々認め、翌日潔く討死遂げん。されば壹岐守は、中務大輔の伯父聟にして、五人の家老第一の人なり。斯くて葦塚忠右衞門、常に此扇子繩の水の手、隨分心を配り相守る。殊に今晩の勝軍に、城中怠るべきやと思ひ、彌下知を堅く打觸れて、自身見廻りて、扨敵陣の體を窺ふに、有馬一家の陣、一手は殺氣ありて、未だ山の半にあり。葦塚則ち千々輪五郎左衞門を呼びていひけるは、有馬一類軍、山の半に屯す。今晩強味を見せて、明して戻る樣子には見ゆれども、地氣横に明かにして、陣氣伏せず。我が不意を計つて、明日朝駈の城攻を、心懸になしなん。君今一千餘人を引いて、此陣に密に加はり給へ。我れ又城兵を以て相助けんと、約して別れける。有馬中務大輔は、斯る用心あるべしとは夢にも知らず、夜已に明方になりしかば、有馬の先陣有馬壹岐守・同隼人・同織部、三千人押續いて、旗本段々に攻上る。城中には兼ての下知なれば、閑り返つて、武者一騎も出合はず。扨中務大輔是を見て、敵は油斷す。唯一揉に取詰めよと、先陣中陣一固りになつて七千五百餘人、押上つて見る所に、上段は平野にして、究竟の足場、元來山水を受持ち水の手なれば、自ら扇子の手になり、上は少しの平場あり。寄手彌喜び、主人の見積神機妙算なり。諸手に肝を潰させんと、旗の手を差並べ、同音に鬨を噇と上る頃、漸々夜もほの〴〵と明渡る。霜に朝日の照輝き、殊に華かにこそ見えにける。山下の寄手惣軍是を聞き、すはや有馬一家の衆より、扱駈の城攻するは、定めて內通の者ありと覺ゆるぞ。遲れては言譯なしと、惣陣一時に先立ち、我も〳〵と旗の手を進むれば、板倉殿俄に惣軍に下知して、一騎一卒も馳向ふべからず。暫く樣子を見るべし。扨は有馬一家の軍勢、夕の戰以後、夜中故に引遲れ、山の間にて夜を明し、序能く夜軍の仕殘しと覺ゆるぞ。軍法を正し、其後一時に攻上るべしとの下知故に、諸軍勢は備を立てゝ見物なり。晴がましき攻口なり。有馬の先陣彌旗を進め、最早水の手扇子繩に取付

かんとする時に至り、帶曲輪溜の戸颯と開きて、千々輪五郎左衞門打つて出でたり。黑糸の鎧に御幣の差物、大身の鎗を提げて、一揉の中究竟を選び澄して三百人、雷光の如く突いて出で、無二無三に打つて入り、城中の四萬人、一同に竹筒を吹き太鼓を鳴らし、鬨の聲を上げて勢を助く。有馬の先手肝を失ひ、足を立兼ぬる所を、左の方の林の內より、大矢野作左衞門、紺糸威の鎧の、日に輝くを着て甲は着ず、髮を四方へ亂して、鬼神の如き勢にて、一揉三百人、拔連れて切つて入る。有馬勢散々に亂る所、葦塚左內是又三百人の一揉を引いて、奔雷の如く突いて出づる。覺えず先陣捲り落され、死する者麻の如し。有馬壹岐守馬より飛下り、鎗を振つてなだるゝ味方を叩き直し、敵は百姓原なるぞ。麓の味方の見る前恥かし。只此の所にて討死せよ。此軍、敵に揚卷見する程にては、いかんぞ生きて遁るべき。中務大輔眼前なるぞと、詞を荒らげ下知しけるに、鐵炮頭長岡七郎太夫、實にも壹岐殿の詞の如し。諸手に拔駈し乍ら、此所を引いて何方にか立退かんと、竹束を打捨てゝ、立並んで突いて懸る。是に勵まされて、先陣悉く取つて返せば、一揉又突立てられて引返す。有

有馬壹岐守戰死

有馬賴利敗軍

馬壹岐、腰なる采幣取りて、一度に本陣を差招けば、有馬の同勢一同に鬨を上げ、勢に乘つて打上る。葦塚忠右衞門是を見て、此手若し手強き時は、諸軍皆進むべしと、駒木根八兵衞を呼んで、有馬壹岐を討ち給へといふ。心安く領掌して、片山の松の繁に立隱れ、十夕玉をため澄して待懸けしに、壹岐守、今日を最期と思ひければ、猶も進んで駈向ふ。駒木根矢頃能くなりしかば、どうと切つて放しけるに、哀れむべし九州の英士有馬壹岐守、胸元に血煙ばつと立ちて、眞逆に谷底へ打落されたり。是を見て、後に續いて松澤半助・長崎大治郎・佐野三郎左衞門・尾崎宇八・柏原德左衞門等を初として、究竟の武士廿八人、千々輪五郎左衞門が備に駈込んで、心能く討死す。扨鐵炮頭長崎七郎太夫は、引けば引くべかりけれども、壹岐が詞をや恥ぢたりけん、大矢野作左衞門が陣へ向ひて、一足も去らず是も討死す。之に依つて先陣三千餘騎、大敗軍になつて逃下る。況や城中より天草玄札、一軍を引いて有馬玄蕃頭の陣へ向ひ、大斧を振つて切つて入る。諸軍色めき立つを見て、千々輪・葦塚・大矢野、鐵炮を中陣に打入れて、短兵急に切つて下る。城中より又々堂島對馬・千塚善左衞門・

四鬼丹波、千五百人を勝つて、遙の小道より押返して押包むに、有馬の本陣見崩れして、十方に分れて退きける。御名代板倉内膳正殿の先手へ崩れ懸りしかば、御本陣も色めき立つを見て、大矢野作左衞門、手を以て額に當てゝ、快く一笑して曰、御名代の一陣を駈破らば、冥途黄泉の土産たるべし。逃ぐるは追ふに如かずといへり。後には葦塚老將あり、心安しとて、強勇の一揆三百人、有馬勢の逃ぐるに追縋うて、面も振らず打向ふ。千々輪五郎左衞門・葦塚左内是を見て、大矢野を討たせて、城を保つ事難かるべしとて、同じく切つて下りける。有馬の陣を駈破つて、板倉勢の先手へ切つて懸るに、黒田の陣より是を見て、御本陣打たせては叶ふべからずと、黒田左衞門佐、一軍眞丸になつて、横合より切つて懸る。千々輪・葦塚駈合せて戰ふに、黒田賴母二陣を納めて、鐵炮を二段に立て、太皷を打つて靜々と懸り來る。大矢野いふやう、爰は敵地なり、久しく戰ひ難し。殊に寄手皆集らば、我々は小勢、いかに働くとも叶ふまじ。寺澤・松倉の陣は、日頃手並は知りぬ。此陣を駈破つて歸るべしと、黒田の先手を駈拔け、御本陣を打捨てゝ引返し、松倉勢の眞中へ、面も振らず切

つて懸るに、先陣松倉十兵衞、一番に逃出しければ、忽ち道開けて、直に寺澤の陣に打入るに、此の先手已に崩れんとする所を、三宅藤右衞門、例の大長刀追取つて水車に廻し、向ふ一揆二人切伏せ、諸軍を下知して支へける。大矢野作左衞門鎗を差延べ、ぐさと突きけるに、三宅藤右衞門が膝頭に當つて、尻居にどうと倒れけれども、猶退かず防ぎ戰ふ。其中に黒田の先手、後より鐵炮を放し懸くれば、大矢野、三宅を打つ事能はず、葦塚左内・千々輪五郎左衞門十方の敵を拂ひ、三將軍勢を引纏ひ、終に山上へ駈上る。黒田勢隙間もなく喰留めけれども、千々輪・葦塚・大矢野、踏止り踏止り打拂うて引上る。猶も慕ひ見えけるにより、葦塚忠右衞門斯くと聞くより、鐵炮の手を山の尾へ下し立て、兩方より打たせけるに、兼て飛鳥も外さぬ手利なれば、選び打立つるに、黒田勢辟易してためらふを見て、三將は心靜かに、人もなげに引入るを見て、黒田勢先手、齒噛をなして喰止めんとすれども、兩邊の伏兵に恐れ見合す内、本陣より引取るべき下知頻なれば、終に物別になりて、引返しける。今日有馬勢の討死夥し。殊に有馬壹岐守・長岡七郎太夫を失ひければ、中務大輔殿も、暫く自分

差控へられけるとぞ聞えし。あたら士を多く損ひし事、殘念の至りなりける。

南島變亂記第十三畢

南島變亂記第十四

加州光高公討手望み給ふ事
　幷大坂廻船借切になし給ふ事

斯くて原の城彌強く、二番攻も味方討負けゝれば、諸軍唯城を見上げて拳を握り、取圍む計なり。急ぎ此旨江戸へ早打頻なれば、東武評定も日々に重なり、既に西國諸大名殘らず一城を取卷く所、城中も嘗て弱らず、剩へ寄手を物の數ともせず、御本陣迄騷がすの條、案に相違の剛敵、不思議の一揆ぞと、初めて諸人驚く。今や四國中國への大名へも下知ありて然るべきや、重ねて又御老中御名代にても差越され、早速事落着せらるべき事、此上又他所に一揆動亂出來るに於ては、ゆゝしき天下の大事たるべきなり。先づ早く武功の人を選んで、重ねて御名代に差越さるべきに極まり

ける。初めより水戸黄門公、事を重く取り給ふを、今更感じ奉る。此頃加州大守中納言利常公の御子松平加賀守光長公は、水戸公の御女を、公方家の御朱殿として下し置かれ、威勢盛に在江戸なりける。先頃中納言利常公には、金澤在府なりければ、今度の西國の動亂、早打を以て御告ありけるに、聞くと等しく利常公、江戸發足の用意申付けられ、又大橋市右衞門・山本清藏を早使として、大坂へ遣され、御出入の堺今井宗薫・京都後藤勘兵衞等にも仰入れられ、大坂具足屋鴻池などに仰付けられ、九州廻船殘らず、密に前金を渡し借らせ置き、早速江戸北陸道より、急ぎ巢鴨本郷の御屋敷に着き給ふ。早速御子息光高公段々仰入れられ、頓て翌日光高公、押して此度西海追討使を願ひ給ふ。扨翌日加州より討手の願上る。是諸國より第一番と聞えける。光高公、御老中當番酒井讃岐守に就いて仰せられけるは、今度天草表一揆の儀、百姓土民原の手に候へば、尤諸國の大名歷々、御手に餘る儀あるべきには候はねども、御名代一度御下向之あり、一戰功を遂げず、又は二度重ねて御名代を下さんの條、是東武御威光強からざるに似て侍らんか。倩思ふに、九國・中國は、自國敵地に近く候へば、此時節持國守護の事、肝要に候。然れば光高に於ては、先祖の功はともあれ、今日壯年の某、身一寸の功なうして、忝なく金枝玉葉に連なり、附馬の恩顧に誇るの段、常々心に恥づる所なり。年老なれ共、利常あつて國を守護し侍れば、國に於て泰山の安きに候はんか。肥前國は、路遠しと雖、是海路の事なり。船上の勞は、只風による事なれば、近國として遠國とて、何の替か侍らんや。軍勢路次に勞るゝの憂なし。されば願はくは今度の役、あはれ光高に下し給はゞ、西國の諸大名へは、御下知あつて軍勢を返し、分國を守らせ給ひ、公儀より一枝の御目附、常服の御役人五七人、御添へ給ふならば、其餘皆々光高一家中を以て相勤め、諸國を始め、東武の御評定衆にも、枕を高うして安慮し給へ。某在陣三十日を出さず、成功凱歌を唱へん事、掌の内に候はん。土民に對し事をこがましく候へ共、若一度攻損ずるものならば、給はる所の三ヶ國を以て謝し、甘んじて刑を受くべく候。光高壯年の時、幸に一生男らしき役目もあるまじくと覺え侍る。偏に執奏の御厚意に、仰を蒙り候やう

にと、誠に餘儀なく仰せられしにぞ、酒井讃岐守も、誠に勇ましき御願に候。何樣早速御聽に達し申し、是より御左右申すべきなりと。光高公は私亭に歸り給ひ、此旨御申すに依つて、中納言利常公大きに御喜び、內々用意の所、水戸黃門公、御遠慮是あり許し給はず、其事止みぬ。後に松平伊豆守・戶田左門、上意を蒙りて打上りしに、大坂に至りければ、船一艘もなし。先達て蜂須賀阿波守、板倉殿の時、船一艘もなし。夫を船の調達自由を得しかば、早速申遣すの所、阿波守留守居より、今度は一艘も罷成らぬ由返答に及ぶ。松平伊豆守大に怒りけると雖詮なし。此事後の條下に見えたり。之を略す。扨賣船の方を吟味するに、皆加州光高公より前金受取り、貸置きける由、則江戶へ早打を以て、加州へ仰渡さるべき旨、早使引も切らず。大坂在番加州留居申達する所、加州物頭黑坂外記・林十郎兵衞忽ち來りて、借切り置きし廻船を、殘らず伊豆守・左門に引渡し、驛路の物使軍船の調度、皆々揃ひて靜に事調ひ、松平伊豆守・戶田左門を初、諸國の御使の船等迄、用ふるに餘ありて、天草の戰功は、たゞ加州侯の一身にあるが如く、諸事皆加州の下知々々といひしとかや。

此事異說あり。此時具足屋鴻池は、未だ御出入に非ず。其もと木屋・升屋といふ者なり。寬永十四年初秋に、中納言利常公より急用ありとて、金澤へ木屋・升屋を呼下し、御料理下され御話ありて、其後密に仰せけるは、近頃微に聞けば、其方共其中間より、西國の大名衆と組んで、兵庫築島を引毀つとも聞く。又は大坂の南門の石垣を、入札を以て引取るとも聞く。誠なるや。木屋・升屋互に顏を見合せ、いや左樣の儀、嘗て承らずと申上げければ、利常公御意には、いや事は慥に聞澄しあり。早々返り聞合すべし。若し誠なる時は手延にて、外の大名へ買取られては本意なし。我年來小松に隱居する。其地に霞島の亭を築かんと思へども、猥に石を切出す事、當時遠慮なり。汝才覺を以て人に取られざる樣早々買取り、公儀評定仰渡されなき內に、其石共一時の船に積み、大廻にて、加州安宅浦迄着船すべし。されば大事の用事なれば、其方共持船を始め、神戶・脇の濱の船共、一艘も殘らず借切り、如何なる用なりとも、他用に船を散らすべからず。則先金三千兩下され しかば、木屋・升屋兩人の者共畏り奉り、早速罷歸り、船よ〳〵と借切置き、若築島

南門等の事候はゞ、早く積り申すべき段申上げしかば、何れにもせよ早追にて歸國致し、船を借切り申すべき由仰付けられ、急々に歸りしが、いかに聞合すと雖、の沙汰もなかりし程に、飛脚を以て申上げしかども、中納言公より、船は散らし申すまじき旨にて見合せけるが、其後程なく此一亂ありける。扨は早く此事を御存知にやと、木屋・升屋密に舌を振ふとなり。忍の廻國にても、常々廻らせ給ふにや、又は雲氣等を以て知り給ふにやと、其頃いひしとかや。木屋後は辻といふ。享保七年の大火事に土藏を燒き、御用勤まり難く、嵯峨へ引込む。後に伴正藏といふ。今藏にある米三千石下されけるなり。御藏元は鴻池善七、木屋が一族を仰付けらるゝなり。升屋は松雲院殿御代に、御藏米十四萬石明き候て、此代り具足屋に仰付けられ候。是も升屋親類なり。其後湯川あり、何れも今に加州御出入なり。升屋は其後故ありて、大坂町年寄となる。此時も加州へ相伺ひ、事濟みしとなり。

紀州大納言遠謀の事 井 松平伊豆守下向の事

加州光高公御願に付き、御前に達し、種々御評定御相談あり。老中を初め、義勢にも似ず、御名代・御目附等の手に餘る噂を、此上に身の我々に預からんよりは、一向加州へ御頼みあるべきやと落着せざるなり。水戸公仰せられけるは、光高の願理なりと雖も、是必ず父中納言利常の計らひたるべし。言付け給はゞ、定めて功をなすべし。軍用も亦少なかるべし。然れ共天草の一揆は、外邪を憂ふる如し。捨置くとも自ら直るべし。加州に軍さするは、脾胃を煩ふ如し。老中只暫時の軍用をば厭うて、大義を知らず。此言付を知つて、願ふたる者なり。能思案せらるべし。先づ光高に頼みなば、光高兵を引いて向はんか、一度攻めて功なき時、おめ〳〵と罪に伏して歸らんや。縦ひ公儀より、善言を以て慰むる共、若年の光高、一人心に恥ぢざらんや。必定軍兵再び催し、無理に天草を攻破るか、却つて天草に馴合うて、寺澤・松倉に利害を說き、一家の大名に通じて、九國に大變を起すか、二四の間には過ぎじ。彼が臣に高田南坊あり、彼は邪宗の棟梁なり。今高山既に伴天連を去つてなしと雖も、其支族知音、何ぞ國に殘らざらんや。

外聞といひ旁甚だ危き國變なり。よし光高一戰に功を得て、比類なき手柄あらば、國の幸に似たれども、是れ又好むべからず。彼れ加州は百廿萬石の大身にて、日本凡二千四百萬石、然れば廿分にして其一つぞや。尤偏國たれども、治國には甚過ぎたる國割なり。然れども今度功ありとて、此上に何ぞ國郡を加ふべき。功あつて賞なきは、亡國の兆なりとや。光高半點の恨なくとも、其家臣心に甘んぜんや。是又天草百倍の安からざるを設くるなり。唯討手は幾度も小身の人を用ひ、寺澤・松倉が如く、罪ある者を以て攻むる時は、軍場に牢心の傷むべきなし。然らば光高へは、詞を賞し、善言を以て止め、小敵なれば、今度は加州公を頼む時にあらずと、義を以て願を返し、唯幾重にも老中より、差向ふべき事なりと仰せられしにぞ、何れも舌を巻いて感じけるとなり。時に松平伊豆守信綱、末席にありけるが、進み出でて曰、我等儀は小身より召出され、此席に連なる者に候へば、重ねての御名代は、乞受けても罷上り申度事に奉存候。然れ共拙者愚蒙の上、治世に馴れ申候て、今度戰場一定の族、心腹仕候所是なく候。何と心得、今度御役目をも乞請け申すべきや。心中落着是

なき段申されければ、水戸黄門公御意には、紀伊大納言殿こそ、智惠傑出にこそ存候へ。餘所乍ら計り見るべしと御意なりしかば、頓て伊豆守、直に紀州公の御殿へ上られ候て、日頃御伽に罷出らるゝ上は、早速御前に出で、四方山の話申上ぐる。紀伊大納言殿にも、思召には、當時出頭の伊豆守、今何の事もなきに、斯く長話すべき理なし。扨は天草の軍議を聞きに來るにこそと御心付きしかば、色々其心を以て搜り給へども、此伊豆守も、さるしたゝか者なれば、終に天草の事を言出さず、始めは小盃出でてありしが、大納言殿御意には、大盃に代へよと仰ありし程に、大きなる盃を持出でたり。紀州公、此盃に酒を十分に餘りて注ぎかけ給ひ、伊豆守に、取つて飲み候へと御意なさる。伊豆守殊の外迷惑して、私下戸にて御座候。御免下され候へといふに、何となく御機嫌宜しからず。其砌御近所に、水野・安藤抔有合ひしに、伊豆守飲まずば、其方共飲み候へとの上意なり。何れも下され得ずと申上る。座席少し興さめて、大納言殿御顔色惡ければ、思切つて飲むべしと思ふ心付きたる時、紀州公、其盃を半分程御あけなされて、さあ飲み候へと御申の時、伊豆守と一度に、水野も手

を差出す。紀州公扇を持ちて、盃を御押へなされ、やあ汝、始め十分あるの時は、盃を取らば衣服に酒懸り、座席の首尾失はんかと控へしなるべし。是程傾け捨てたれば、誰も手を出す者ぞやと仰ありしかば、伊豆守思はず飛退り、頭を疊に摺付け〳〵、扨々有難き御志慮承知仕候。實は其御詞を希ひに罷越し申候。私儀彌近日天草一揆追討使御受申上、罷立ち申すべきにて候により、御賢慮を以て首尾よく相仕廻ひ、罷歸り申すべしと有難く奉存候。直に御暇申候て御前を立ち、其夜直に御殿へ上り、段々申上候て、追討使御名代を蒙り、頓て打立ち申されけるとなり。

庵中抄に曰、中山勘解由、江戸盜賊奉行にてありし時、鶉權兵衞が爲に死去ありし後、跡の奉行を勤めし人、細川幽齋に、心持の事を尋ねられしに、其返事はなく、雜鰌の煮たる者を一器送られけるに、大國を治むるに、小鮮を煮るが如しと聞く。然れども猶深意なる事あらんと、上下改めて行きて、懇に尋ねしに、幽齋曰、故事の心は知らず。魚は肉は善く骨は悪し。然れども小魚は至てよき肉をよれば、骨と交りて出でず。骨の悪を捨つれば、善肉も交りて捨てらる。善に悪は共に善

なり。人多くは、一事は悪なる者なり。悪にも、只打交りて用ふれば、悪の骨よりうるほひ出でて、善の肉を助くるなり。政道は重箱にて味噌をすれといふ。手の廻らぬ所、國の悪なりといふ。其外多く隱語を申されしとなり。紀州公の事など、板倉が小住の三條の如く、其頃迄は、比愈の詞多く用ひられしにこそ。盃の事いかゞにや不審。

肥前國原の城下には、御名代板倉内膳正、謀略種々手を失ひ、城中の守り固く、隙を窺ふべき便なければ、諸軍に觸を出し、當城急に落つべからず。究竟の名將名家集り、百姓一揆原の爲に命を落すは、以の外の愚昧なり。一揆は死を一揆に定めたるものなり。猥に攻むべからず。逆徒楯籠る所、男女四萬餘人と聞えたれば、兵糧の積りあり、天草島原領殘らず集めても、米穀員數大方限りあり、追付け飢に及ぶべし。只一揆原を卷詰めて、一寸も明けず、水も漏らさず堅め、然るべしとの事にて、法令嚴しく陣屋を守り、唯取卷く計り。城中には此度又大に勝利を得て、彌其持口々々を守り、或は不時に鬨を發し、俄に鐵炮を打懸け抔して、寄手を惱しければ、いつ果つ

べき軍とも見えざりける。去る程に關東への注進、日々に打續きて夥しく、道中の間、大坂船着抔の取沙汰も、異國より黒船着岸し、早二ヶ國計り破れたるなど、あら ぬ事言出して、諸人安き心はなかりける。江戸の評定にも、此上は一刻も早く、重 ねて御名代御下しなされ、諸人の心を安んぜらるべきより外あるべからず。先づ此 節天下御老中方若年寄等にも、當世然るべき器量才智の人といふは、松平伊豆守信 綱然るべしとなり。既に斯の如く極る上は、御三卿へ相伺ひしに、水戸公の仰には、 伊豆守下向尤宜しかるべく候。併し今寄手の軍勢は、九州の大軍十六萬餘の人數な り。太閤朝鮮御手遣さへ、二十萬に出でず。左候へば、人數に於ては不足あるべか らず。御名代板倉内膳正あり、西國の諸將皆是武功の家なり。今此上に人を増すと も、大小替る事はあるべからず。只軍配のよき人を缺く故なり。當時北條安房守氏 長こそ、軍法の中、萬事修練の人なり。然れば此安房守を差添へられ、軍法の事、萬 事安房守指圖を受けられ、然るべしと仰せらるゝ。さすがの伊豆守殿も、心底に少 し含む仔細は、天下の御名代として、西國九ヶ國の軍兵を下知して、一揆原の楯籠る

松平信綱戸田氏西一揆征討の爲め發向

掻立城一つを攻め落さするに、北條安房守が指圖を守り、木偶人の如くにあるべき やと、少し立腹の心故、伊豆守返答にも、成程承知仕候。併し先づ安房守には及ぶま じき事に候と申さるゝ故、今度は北條安房守發向の事は止みにけり。然れば水戸黄 門公、猶も心元なく思召しけるにや、今度始て中國大名一人御加へなり、則備後福山 城主十萬石水野日向守勝貞なり。是は御内意にて、未だ祖父六左衞門入道勝成存命な れば、同道して軍の意見懸引の爲とぞ聞えし。然れども着陣以後、勝成老病故か、遂 に死去故、重ねて北條安房守下知して、事落去しけるとぞ。去程に御評定相濟みて、 松平伊豆守信綱戸田左門氏西を御前へ召出され、急ぎ西國へ發向し、板倉内膳正に、 前方の様子承り、相談の上にて、早速に一揆追討仕るべしとの御事なり。兩人即時に 江戸出立、本國の城則武州川越と美濃大垣とへ立寄りて、急々用意、同道上るべし。 又々追々注進に及び申すべしとて、伊豆守は川越より、中仙道を發向なり。戸田左 門は大垣に至り、早速用意して、大坂にて會合なり。頓て松平・戸田集會して、船を 求むるに一艘もなし。船手蜂須賀阿波守に下知せらるゝ。初めの板倉殿の時と替

りて、一艘も出さず。上使大きに怒り、漸々加州公より船の調略を得て、進む事を得たり。蜂須賀家如何なる故に船を出さゞるやといふに、武將感狀記に曰、耶蘇の賊の時、板倉内膳正重昌、總監軍として肥前國有馬領原城に赴く。四國・中國の諸侯、皆船を出して送る時、松平阿波守忠英江戸にあつて、留主家老共其半を出し、半は殘して變にかへんといふに、蜂須賀山城衆議に戻つて、船を殘らず出して是を飾る。波路一面に只阿波船の如し。重昌是を言上して、公儀殊に首尾よし。松平伊豆守・戸田左門御名代の時、阿波の家老始めに倣うて、悉く船を出さんといふ。蜂須賀山城聞かず、根もなき賊と聞えたれば、九州の勢にて事濟みなんなれば、四國・中國の兵に及ばず、縱ひ一旦攻め屠らずとも、時今西風の節なれば、其間には船皆歸帆すべし。今賊思の外強うして、九州の諸侯手に餘ると聞く。さすれば此次は、四國・中國の勢に命せらるべし。其上今日船を出しては、東風の節、船速に歸る事得難し。四國・中國に命せられば、蜂須賀其先登に當るべし。一度台命を蒙り、萬一船遲々に及ばゝ、武家の恥とする所なるべし。今度は一艘も出すべからず。公儀御咎あらんには、某一人、其罪に當るべしといふ。則飛札早速是を江戸に馳せて訴へければ、阿波守忠英捨置き難く、老中酒井讃岐守忠利に告げて上聞に達す。家光公仰に、國主忠あれば、其家臣も亦忠を思へるとて、大きに御感ありしとかや書き記せり。此說能く兩段に叶ひぬれば、是を書して言を略す。蜂須賀山城を天下に譽むる。阿波守よりも忠賞ありしといふ。板倉内膳正殿の時は、蜂須賀軍船に力を盡し、松平・戸田の時は、加州の軍用力を盡して、已に大坂出帆に及びけるが、諸々の附使者かげの供凡そ一萬三千餘人、軍船を揃へ漕出す。九州一揆の退治、日を經じとこそ見えにけれ。

南島變亂記第十四畢

紀州大納言遠謀の事并松平伊豆守下向の事

南島變亂記第十五

加州中納言普請の事

松平加賀守光高公、天草一揆追討の御願、御感あつて、御忠節に思召し候と雖、御老中御評定の上、善言を以て御差留なされ、今度松平伊豆守・戸田左門台命を蒙り、既に打立ちければ、加賀屋敷には、今度打向ひし同前の御厚志の上意下りけるにより、家中一統に上意の披露あつて祝あり、さゞめき賑ひけり。此節黄門利常公、俄に別殿屋形造營あるべしとて、急々數百軒打崩しての大普請、江戸中の大工木挽を傭ひ切り、且大庭には大石を引並べ、數寄屋の亭も一所に建つ由にて、數萬人の人夫をかけ、地車夥しく並べ、大石を引き大木を切らする。追々引連ねて連綿たり。駒込本郷邊はいふに及ばず、本町通筋違見附人馬の往來も、加賀屋敷の材木に支へて通

前田利常深慮

り得ず。口論鬪爭も日々又多し。御普請所は、長塀を打毀ち、數萬の人足入込み、卅人に一人づつ、伊達なる裝束したる木鑓人差添へ、其外御近習衆・御坊主衆の類、美麗花を盡し、普請の中に立交り、音曲歌舞目を驚かしける。御家老安房・山城等の老臣さへも、御普請場へ入込まるゝ時は、大筋の縮緬の上着一樣に着して、音曲をなさゞれば、御前へ出づる事能はず。況や若侍中、皆伊達なる出立、目を驚かす。町人等の行懸の見物、嘗て禁せず。門前には、塀を崩して垣とてもなし。其上毎日菓子餅なんどを抛つて、入來る者にも與へ、酒は手桶に杓を付けて、飲む人の儘にして咎めず、毎日々々米錢を費す事、百萬を以て算ふるに、其夥しき人歩、大木大石を集め扱ふ音、天も崩るゝかと肝を消す。江戸中も是のみの評判。此頃は西國には大變あつて、人民多く死亡するに、いかに我金澤山なればとて、少しは遠慮もあるべき事なりと、諸方に沙汰して、兎角大名の氣は、うづけたる者ぞやと言觸らしける程に、利常公の老臣聞傳へて、密に申上げければ、中納言利常公一向聞入なく、彌大普請起し給ふ故に、御家中も肩を潜むる者多し。只殿には、物の附いてゐはせぬかと、案じけ

るも理なり。御家中幷御聞番横目役など、頓て種々申上げ、此節加賀屋敷大普請いかゞの心入ぞや。尤江戸中諸職人、暇の時節とは雖も、殘らず加賀屋敷へ引取る事、公儀へ憚からざるの仕合、且當時三卿にも、御愼の時節、老身の踊り狂言などの事共、何と心得居らるゝ事やと、御谷めの筋もあるべき事と、何れも内意を以て、水戸黄門公に伺ひけるに、御聞あつて御笑ひなされ、老功の中納言能く氣が付いて、出かす事よとのみ上意なれば、何れも何と分別なく、不審のみにて見合ひける中、翌年二月廿八日に、天草落城のこと、靜謐の段飛使到來しければ、其日より加賀屋敷には、中納言少し御滯とて、普請止みけるが、其後終に御普請はなかりけり。不思議なりし事にぞありける。思ふに正月の始頃にや、御名代板倉殿、討死の飛脚到來して、殿中は今も暗闇になるかと震動しけれども、江戸中下々の者共を驚かさずして、加賀屋敷大普請のみ沙汰して、嘗て騒がず。西國の動亂も、さしたる事もなきにや、加賀屋敷の阿呆なる普請を見よと、一點の動轉もなし。其砌に由井正雪、未だ民部之助といひて、江戸表にありしが、内々天草に通路ありし程に、江戸御旗本を伺ひしに、加賀

屋敷の大普請のみ沙汰しければ、大山は動し難しとて、密に此事を天草の一味山本與茂作方へ告げやりしに、天草の城中に聞えければ、彼の葦塚忠右衛門いひけるは、天下又人あり、大國終に動かし難し。我輩等運命も、二三月の間にあり、各思ひ極めよといひしが、由井民部之助も、時未だ至らざる由、言遣しけるとなり。事治りて後も、此普請の事は密々にや、善惡に付御尋はなかりけり。天下英雄の機、何と相計り知るべきにや。然れども天草の動亂濟みければ、翌年御願にて、中納言利常公、頓て加州小松へ御隱居なされ、政事は皆々金澤光高公より御取計ひなり。按ずるに昔戰國秦の王翦、百萬の軍を引いて、趙の國を攻めし時、亭宅の地を願ふ事三度、老身の樂しむべき地を乞うて止まるには、是は國中の大軍我手にありて、天下の疑を止めんと欲す。今度加賀の大普請も、毎日金銀を費されしも、良是に類する事もあるにやと、心得ある人は言合ひけり。されば嫌疑の間を、未然に知り給うてや、頓て隱居されけり。此時姓をも本姓菅原に御願なされ、改むるといふ。

加賀小松といふは、丹波五郎左衛門長秀の持城、後村上周防守是に在り。後丹波

長重住居して、加州陽龍院殿利長公と、淺井繩手の一戰あり。其後加州領に屬す。今天下の名城といふ。中納言公御隱居ありて、御花畑・白鳥堀・龜橋など出來、葭島の亭は、掛橋川の水を引きて、三湖の水に合ふ。三湖芝山潟・今江潟・木輪潟は三ヶ股ともいふ。此水廻つて安宅の浦に出で、浮柳二つ堂の松原、白山の月を受けて絶景なり。前田氏は元尾州菅神社家なりとかや。此度本姓にて濟し給ふ。家光公より御歌あり。略レ之。故あつて、菅家多ければ、高辻公に寄り給ふ。其後小松に京北野を移し、城の北に一社造營あり。其頃北野の社家宗祇以後の名人と聞えし能順といふを呼下して、毎月御月次あり、今に絶えず。能順の句讃玉集あり、見るべし。秋風は薄打散る夕かなと吟あつて、天下の人を驚かす。社領百卅石。寺院初の名は松雲院といふ。享保の始、相公の御法名に障りて、今梅林院といふ。中納言公御他界の後、葭島の亭を毀つて、今は亭宅、金澤の城中へ引きたり。今に嚴然たり。

藤堂大學頭大言の事

去程に御名代松平伊豆守・戸田左門、西國發向の後も、水戸黄門公只一人、大きに辛勞に思召して、若し一左右不思議の事あらば、彼太平記の亂の如く、東武の例にも、異變の輩出來まじきにも非ず。楠が金剛山の城落ちざるが故、鎌倉の禍となれり。只々火急に攻め落したきものなりと、御沙汰頻なり。萬々一奥の手には、紀州從二位大納言源賴宣卿を大將として、四國の諸大名松平讃岐守を副將とし、松平阿波守・松平土佐守・松平隱岐守・松平美濃守・伊達遠江守・京極備中守、此面々殘らず軍兵到着し、本役八萬餘人、内々御相談なり。先づ此差繼に相拵へる衆中には、藤堂大學頭高次・井伊掃部頭直孝差遣さるべき旨、御内意あるなり。是終に葦塚忠右衞門が方寸に出でて、斯くも今天下の人心を動かす。良將、人を以て城とし堀とすといふ、宜なるかな。されば東武御殿中に於ても、猶未だ心寧からず、今天下の武勇の將、御軍代として、御用にも相立ち申す人、誰にかあるべきと、内々御聞合ありけるに、諸大將の内、藤堂大學頭こそ隨一の勇將、諸人是を指す。是により大學頭を殿中へ召し、此度島原の騒動大方ならず、益落城是なき時は、大學頭を差遣すべし。兼て右の用

意仕るべし。且又一揆の勝負は、いかゞ存じ居らるゝや、所存申上ぐべき由なり。此時藤堂大學頭高次平伏、謹んで申上げらるゝやうは、傳へ聞く一揆の百姓原二三萬人、必死に籠城仕ると承りて候へば、殘る所なく存候。互に軍法を以て御戰あらんには、手に餘り難かしき事尤に候。若某仰を蒙りて罷向ひ候に於ては、時日を經ずして卽刻踏潰し、落城申すべく候。其仔細は、私の家來、臆病者は一人も御座なく候故に御座候と、御請申上げらるゝ。諸人大に眉を顰めける。藤堂大學頭、已に御次へ退去なり。此口上大音なれば、御座近く黃門公御聞遊ばされ、大學頭に御尋にて、御不審仰出されけるは、貴殿家に限つて、勇士計にもあらじ。何とやらん他家へも辭當り、旁以て其意を得ざる事なり。如何の心底にて、申されけるやとの事なり。時に大學頭高次申さるゝは、御意御尤に存候。今度天草の一揆男女四萬餘人、相働く兵は二萬五千人計もやと承り候。私相向ひ申候はゞ、御軍役を增願申上、軍勢大勢召連れ候て、原城に向ひ山を崩し、雜人原を埋草にいたし、無法に四五萬人押上り申すべく候。私、後に鎗を提げ居申候はゞ、一人も逃げ申す家來はあるまじく候。

其人數を足溜として押上り候はゞ、士民の奴原打物になつて、何と武士に敵對申すべきや。私馬廻五十人生殘り乘込み候はゞ、二萬もあれ、撫切に仕候て、一人も助け申すまじく候。されば我々が戰ふには、弓も鐵炮も入用御座なく候。只一拉ぎにて塲明け申事に御座候。誠に近年靜謐にて、武士要用を取外し、歌學香會、只長袖同前の有樣故に、士民の一揆に、古き家の大名始め旗本を出して、落城心元なし抔とは、誠に天下の恥辱と存候。此儀は御心安かるべきにて候と申捨て、歸宿ありければ、直に國元勢州と伊賀へ、早打を以て申付けらるゝ趣は、伊賀より一萬五千人、勢州の地藏堂迄此を出すべし。伊勢より一萬五千人、豐久野へ出張申すべきなり。何れも神水を飮みて、必死を思ひ定めたる軍兵たるべく候。二の足を踏み、死を恐るゝ軍兵に於ては、一人も用事是なき段、勝手次第暇遣し申すべき由、嚴重に申遣し、御下知を今やと待たれける。されば是に依つて、光圀公の御愁顏も、是に御晴なされ、殿中の人も忽ち靜まり、囁き合ひしも、何となく定まりて、萬人磐石に座する思をなす。實にも勇士の一言と、勇しかりける事ぞやと言傳ふ。

南島變亂記第十六

正月元日三番攻の事幷板倉内膳正討死の事

斯くて島原表には、大軍城を堅めて、仕損じたる事もなく、最早寛永十四年も、指を折つて算ふれば、限りの日に至り、甲冑の春を迎へんと、上下屈して居らるゝ所へ、江戸より重ねて御名代として、松平伊豆守・戸田左門、十二月十一日江戸を立ちて、正月上旬には、當府に着陣の段、道々よりの飛脚、追々に來着せしかば、板倉内膳正重昌大に憤り、諸大將を集めて申しけるは、當表の儀、各粉骨を盡し召さるゝ故、賊軍を取圍み、今日迄相守り是あれば、城中終に飢に及び、落城するは案の中乍ら、天下の武士集まり、一揆の土民を攻落さで、食攻にしたるといはれんも無念なり。只今又松平伊豆守・戸田左門兩使參着の趣は、前兩度の城攻、言甲斐なき思召の段、各我

等天下に對し、實に面目を失ふ所なり。所詮運を天に任せ、兩使到着前に、今一度城攻して、各必死と思ひ定め、城攻の用意を丈夫に拵へ、當手の下知を守るべし。御同心なくとも某一手なりとも立向ひ、城を枕に討死と相心得、攻むべしとなり。諸將、何れも御尤の御事なり。大軍今日迄辨々と取圍み、重ねて御上使、伊豆守殿には、何の面目あつて會合すべき。勿論御名代の御下知、何者か背き申者候はんやといふ。其時板倉殿申さるゝは、兎角戰は〻、不意に出づるに如かず。正月朔日は、誰々にても一年の壽をなすなり。此朝俄に取結び、一攻攻立つるものならば、必ず功をなすべしとある。諸人、いらざる日にこそ。天子にも四方拜ありて、萬民安全を祈り給ふに、多くの人を失ふ事の日取、心得ずとは思ひ乍ら、御名代の詞なれば、何れも領掌して立退きけり。此時立花飛驒守殿、陣に歸りて言渡されけるに、家臣共皆々申しけるは、板倉殿こそ、後より伊豆守殿御出に腹立ありて、討死と思ひ究め給ふ共、當手は曾て預かる事に非ず。身に懸れる寺澤・松倉さへ、良もすれば逃げ廻る事多し。必ず〳〵此陣、正月元日には出し給ふなと、諸軍皆々進まざれば、立花殿色々に

言宥めて、先陣を押出されけるとなり。元日の合戰事極り、何れも討死を心懸けて、出陣せよとの事なれば。鍋島信濃守殿には、勇士の上にも子故の闇、子息甲斐守殿いつも〳〵先陣に懲り果て、今日の觸旁危ふし。若しや甲斐守討死もやせんかと、此故に甲斐守殿を呼んで、急度申渡さるゝは、汝度々先陣にあり。今日より思ふ事あれば、後陣を守るべし。今迄の如く荒き働は、必ず父子の義を切つて、勘當すべしとなり。甲斐殿は、常々孝心類なき人にて、如何なる事にも、違背せざる人なりしが、此時には思の外にて、御意畏入りて候。御勘當に於ては、以後御本陣に伺公仕るまじきなり。當陣の事、相手がましく候へ共、乘掛けたる城といひ、敵に詞も懸合ひたる儀にて候間、幾重にも後陣に控へ申す儀罷成らず候。此城一番に攻落し、高名仕候て以後、其功に替へて、御詫言申すべきにて候。夫迄は御勘當にて、心安く先陣仕るべく候と座を立つて、自分の陣へ歸りて、此以後落城迄は、父兄の陣にも參るべからず。然りと雖も、備は父兄の先陣に立て、敵の難に當るべき覺悟なり。且信濃守殿不便愈深く、若し甲斐守が先陣するかと、安き心もなかりけり。されども元日の合戰、必定甲斐守先陣と覺ゆるぞ。今度は惣軍一所に押上げ、大筒にて打拉げと下知故、鍋島の陣は、内々先を爭うて、夜半より早出丸の麓へ押寄せ、段々に押上る。葦塚忠右衞門は、兼て城外に知音の者ありて、密に天下の風説も、告知らすやうにしたりければ、元日の城攻の事は、早く城中へ聞えたり。寛永十四年も、早大晦日に至りければ、諸手の一揆を集めて、假初乍ら籠城はや百日に至る。各の武勇にて、今日迄息才、安福に年を迎ふるこそ不思議なれ。されば新玉の年立歸るなれども、敵軍不意を考へ、年賀も祝ふべきなれども、其事もなく、元朝の城攻と極めたれば、敵を追散らしてこそ、快く祝ふべし。先づ歳暮の祝儀、面々の心慰みに、籠城の引出物ぞと、て、陣々へ二百人三百人づつ、人數を配り增しければ、是に依つて諸軍、鬼神の如くに覺えしとなり。是は葦塚兼て斯くあるべしと知つて、足弱一萬八千人といふ中、自然敎へば、軍用にも當るべき者多かりしを、皆人質曲輪へ入置きけるを、此頃靜さに、皆々鐵炮を打つ事を敎へ、竹鎗を使ひ太刀打を習はして、五千餘人勝れたる者を選び出して、諸陣へ加へけり。其内には前髪もあり。還しき生れの女などは、鐵炮を

原城三番攻

ば敎へ、皆々用ひける。誠に謀あつてとぞ聞えし。諸手皆喜び勇みければ、例の如く鐵炮石弓、其上に棒火矢といふ物をば製して、寄手を遲しと待懸けたり。寛永十五年正月元日、而も其朝晴天にして風もなく、浦山も靜にて、寄手惣軍十六萬人、貝太皷を鳴らし鬨を上げにける。去程に兼て城中には、大きに油斷すべしと思ふ所に、案の外にて、持口々々少しも騷がず、天帝の白旗數百本立並べ、同じく鬨を上げ貝太皷を鳴らし、竹の筒を吹き狹間の板を開き、堅固の體案の外なり。此故に浦手の櫓山谷の口へ押廻して、細野谷口は細川越中守忠利父子、三萬人の大軍にて、大筒小筒を打立つる。其響鐵炮の者、蒼海も躍り上り、大山も崩るゝ計に覺えけり。城内は、一揆の土民とはいひ乍ら、皆死を一擧に極めたる者共なれば、少しも騷がず、敵間を待ち、鐵炮に玉藥を込んで待懸けらるる。追手の先手黒田左衞門佐、大軍押立て鐵炮を打懸くると雖も、上り矢にて屆き兼ねける。中の手は立花左近將監父子・小笠原一家、今日も相替らず願ひ申さるゝに付、先陣は寺澤・松倉兩家なり。松倉殿、度々の恥辱を雪がんと、今度は嚴しく面々楯を振廻し、一面に押立て〳〵、竹束をかづき

て堀端に付き、彼竹束を組み合せて橋となし、乘渡らんとする所を、城中相圖の旗を上ぐると一時に、四方の櫓より聲を上げて、天地も崩るゝ計、鐵炮を打出す。さすが下矢に打つ事故、玉火矢の利よく、殊に小草も見えぬ程に打圍みたる軍兵故に、仇矢は更になかりけり。松倉・寺澤今度も悴へ兼ね、散々に引退く。黒田の先陣黒田美濃守、老功の大將にて、子息二人黒田民部・同藤二郎が下知して、武者組・楯組といふ事をなして、竹束を引連ねて、平押に押上る。此迄に大木も大石も、更に物の數ともせず組連ねて、えい〳〵聲して攻上る。やう〳〵堀際に押詰めたり。是を見て後陣、勇み進んで押續き、雲霞の如く取圍む。あはや此城、只今落城に及ぶべきと見る所に、此頃駒木根八兵衞、珍らしき事を工夫し始めたり。此程調達せる棒火矢といふものを、十挺餘り放しかけたり。抑棒火矢の仕方は、桐の木を割りて、長さ六尺七寸にて、桶の如くに竹の輪を入れて、其内に棒を入れ、卅本五十本、其棒の先は尖りにして、物に立つやうにして、樫木なり。筒元の所に、鐵炮の藥を括り入れ、石火矢の如くに打つと、筒は四方に飛んで火燃ゆる故に、棒に火廻りて、走る事玉火の如し。

此駒木根八兵衛は、鐵炮の元祖種が島一流の根元なり。鐵炮は大永元年に渡り、其頃迄百廿年、日本に流布すと雖も、委しき事は天文十一年明の儒生五峯より、種が島貯曉に、外に蠻客二人（牟良叔舍、切支孟太）ありて、駒木根が先祖に傳ふ。されば此節迄、棒火矢といふ事ありて、日本になし。以前の軍書に聞かず。大坂軍の頃にも、此棒火矢は沙汰なし。奇妙の武器なり。棒火矢、種が島の住人鐵炮の元祖駒木根八兵衛・鹿子木左京と彫付けたり。此故に後に生捕の山田右衞門に糺明ありし所に、彼鹿子木嫡子、原の城には始めより籠り申さず、鐵炮傳受一卷を首にかけて、祖父が弟子紀州根來の玉龍坊に隱る。仔細知れて、紀州南龍坊を以て御召出し、吉利支丹類そく轉衆とて、三百石賜はり、今に鹿子木八兵衛とて紀州にあり。後に棒火矢を轉じて、亂火矢を製すといふ。此駒木根より分れ、貞村流・木村流・稻富流・さいつ流・田布施流・一火流・玉木流・中尾流、此等皆此流にて、大筒を言立て諸大名に仕ふ。最も此流多しとなり。されば斯く手練したる妙手を以て、一聲に打立つる程に、其音雷火の如し。火燃え乍ら彼棒走る。寄手は此兵器終に見し事なく、其當る所二三人づつ、連ねて打倒れ、又地にて燃ゆと燒爛れ、或は半死半生、四五百人出來たり。大に驚き周章し、黒田の先陣へも數十本打込み、竹束に付きて火燃え出づれば、夥しく騷動して、思はず惣敗軍の色目立ちたり。其跡より鐵炮の筒先揃へ打つ程に、寺澤・松倉の先陣惣崩れして、山下へ逃下れば、立花・黒田も終に見ざる武器故、浮足になつて、心を怪む所へ、城中より見定めて、谷切の人通ひなき所に、一揆三百餘人傳ひ下りて、白旗十流松の木隱に飜し、鐵炮の上手共、手先を揃へて打つたりける。黒田殿、旗本より是を見て、本陣へ込矢打たせては叶ふまじと、鐵炮の手を下知して、打除けよと大きに鬨を上げて立向ふ。此音山谷に谺して、何方の勢といふ事を知らず。先陣の黒田・小笠原衆、後の味方の鬨を作りしを、敵の廻りたると心得て大きに驚き、我先にと山下へ捲り落されて敗軍す。此時を拔かすなと、城中より一時に鬨を上げて三千餘人、眞黒に切つて下り、塀下の木石投轉ばし、隙間もなく突いて懸りけるに、追手は念なく追返されて、元の陣々へ引行く。此時鍋島信濃守の攻口は、惣軍へ下知を傳へて、出丸のおくびなりける尾崎より、平一面に押上る。城中出丸より、頻に鐵炮を

打懸けたり。寄手一枚楯を振廻し、えいや〳〵と押上る。然る所に少し脇の平草山より、二男甲斐守直澄、手勢千人餘り、別段に押上げたり。城兵共是を見ると雖も、二萬餘騎の信濃守の手へこそは鐵炮を打懸けたれ、此方へは間遠なれば、彌甲斐守力を得て、例の紅母衣黑の駒に、白沫を食ませて攻近付く。時に城中より駒木根·鹿子木傳受したる一揆共、彼棒火矢を五六挺、一時に打つて出しければ、鍋島信濃守が二萬餘人、妙技に當つて途を失ひ、山より下に捲り落さる。是を見て出丸を堅めし勇將柄木左京·佐志木佐治右衞門千五百人、時分はよしと突いて出で、散々に駈立つる。鍋島の手勢も、既に敗軍と見る所に、二男甲斐守直澄、脇道に乘上り居られしが、是を見て手勢一千餘人、得たりやとて一揆の横合へ、面も振らず切つて入り、柄木·佐志木も、甲斐守に駈立てられ、引入らんとする所へ、深江村名主葭田三平一揆五百人、噇と喚いて駈返す。甲斐守大きに怒り、なだるゝ人衆を立直し、眞先に馬を飛ばせ、賊軍を大勢踏殺すに、上總惣右衞門·小刀部甚右衞門、何れも大力の者共なれば、甲斐守と組まんと相近付く。直澄乘つたる馬一足に踊り立て、上總·小刀部を踏倒す。

上總惣右衞門起上りて、馬の水附に付く所を、拂切に切られけるに、腹の上より片腕切破られ、仰向に伏して死にゝける。小刀部は馬に踏殺されて、此手一番に崩れければ、葭田三平も、敵し難しとや思ひけん、帶曲輪を廻つて、二の丸の内へ逃籠る。甲斐守只一騎、出丸の小堤の上に乘上つて、當城の一番乘鍋島甲斐守直澄ぞ。味方の者、續け〳〵と下知あれども、千々輪が帶曲輪より打出す脇手の鐵炮に打白まされ、味方一人も續き得ず、乳母鍋島三左衞門計りこそ、鐵炮の手少し負ふと雖も、漸に馳付きたり。本丸の葦塚忠右衞門是を見て、出丸口既に破れぬ。助けずんばあるべからずといひ、千束善左衞門·四鬼丹波、二千餘騎にて切つて下る。二の丸より葦塚左內、數百騎を引いて突いて下り、甲斐守只一人を、十方より打立てけれども、古今の駿足にて、乘破り〳〵、手本に近付く一揆廿人計り、打捨てられしは、誠に打物雷光閃く影、さながら荒天神も、斯くやと思ふ計りなり。佐志木·千々輪、麓の胴勢押隔てられて、終に續く味方なかりしかば、一方を討破り、無念ながら城を見上げて鍋島三左衞門を介抱し、後陣へ引いて返されしが、猶も口惜くやありけん、平草山を

横切に進んで、追手の二の目の大合戰、御名代討死の頃駈付けて、又兵を防がれける。天晴勇將かなと、諸軍親疎なく感じて、鍋島の荒武者とぞ唱へける。されは城中強くして、中の手筋・黒田の先手・追手の先陣・松倉・寺澤、引返し〳〵したる體に見えければ、御名代板倉内膳正、大きに身を揉み、立花父子の陣へ使者を立て、入替つて攻上らるべき由、詞を荒くして下知ありければ、立花家前度の合戰に、有馬一家城攻を仕損じ、千々輪・大矢野・葦塚等御本陣を襲ふ砌、御本陣を守護して堅めたる故、中の手の黒田、横合の合戰に追返しけるを、上使よりは、立花家へ挨拶もなく、結句黒田一家へ御褒美の詞ありし程に、立花の手の者共大きに恨みて、今日板倉殿身を揉んでの下知にても、家臣等更に命に應せず、板倉殿を恨み、此方の知るべき事にあらずとて、其返事にも、先手松倉・寺澤の者共、後陣と御定め候はゞ、立花一家粉骨を盡し申すべく候。今日の城攻も、中々手強く見え申候。鍋島の手も、今にも引返し申すべき間、當手御見合せ、然るべく候はんとなり。板倉内膳正大きに怒り、我れ東照神君より仕へ奉り、父祖の武功忠誠に依つて、今日兄弟並んで大役を蒙り、高恩身に

餘れり。況や今度大勢の中より選み出され、御名代として發向し、大軍を指揮して今日に至れり。三度戰つて城を攻落す事叶はず。何の面目あつて、天下の人に見えんや。其上松平伊豆守・戸田左門、近日に着陣して御名代を替り、大將の任を奪ひ取られ、人の下知に付かば、父祖の名を下し、子孫の面を穢す所なり。よし今生害すべきと思はれしが、同じ命を落すならば、城に向ひて討死し、忠義を顯はし、父祖の美目に備へ、子孫の光榮とせばやと覺悟極め、手勢三千餘騎、犇々と押出して、立花の陣の前を、すげなく乘抜けて、軍使を以て、板倉内膳へ、旗本を以て一攻仕る。後より押詰め候へと言捨てゝ、同音に鬨を噇と上げて、追手の矢倉の下迄竹束をかつぎ連れ、眞一文字に乘上げらるゝ。御名代の眞先馬印迄、悉く城門の前に見えしかば、扨は板倉殿、旗本にて攻め給ふぞと、諸軍上を下へと返しける。されば敗軍して歸る軍と揉合ひて、諸手混雜の最中なれば、見つけぬ陣も亦多し。元より御觸とてもなかりければ、聞傳ふべき樣もなく、漸く聞合せて、前後十六萬人、不同に鬨を作りけり。凡そ諸軍打出づる砌は、戰終りにける。板倉内膳正は、先手の鐵炮六十挺・中陣

百卅丁互に立て、騎馬を眞中に乘上げ、面も振らず切つて上る。三の丸の惣大將千
千輪五郎左衞門是を見て、板倉殿の馬印と見ゆるぞ。扨は惣軍、必死となつて攻上
るにこそ。今日の合戰、當城第一の大事と覺ゆるぞ。命の限り働けよと、本丸二の丸
へも此旨を申送れば、頓て輦塚忠右衞門此所へ馳來り、一揆五千餘人、惣曲輪に配り
分けて、今度は城より一人も出づべからず。鐵炮の手を揃へて、打立つるには利あ
るべし。敵の備常にあらずとて、究竟の鐵炮の上手を、殘らず狹間の陰に伏せて、石
弓を連べ懸けて待懸けたり。立花の先手同時に押上り、鐵炮六百挺を、一度に切つ
て放つに、城門も搖り傾く氣色に見えければ、氣を得て立花飛驒守、上使の機嫌直さ
んと、一番に乘上らんとする所を、十方より鐵炮を打立つる。立花大藏、殊に振よく
働く。鐵炮の手を負ひて死生を知らず。其外の先組の方、黑烟に目の明くべきやう
もなかりしにより、少々引退り、竹束の陰に隱るゝ所を、橫手の山際へ、板倉內膳正、
無理に軍兵を押上げて乘破らんとす。千々輪、駒木根、鹿子木等、兵を下知して、筒先
を揃へて打出す。內膳正の近習小性卅五騎、馬より下に打落され、色めき立つて見

えたる所に、內膳正、今日を限りと思はれけるにや、皆朱の鎧を着し、甲は布袋頭に
して、鍬形に龍頭を打つたる金物輝き、五枚重を猪首に着なし、一寸も退かず士卒を
下知して、馬を橫に、輪乘をかけて進まるゝ。只今投下したる大木に躓き、乘馬ひ
たと腰打ちけれど、是にも恐れず乘替〳〵して、平草山へ上らるゝ。鍋島甲斐守遙
に是を見て、御名代一番乘と覺ゆるぞ。若し板倉殿に怪我ありては、各後難いかゞ
なり。御軍法の場所は違ふとも、御咎は後日の事、見遁しに過ぎ難し。心あらん人
人には、續け〳〵と只一騎、出丸の下の山道を、橫切に馬を馳せらるゝ。水色の具足、
金の唐冠の甲、紅の母衣、一目見ても隱れあらざれば、諸軍も是に依つて、打出づる
者多し。惣軍大波の如く進むを見て、內膳正殿も、馬を城內に乘付けて、大音上げて
名乘らるゝ。當城討手の御名代板倉內膳正重昌、只今此城に乘上る。我と思はん者
は續け〳〵と、采幣振つて進み給ふに、城上より四五尺計りなる大石、ころ〳〵轉び
來る。板倉殿乘り給ふ馬の前足に、當りたるぞと見えしが、手を立てたる如く坂の急
なれば、馬も人も尻居に押潰れ、板倉殿ひらりと馬より飛び、彼の大石の上に上り、

板倉重昌戰死

後を振返り見らるゝに、細川の近習、其外渡邊幸庵抔見えければ、につこと笑ひ、塀を乘破らんとせられしに、運命や盡きたりけん、大玉の鐵炮來つて、甲の布袋頭に中り、打返されけると見る間もなく、又一つ玉來つて、胸元にどうと中る。内膳正、一言といはず討死なり。骸は、渡邊幸庵が引かたげて退きしとかや。是を見て御近習十三騎、場所をも去らず死したりけり。城中には御名代を討取りたり、闇魔の廳の訴ぞ。いざや〳〵と噪と笑ふ。此討死に、右の馬を潰す音にやありけん、又板倉殿の鎧の潰るゝ音にやありけん、剛氣の人の最期は、斯の如きものにや、凄じく物の潰るゝ音にて、はり〳〵と高鳴して、諸軍の陣中へ聞えしとなり。其頃狂歌に、

　重昌と名乘をしても板倉やきのどく殿の身の果ぞかし

というて持囃しけり。其外諸軍に狂歌狂詩多けれども、皆略之。此方重昌の名乘られし事、實話なれば留めぬ。されば此日天日靜なりしに、此討死の刻に、大風起りけるなり。此時東武にも騷しき事あり。寛永十四年も暮れて、目出度春を迎へ給へば、御城には恒例の如く、御規式行はるゝの所に、正月元日六過ぎより大風頻にて、

御殿中風甚しくして、立つ事能はず。御三卿幷諸大名、皆々御禮差支へ、何れも溜所に御見合なり。四つ頃に至りては、別して戸障子の類、皆吹放して烈しかりけるが、晝頃より風治りて、公方樣出御と雖も、時刻段々遲るゝ故、鴈の間にして、惣禮に御請遊ばされけり。斯る西國動亂の間なれば、今日の賀日こそ、忌はしく怪しけれ。扨鴈の間惣禮は、殊に不吉なりといひしとかや。斯くて元日合戰、御名代討たれ給ふと告げ來りしかば、思ひ合せて、いよ〳〵驚かれける。板倉内膳正討死評多しと雖も、不意の討死と極まれども、我宅へ辭世の詩歌入りし狀など記す。當時大久保家に此直書ある故に記す。

去年の新玉は、殿中にて烏帽子の紐をしめ、今年の新玉は、陣中に甲の緒をしむる。
打つて變る世の中、如此に候かしく。

正月元日　　内膳正重昌判

板倉德丸殿へ

大久保氏は當時江戸にあり。御書院組頭にて、大久保五郎左衞門といふ。千廿四石。此狀

を一軸として家寶とす。見る人無慙の思をなす。是馬上より書さて、子息德丸へ送られしなり。されば內膳正重昌の親板倉伊賀守は、元は松平主殿の家來にて、板倉八右衞門弟なり。始は三河に、小庵を以て住みし禪僧なり。本田佐渡守、鷹野の時分、よき者なりと見出して、齋坊主に呼び、後に還俗させて、佐渡の金山奉行とす。金山は盜賊夥しき所なり。然るに此伊賀守奉行となりし中、僅に二人を切り、其中一人を惜む。佐渡守其心を察して、京都諸司代となす。人を殺す事を大切にせしは、板倉より始まる。奉行の捌名譽なる事、天下皆知る所なり。且亦大坂の陣起らんとする時、板倉伊賀守、淸韓長老鐘の銘に難を入れしは、衆將のよく及ぶ品に非ず。板倉もと禪僧にして、深く禪意に賢しく、能く其理を知ればなり。其頃の武人、何ぞ心付く所ならんや。されば禪味の一路、代々に傳へて、此狀の文中も、詞多からずして意味深し。虛空を斷絶して、白日に向つて冷笑し、吹毛劍の一句を吐き盡せる體、言外に著し。されば此討死、諸家の評區々にして、多くは短慮より、麁忽を誹ると雖も、實は其場を得し事あるにや、子孫七千石加增を蒙り、今に中國の一城主となる事

は、後卷に委し、之を略す。

南島變亂記第十六畢

正月元日三番攻の事幷板倉內膳正討死の事

南島變亂記第十七

蜃樓の說の事幷高月勘兵衞が事

既に追手の合戰破れ、御名代板倉討死と呼ばはりければ、麓の諸軍大きに周章し、たまたま取靜めたる陣も、只大火を打消したる如く力落して、呆るゝ所へ、千々輪五郎左衞門・大矢野作左衞門、二手に分れて切つて懸る。板倉の一陣大將討たれ、散々になりしが、立花の一家手を盡して防ぎ、取靜めて引退く。葦塚左內・布津村代右衞門・小川吉藏・木庭久兵衞、一勢々々、引分れ〳〵切つて下る。殊に葦塚忠右衞門、諸手に向ひ討つて下る勢をなし、女童等に、城上にて太鼓を打たせて、諸軍は皆木戶を開き、坂中迄下り來れば、諸手持口の隊將、皆我陣を放れ得ず、鍋島甲斐守さへ、家臣多作美作忽ち討死すれば、父の陣心元なしとて引返されければ、一揆競ひ進み、立花・板倉

も、多く崩れて引きにけり。中の手の一揆、競ひ懸りて進む體に見えしかば、寺澤・松倉の兩陣、加藤源左衞門・關善左衞門討死すれば、本陣にも溜り得ず、遠く向はんとする所へ、高月勘兵衞といふ浪人ありしが、本陣板倉殿に賴り居りけるが、彼體を見て、松倉・寺澤の陣へ來りていひけるは、今城の勢大なれども、本陣數多備あり、且黑田・小笠原皆陣を押出す。而も細川の一族、未だ合戰の手に合はず、賊必ず長追すべからず。諸手へ皆切つて下る勢見すれども、賊の智謀を計つて、暫く陣の變を見るなり。必ず空しく勢を張る計りなるべし。今此を追ひ給ふ時は、悉く不覺の名を得給ふべし。今兵を揃へて切つて懸り給はゞ、賊の引取る所へ行懸り、不思議の功あるべし。今度の功を以て、在陣中の恥辱を雪ぎ給へといひければ、三宅藤右衞門尤なりとて、松倉十兵衞に示し合せて、高月勘兵衞、眞先に駈入り鎗を入る。勘兵衞見積の如く、一揆合つて長追せず、諸軍色めく其間に、引上ぐる時行合つて、追討に駈亂し、首數十一取りし。一揆の小將木庭八兵衞を、寺澤の手へ討取りけり。されば寺澤・松倉の恥辱は、高月勘兵衞が清めてやりしとぞ、軍中の評判なり。此事靜

つて、寺澤・松倉身上果てしかば、高月浪人してありしを、松平安藝守殿（淺野家）は、小松黄門公の聟なれば、高月を、黄門利常公に、千石にて御召抱へ候様にとの御口入なり。加州利常公、其手柄を問ひ給ふに、島原にての働の由御物語候へば、利常公御笑ひなされ、天草は浪人共が、百姓原をたぶらかしたる一揆なり。皆亡したりとも、我家の功臣に並べては、五百石にても高き者なりと御意。加州家中の諸士は、有難き事に覺えしとなり。其後高月勘兵衞加州に奉公して、才覺なる者故、殊の外宜しく、一年江戸御詰の時、隅田川にて、小物三人惡行して打擲に合ふ。其時加賀屋敷の者と名乘る故に、御聞捨になされ難く、此高月勘兵衞遣され候所、悉く詮議して公邊へ訴へ、隅田川の者十三人迄、御仕置になる。是より出頭して、御近習相勤めしに、其頃は高月勘兵衞とて千石なり。承和元年四月、信州丹波島にて、木村彌兵衞と口論して、勘兵衞は振よくして恙なく、彌兵衞は首尾惡しく、切腹仰付けられし。是より家中何角風說惡く、其後勘兵衞の役料の事に付、高月は御暇願ひ、京都へ遁れ隱居して、道也と改む。されば此高月が働きにて、今日城兵の首を見たる計りなり。葦塚忠右衞門

よく計つて、陣を纏めし程に、城兵討たるゝ者なし。細川の陣には、あはれ城兵出でよ。道を横切つて戰はんと陣を出し、黒田・小笠原、皆金鼓法令悉く定めて、打破りて附入にせんと待懸けしに、敵も其色を知つて、早くも引取りしなり。兎に角難かしき城中の者共なりと、寄手の面々呆れ果てたり。されば葦塚忠右衞門が謀略のみにもあらざりき。此に一つの奇計あり、其事を見れば、長々しけれども、暫く爰に記す。關原軍記に曰く、土方勘兵衞・大矢野修理、故ありて佐竹氏へ御預人なり。上方筋石田が亂聞え、家康公、小山より引返して上り給ふに、此兩人も供奉して上る。然るに大矢野修理、九月十五日朝、淺野幸長の前へ來つて申すは、小山以來御介抱を以て、御備を借し給はり候上は、御家來と申合せ、似合の走廻りをも仕るべきと、福島の先手乘出し、浮田勢の敗軍に乘込み、よき敵一人、馬上にて退くを追討つて、鎗にて突落す。大野が家來米村權右衞門、走り寄つて首を取る。則御陣所へ持參す。御免なされ、道作是へ〳〵と仰せ候て、御床几の際へ參り候へば、骨折り申すは、最早先手へは無用なり。是に候へと仰にて、岡江雪と一所にありて、御勝利の御祝も、

一同に申上げしなり。此討取る首に、色々に玉を飾りたる見事の珠數をかけてあり
し。米村權右衞門、是は餘り見事なりとて、取つて置きけるに、其後傍輩の中に、切
支丹宗門の者あり、則是を見て曰く、我々宗門に用ふる珠數なり、賜はれとて貰ひけ
るが、在京の中に、其者切支丹の寺三條油小路へ參詣し、住持に見せければ、住僧曰、
此えたつは、先達て浮田殿內高知七郎右衞門、强つて所望故、與へたりし物なり。夫
迄此敵の姓名知れざりしに、此者歸つて、修理にも傍輩にも此趣を話す。後に內府公
傳へ聞き給ひ、修理が先頃取りし首は、浮田衆の高知七郎右衞門なる由。さあらば
其時、首をも見べきものと仰せられしかば、修理首一つにて、三度の御稱美に預かり
けると、人皆申しけるといふ。高知は、西國にて隱なき剛兵なり。彼珠數の先に、あ
りうゆるといふ珠ありて、後京都の商人、高價を出し買ひたりといふ。此珠、遠きを
映す德あり。今蠻人高貴の人は、さし環とて、此の珠を琉金にて、龍或は三足蟾など
に作りて、中高指の元にはめて道中に出づ。手に血下らず、指自由を得て、又遠きを
映す德あり。此珠へ映して、先へ行く人を知り、後より來る友を待つ。最も軍用に

埋伏を顯はし、追手を知る。是れもと蜃の腹中より出で、蛤の眞珠の如し。凡て珠
氣ある物を、映す事を司る。されば原の城中にも、不思議に森宗意是を所持して、葦
塚に與ふ。故に常に是を城上にかけて、敵陣の異變を知る便とす。蜃は、螺貝にも
性通うて、軍中の具に用ふべし。必ず蛤の城といふも是なるべし。されば蛤の城は
蜃氣樓にして、乾達婆城・鹽氣樓・海市などいふ。日本には三ヶ所あり。越中の魚津・
勢州桑名・藝州嚴島なり。年により日により、少々づつ違ありと雖も、大樣變らず。
藝州にて、近里俗に島遊びといふ。第一人家岩・森などを映す。勢州にては、里俗貝
のんきといふ。大方は松原・人物、或は引馬・臺傘・立笠の類多し。城樓は稀なり。城
の體先に出で、人物・森・道・橋抔の、後になる事もあり。人物先にして、樓閣の如きを
映すもあり。又越中魚津にては、里俗狐の森といふ。多く城樓の景色を出す。松原
橋など嚴然たり。長高き人物、並び行く事もあり。樓に矢狹間開けたるもあり、塀
の上より吹下したる松なども見える。是れ思ふに蜃の氣吹きて、遙に遠き所に、影
を縮めて映す類なり。日本三所と雖も、當時嚴然として、年毎に映す物は、越中魚津

にあり。磯海を第一とす。其地は向ひに登州山を受け、三崎迄押包み、海中に長山列々して屏風の如く、又黒崎あり、是又能登の中なり。小隅山といふもあり。石動山を第一の高山と見る。景種々に變じ、山々皆袴腰の形となる。夕陽に多し。朝日にもあり。平時にはあらず。風强ければなし。多くは二月より四月迄に至る。然れども正月元日にも、見る事ありといふ。五雜組にいふを見るに、土地の名、景の體、不思議に同じもの多し。故に爰に記す。

登州海上有二蜃氣一、時結二城市樓閣同上一。八面山見、斜嘿疑燿、磯嶼烔籠如。若二樓臺錯綜一若二城郭周圍一。俄而人馬縱横、又俄而旛幟掩映、出沒無レ定變換不レ常。是曰二海市一。

億有二長山一島有二黒島一。

其餘は略す。國人越中にては、喜見城といふ。又海の市ともいふ。是蜃氣、景を縮めて映すに決せり。七十二候に、雉入二大水一爲レ蜃といふ。夫れ山雉は怪ある鳥なり。夜は大珠に變じ、晝は飛ぶ事僅にして人を迷はし、終に深山に導き、狼虎に與へて其血を吸ふといふ。是皆近きに縮めて、人手に近付き、形を見する術ありてなり。歌

に、山鳥の尾口の鏡といふは、己が尾を曲けて、雌鳥の寢姿を映すと聞く。是映す德あるべし。されば山中に卵を生じて、若水に落す時は、必ず螺貝となる。故に螺は、必ず雉子山鳥の班あり。螺貝の、山を拔いて近く聞ゆるもあり。是れ道を縮むるの理に同じ。鐘は、音は山を廻りて聞え、太鼓は山を越えて響き、螺貝は山の土中を拔いて聞ゆといふ。螺、終に雉の性あれば、山を破つて出づるといふ。されば螺ある山は、必ず縮む。地の怪あり。縮地とは、三二里も隔りし所を、時あつては手の届く樣に見する事あり。今加州俱利伽羅山に此怪あり。（三州奇談に此事を記す。）昔は加州金澤卯辰山にも、此怪ありしといふ。山破れて後は、此怪なく、雀入二海中一爲レ蛤、雉入二大水一爲レ蜃といへば、蜃の氣又縮地の德ありて、物を映す事必せり。其映す所、必ず百里二百里ともわかるべからず。唐土に、千里を隔てたる塔を、人家の柱へ、倒に映したる事も見えたり。其間に隔てたる物の映らざるは、造化の理たれば、計り極めじ。されば此寫珠、日本へも昔は渡ると雖も、僅十町の間にして、遠く映らず。南洋の山にして、うゆるは鳥なり。蜃氣の說、山鳥の怪に同じき事決定なり。されば原城

にありしありうゆるの珠は、森宗意の親森長意、未だ大坂の城繁榮の頃、蠻國より色色の寶器を送りし中に、利休、呂宋國の茶入を愛し、其時此珠を送り、長意は醫者なれば、乞請けて所持せしを、宗意に傳へ、原城にありしなり。原落城の後は、其行く所を知らず。

松平・戸田着陣の事 并天草四郎母糺明の事

正月元日合戰終りて、板倉内膳正討死ありしかば、諸陣震動して、安き心もなけれども、細川・鍋島・黒田・立花・小笠原等、陣々を取靜めて、法令嚴然として、金鼓節を守る。されども城中には、御名代こと討死したれば、軍々さゞめきことぶけば、寄手は何角に心怯れ、先づ此旨早打を以て江戸へ告げ、近日には松平・戸田着陣と聞ゆるを、首を延べて相待ちける。斯くて後松平伊豆守・戸田左門兩御名代、一萬八千騎、日夜道を急ぎける。然れども寒風の中故、海上陸地人馬滯り多く、其上諸國の御附使者幷見舞御人數等、日々相重なり、漸々正月朔日、豊後府内に着陣あれば、軍勢三萬に

も餘りぬべし。是より陸地を二手に分け、進發あるべき所、早馬敷波打つて、正月朔日巳の刻、原の城に於て、御名代討死と告げ來りしかば大きに驚き、晝夜道を急ぎ、揉みに揉んで駈付けらるゝ。正月四日の夜、島原高久の城迄着陣なり。正月五日より、御陣定格別御申觸あり、且又道々より御分別にやありけん、大札數百枚御調なされて、早速在々に立てらるゝ。其趣は、今度國民困窮に付、一揆取結ぶの條是非に及ばず候。其親類近き緣者なりとも、耶蘇宗門を相離れ、一揆に組いたさゞるの輩は、何の御構も是なく候條、安心仕候て、農業等常の如く相勤め申すべく候。飢に及び申候に於ては、御救米下さるべく候。若し城中と通路の者有之に於ては、一揆の十倍罪科たるべき間、耶蘇一味の者等早速聞出し候て、御褒美に預るべき事に候。或はそくたく銀等則御定書あり、又數十枚を城門の前に立てさせらる。一揆の輩、落城已前耶蘇宗門を離れ、陣門へ出づるに於ては、父母妻子永く御免なされ、忠節により、本人へ褒美下さるべく候。縱ひ頭分の者なりとも、一揆一味の志を離れ出陣に於ては、悉く御宥免之あるべき者なりと、或は讀聞かせ、又は觸流しければ、城中

も、今度の御名代の寛なるさまに、大きに痛み見えける。始めの板倉殿には、進物書狀を以て怒らせけるに、今度は何となく城中味方同志も、心を置く樣なる體になり、あら難かしの今度の討手やと、頭分の者共心を惱しける。城中には中々撓む色なく、心も變ずる者もなかりしかども、城外の便宜は、是より不通に切れて、忍の出入も能はざりしかば、城中の大きなる惱みとはなりにける。松平伊豆守殿は、着陣より、諸手の戰功、罪の輕重、軍中法令の事のみにして、攻口軍術の沙汰はなかりけり。武に勇める者は吃き、軍場に、又江戸の評定場の出來たるぞや。何事もなきに、去年より此方、御吟味のみ打掛り、斯く顯はれて向ふにある、原の城は捨置きて、見ぬ顏なる事は、軍を知らぬ伊豆守殿を、天下の智慧者とは事可笑しと、いふ者共も多かりけり。板倉殿のいら〳〵、伊豆守殿のゆる〳〵とて、諸人評判、天地懸隔なり。其上長崎始め諸手津々浦々迄、御指圖殘る所なく下知せらるゝ。されば長崎は、第一の舟の津なればとて、行々迄の爲に、制札に用ひらるゝ。其寫略之。是より後寶永五年十一月九日、薩摩侯より變客一人を送る。羅馬伴天連といふ。南京、日本へ、又々

法を廣めんとの事なりとて、伴天連名は伊多利爺、國はしよあんといふ。年は四十計、髮黑く鼻高く、衣裳は下に四つ目の紋あり。花色木綿着物なり。脇差金拵へ、覆輪に好みと見え、あんたまりの佛一體、世界の圖一牧、書物八冊、內一冊は日本通用の詞、又二冊は常に身に添ふ。いんすかけめ九十目、元の字小判廿兩・金四十四包、金の針金の內に、細き十文字合せ目あり。早速御返しあり。右の後再び伴天連渡らずといふ。然るに松平伊豆守信綱は、秀才の人なれば、先づ地方の政事を聞き、逐一に聞屆けられしに、今度天草四郎が親幷に妻・老母、細川の手に生捕り、長岡監物が裁判として、若御尋の事もやと、陣中へ召連れ來る。伊豆守是を究竟の事なりとて、渡邊小左衞門幷母妻三人を、詰の白洲へ召出されて後、諸大將役人等皆詰居させ、伊豆守則小左衞門を引出し尋ねらるゝは、今度汝が悴四郎、逆賊の大將と聞及ぶ。然らば其方根元を知るべし。切支丹宗門信仰の一編の事にや、又外に志もあるにや、又四郎が年は何歲なるや、委細包まず言上すべき由なり。小左衞門申しけるは、先づ以て拙者儀代々淨土宗門にて、耶蘇宗門は嘗て以て用ひず、手前代々福分に候へば、

別して慾心の思立に非ず。一揆の根元は、天草より事起り候。悴四郎事は、伯父甚兵衞勸に依つて、今度惣大將に紛れ御座なく候。親子の間に候へば、遁るゝに道なく候段、兼て存知罷在候。尤四郎、年は當十七歳にて候。又私儀兎角の返答申上げ罪を遁るゝ所存、全く御座なく候。別に此事、隱し申す事も、又他に申上ぐべき事も是なく候とて、再び詞なし。何程御糺明あつても、目を塞ぎ無言なり。又小左衞門が老母、今年既に八十歳、子供夫婦が繩目に目昏れて、暫く氣を失ひけるに依つて、伊豆守殿、是にては道付かずとて、老母と妻とは、繩を許し給ひて、伊豆守、則妻に尋ね給ふは、汝が悴四郎事、未だ年も行かずして、今度逆徒の張本人たる事不審なり。併し若輩者なれば、深き所存もあるまじきなり。今降參するならば、親子三人命を助けて元の里に返し、以前の世帶を遣すべきなり。城内の者共構はずして、四郎只一人出城すべき旨、矢文にて申入るべし。狀壹通相認めべきやとある。彼女大きに喜び、扨々有難き事にて候。成程然るべきやうに申入るべき儘、筆紙を下され候へと申しければ、伊豆守殿も、其外在合ふ諸人、是は一段能き所存やとありければ、夫小左衞門大音上げ目を開き、未練千萬なる女が心底かな。今城中の者共、四郎を始め、必死を定めて居るらん。何と迷ひ取る事あらんや。誠に七人の子はなすとも、女に心許すなといへり。汝、四郎が大惡魔なるぞ。迚も助かるべき命には非ず。不所存の女かなと、涙を零して白眼みける。女房は少しも構はず打笑ひ、小左衞門殿は男なれば、飽迄武勇を磨き給へ。此方は失ふとも、四郎と老母の命を助け、目出度世に榮えんと思ひ侍るぞやとて、片脇より文細々と、二重に封じ差出し、懇に相認め、定めて出城降參申すべし。此封の儘に遣し下されといふ。伊豆守殿大に喜び、是一段の事、さり乍ら內を改め遣すべしと、彼文を役人開き讀ましめ給ふに、先づ手跡美しく、其文に、

日頃の身持、あらぬ事のみ思ひしに、今は早殘るべき道にてもあらず。寄手大勢取結ばるゝと聞く上は、伯父甚兵衞殿とも能々申して、必ず神妙に人々をも勇め、相共に最後し給へ。母上も小左衞門殿自らとても、今に露の命永らへ居たれども、終には同じ道、冥途黃泉にて、再び對面すべきにて候。親子一世と申せども、何

とぞ〳〵さはあるべき。只一蓮を頼みにて、逆徒の中にも大將と聞けば、親の身にしては喜ばし。偏に〳〵最期の程、心元なくこそ。返す〴〵後れ給ふべからず。穴かしこ。

けふ

四郎殿へ

母より

と書納めてあり。實にやいふ、少しき深き諫め、心を籠めて調へけり。伊豆守を始め、滿座の人々大きに呆れ、女には、さて〳〵珍らしき心正しき者なりと、暫くは感じ入りけるが、伊豆守殿仰せけるは、汝常々彼宗門を嫌ひ乍ら、何故四郎に強く意見も加へず、斯く天下の一揆を催し、剩へ大將に迄なせしぞや。女聞きて、是は殿の仰とも覺えず候。我々賤しき者乍ら、相應に田畑抔も持ち、代々金銀不足なし。然る上は只一人の子を惡黨に組せよ、百姓一揆の大將になれと、申す親の候べきか。縱令十府の菅菰の上、如何なる麁食の水を飲んでも、親子一所にあらば、喜ばしかるべきに、是れ浮世の人の習なり。然るに四郎、いつの頃よりか、友達とする所は天草

の伯父、緣につれて、葦塚・大矢野・千々輪なんどいへる人々と打寄つて、朝夕武藝修行の上に、何角に付け心猛々しく見え候故に、四郎へ意見を加へ、誠に何の不足もなし、家にて心の儘に遊び候へ。由なき事仕出して、父母に辛勞を懸けなと、常々諫め申して候ひしが、斯く迄の事とは存せず候。殊に未だ幼年の者に候へば、何ぞ彼宗門歸依荷擔の心あらんや。友達とする人々こそ、今こそ浪人にて困窮の上なり。昔は究竟の武士と承る。然ればさのみ惡しき事もあるまじ。我子の親しき友達と思へば、四人の衆も隨分勞り申候。其後暫く遠ざかりしが、思はず今度の一揆起り、我子乍ら、四萬人の大將と聞く上は、同じ惡逆の中にも喜ばしく、其上序々の軍に打勝ち、此上は滅亡するとも、心に思ひ殘す事なし。只同意の人々と一所に、潔く死ねとこそ思ひ候へ。併し月にも花にも、只一人の子の、而も利發なり器量者と人に譽められしを、死ねと勸むる親心、切なる事に候はずやと、涙灑を流して伏沈みければ、座中一同に、惡事は外になり、不便の者や、一揆とは思はずと、何れも感涙あれば、伊豆守殿も、由なき者を引出し、詮なき暇入りたりと思はれければ、急ぎ本の如く禁獄

さすべし。落着迄は、細川家の預りたるべし。此者は下郎乍ら、大切の四人なり。大事に致すべしと申渡されける。其時彼女、今一應御前へ申上度事ありと、居直りて申しけるは、伊豆守様と申せば天下の奇才、御老中日本一の智慧者なりと、國外れの田舍迄、申觸るゝが、見ると聞くとは違ふ者なり。天晴あなたの知行を、我子の四郎に領せさせたらば、又世に並ぶ人もあるまじきなり。只今殿の御言葉の内に、下郎と仰せられしは、一揆の頭にもなりし身の、殘念に候ぞや。自らが父は天草甚兵衞と申して、元來安藝の國中村の城主阿曾沼中務大輔と申す者の末にて、夫より七代の嫡流にて、四代の間は、天草を稱號と仕る。氏は秦氏なり。古今武家の盛衰珍しからず候。又父方は渡邊小左衞門、長崎より原村へ入る人にて、本國は平戸の者にて候。渡邊流にて替月本名にて、渡邊源太夫安が支流なり。四郎事は、父方渡邊母方天草にて、由緒正しき儘、賤しめ給ふべき者にあらず。其賤め給ふ四郎こそは、只今四萬人の大將にて、原の城に籠り、九州の諸大將數萬人集り、度々打勝ちて、御名代板倉殿さへ討死あり。城攻三度、皆敗軍し給ふと承る。今に城中は、鐵石の如く怵

へ候ぞや。人の恥が我恥、思ひ給へ、今天下の大將達、大勢寄り給うて、此城一つ攻落すに術なくて、一人の母を賺して、四郎を生捕らんとは。切て手を失ふたる有樣ならずや。斯くいふ女の端なき乍ら、下郎といはれし口惜さ。我子は下郎にもせよ、各樣は、扨も結構な上郎方の敗軍やと、憚る所なく言立てしかば、一座の不首尾、面々一言もなし。又荒立てなば、益惡言をいふべきやと、各目を見合はせ、聞かぬ顏にて、細川の手へ渡されける。

南島變亂記第十七畢

松平戸田着陣の事幷天草四郎母紛明の事

南島變亂記 第十八

釣井樓の事 井 山田右衞門返忠の事

斯くて兩御名代は、御目附・御横目、其外諸大名を會合して、此原の城堅固なりと雖も、諸家の武士多く取卷き乍ら、空しく食詰も、餘り無念なり。所詮此儘打捨て置くべきにもあらず。近く一攻あるべしと、全く其用意の外他事なし。前に棒火矢といふ火藥にて、人損じ陣中亂れ、其上陣小屋の燒くる事もやと、此用意專なり。諸手の次第は今迄の如く、追手は黒田一家二萬八千人櫛山口へ、細川一家三萬五千人、中の手は小笠原一家一萬五千人、相續いて立花父子寄合組子二萬人、出丸口は鍋島父子二萬五千人、水の手寺澤・松倉に有馬一家、御名代松平伊豆守・戸田左門此陣を守護して、毛利・相良・水越一黨、海の手は島津勢、長崎の堅めは、大村・松浦、又宗對馬守は自ら國の端に押出す。其外在陣の次第、筆を取るに遑なし。伊豆守信綱は、萬事に念の入る事を好んでければ、信綱工夫あつて、城内の虎口・持口やう、又軍兵の多少・兵糧の體・鐵炮の間配、委細に見屆けずしては、攻め難きものなりとて、俄に諸大名の中へ役に當てゝ、土俵數萬俵を出させ、役歩を割渡し、又近邊の百姓を選み催促して、城の外六七丁間に取結うて、俄に山を築き、人夫一萬人計、夜を日に繼いで、傍の田土を運び、段々築立て、廣大に高くして、夥しき人歩を入れて、忽ち見上ぐる計の高山、俄に嚴然として出來し、偏に神仙出現の樣にこそ思はるゝ。扨彼の山上に井樓を釣立て、其眞中に、細川殿御座船の帆檣、長さ卅間ありし杉の木を立て、釣井樓を引上る。造作莫大なれ共、大軍故早速に成就せり。抑此釣井樓といふは、三尺四方乘物の如くにして、四方鐵張にして窓を明け、物見を付けて、轆轤にて引上ぐる。其中に人ありて、敵の陣を遠見するなり。高燈籠の如く、既に築山釣井樓成就の上、此内に見定むる人を選みて入るゝ。幸ひ信綱の近習の内に、才勝れ、軍法をも大略に合點したる者ありければ、是を釣井樓の内へ入れて見屆くべしと、筆紙等用意して、中に

入れ釣上る。城中には築山を見て、葦塚忠右衞門大に笑ひ、此人も武には馴れざる御名代なり。是に人が乘入り、何の詮かあらん。併し彼釣井樓の中の人を打殺し、敵の肝を取拉ぎたき由、例の鐵炮の名人駒木根父子を呼んで打潰し、釣井樓迄の間數を積り、鐵炮にて打落し、名譽を敵に知らしめ給へといひければ、駒木根父子、心得しとて、追手の城戸を下りに、椎の木の茂りたる所あり。彼の椎の枝の少し籠りたる內に上り、釣針を以て是を見るに、此木の上より百五十間程と積り、扨十匁玉に五德藥を籠めて、兼て待受けたり。五德藥といふは、焰焰九と山すか、硫黃二分。是二九二一といふ祕法なり。既に寄手、釣井樓を釣上る節、駒木根椎の木の上より、火蓋を切つて待懸けたり、寄手斯くとは夢にも知らず、竹束を打揃へて、築山の上に大勢集り、ふらり〳〵と釣上ぐる體、軍用とは見えず、慰の如し。斯くて加減よく釣上げたり。此時城中より、麓々に向ひて鐵炮を放つ。すはや城より馳向ふと、陣々用意をする。此紛れに駒木根は狙ひ濟し、井樓の窓より顏を出して、遠見する所を打つたりけり。誤たず眉見を打拔かれて死したり。遙の高みなれば、下には曾て是を知らず。駒木根は木より忍びて下り、城に入り、十分仕畢せ候と、靜まり返つて居たりける。去程に漸々半時計りありて、今は早城中殘らず見盡したらんと、下へ下せと下知ありしかば、打寄つて引下す。段々早二三間も下したる時、使番聞番集り居て、聲々に樣子いかにと尋ぬれども、一言の返答なし。不思議なりとて、引下して見てければ、こはいかに、眉間を打拔かれ朱に染みて、早疾く打殺されたりと覺えて、手足冷固まりて、苦々しき體なり。こはそも魔所の業にやと、大きに驚き、急ぎ本陣に連れ歸りて、此由を申上る。伊豆守殿不興乍ら委細聞屆け、呆れ果て居られしが、暫くあつて、扨も鐵炮の上手共の居る事ぞと計り、申されたりとなり。いらざる事を仕出したりと思はれたるにや、再び申付けらるゝ事もなく、大勢の人步諸材木打捨てける、凱陣迄も、此井樓の事沙汰しては、伊豆守殿の廻り遠き分別をぞ笑ひけり。北條安房守に、後或人此一事を尋ねしに、是は六つ指なりと答へられしとなり、扨爰に城中十二人の評定頭の中に、山田右衞門といふ者あり、當時中の手の矢倉預かり、一方の大將分にして、組下の百姓五百餘人あり。元來天草上津の地侍名主にて、大村の長として、大福裕の者なり、學問道

山田右衛門返忠

學の人、文筆の達者にて、老母に孝を盡し、先九ヶ國に當時稀なる人なりければ、島中相共に、貞信の人なりと是を用ひ、彼の親に孝なる事は、唐土の曾子山谷ともいひつべし。耶蘇宗門などに傾く人にては嘗てあらず。されば島中擧つて一揆する故、是非なくも組せしが、滅亡も旦夕にあるべしと覺悟して、同國蓮池といふ所へ、老母に妻を添へ、預け置きて、能く孝を盡せといひやりけれども、猶心元なく、終に今度の制札の文によつて、返忠の事を思立ち、其功はならずと雖も、四萬人の内、只此山田親子三人が、不思議に命助かりけり。此人孝行、近代の書にも出でたり。老母の僅の志を養はんとて、寵愛の妻子離別迄の事あり。事長き故略之。他本に付いて見るべし。扨山田右衛門城中にありて、熟と老母の事を案じ煩ひ、何卒助けたく思ひ、此度の逆徒も、遲いか速いか、是非滅亡眼前なり。自分は死すべき覺悟勿論なり。老母の命を助けんときつと思付き、密に一通の矢文を認め、或夜是を射出したり。則小笠原家の陣の前に落つ。彼文を見るに、寄手御軍中へ、原の城中より山田右衛門進上と書付けたり。依つて小笠原右近將監、是は何にしても味方の善事なるべし

と、急ぎ御名代の前へ持出でて披見あり。

乍恐謹で奉申上候。城内一揆十二人の内、中の矢倉の大將分五百人の頭天草島上津浦之司山田右衛門、御忠節可仕趣、左之通書付奉捧候。

今度逆徒の事、私儀從最初耶蘇宗門曾て信用不仕、代々禪宗にて御座候所、天草一揆頻に蜂起、不及是非、當分の急難故に一味仕候。其實は一人の老母幷妻事、同國蓮池に聊か由緣の者候而所書在之差遣置候。尤老母を人質に差上申候。彼が命助け下され候はゞ、則相圖の日限相定、御下知次第覺悟仕るべく候間、城乘なさるべく候。其節私持口を開き、軍勢を城中へ引入れ、早速落城可仕候樣に、相働き申すべく候。私儀助命の儀は、願是なく候。老母一人御助命下され候はゞ、右の忠節仕るべく候。御返答に依て御下知蒙り、其用意仕るべく候。早速中の矢倉の筋へ、御返答待上候已上。別に狀あり。

伊豆守殿聞召して、是一段の事、謀略の者共多く籠るなれば、一應にては極め難し。急ぎ蓮池の老母を召捕り糺明し給ふ。伊豆守殿直に相尋ねらるゝは、山田右衛門が

母は汝か。且山田事、切利支丹を信じたるかといはるゝ。母答へて申すは、悴右衞門事、耶蘇宗門にては御座なく候へ共、妾が常に彼宗旨を信心申候故、是非なく一揆に組仕候。悴を御免候はゞ、妾早速ころび申すべく候。彼が罪は、母に起る事に候と、子をかこふの口上なり。伊豆守殿又曰、然らば其方、切支丹の譯を知りたらんと、一々尋ね給ふに、宗門の唱へ事さへ何の埒もなく、元來伴天連も伊留滿も嘗て覺えず。此上は山田が返忠實定なり。伊豆守殿、諸將を集めて申されけるは、既に時節到來して、城中より斯樣の返忠の者あり。決して落城近きに候と、彼の矢倉文を披露して、凡て城攻の事、古來より手筈を取つてするに極まる。明後晩は、正しく破敵の日に當る。則此旨然るべし。前々より、斯くの如くの日にこそ軍すべきに、城の守堅固なる所へ乘懸け、無謀の軍、沙汰の限りの軍術なり。今より我下知を伺はるべしと大言して、彌寛永十五年正月十二日の夜、城攻と相定まる。右の趣山田が方へ、老母が狀を添へて矢文を射返す。日暮頃、人顏の夫か是かと見ゆる頃、中の矢倉を目當にと、小笠原右近將監の中、精兵と聞えし者に射返させられしに、逆徒今暫の運や

強かりけん、此矢文思ふ所へ届かず、少し此方へ落ちたり。城中には、今度寄手より城兵を招く高札立てし後は、葦塚忠右衞門萬事に心を付け、寄合浪人の中、心腹の者を選んで十三人、夜廻りを增したりしに、此夜此手の番は、毛利平左衞門なりしが、此矢文を忽ち見付け、密に取上げ改むるに、敵よりの矢文なれば、急ぎ走り歸り、大將四郎太夫が前に差出す。四郎時貞一覽して大きに驚き、密に軍師葦塚忠右衞門を始め、腹心の面々を呼集め、件の矢文を披露して、此事いかゞすべきと評定する。時に葦塚忠右衞門が曰、是城中の一大事なり。山田一人は惜むべき者に非ずと雖も、此事露顯すれば、諸手の物頭、大方山田が類なれば、忽ち心々離散し、氣を置合ふになつては、此儀一日も怺へ難し。以の外大切此時なり。只我詞に從ひて、我々が差圖を守るべしと、能々衆に示し、先づ何氣もなく山田を呼寄せ、犇々と圍みて、葦塚いふやうは、いかに山田殿、貴殿の隱謀已に露顯せり。今は殘らず白狀せられよといふ。山田もさる者にて、夫は雜談にて候べし。何とて某左樣の所存あらんやと、さらぬ體にて居たり。時に四郎、此矢文を取出し見する。山田氏、此上は一言も申すべから

ず。天命の盡る所、全く命助かる所存に候はず、母の命を助けんと思ふ計りなり。此上はいかやうとも計らひ給へと、死すべき命少しも恨なしといふ。四郎を始め一座の面々大きに怒り、近頃憎き山田が心底なり。見懲の爲め、彼が一族殘らず召捕つて、逆磔にすべしと罵り騷ぐを、葦塚大きに制し、凡そ軍法は、其次第に任さるべしとの約束なり。先づ能く心を靜め給へ。面々の了簡の通、山田を殺害して、敵伊豆守に鼻あかせ、笑ひ嘲らんは心地よしと雖も、夫は對々の軍の事なり。今日は大きに夫とは替れり。仔細は、今山田を成敗する時は、彼が組下五百人、敵となるべし。殺し盡しては叶ふべからず。山田常々慈悲深くして、親しき百姓多し。又渠が居村上津は、此度の大事を擧る源なり。一家親類に、彼が下司の者多し。山田を殺害せば、目の當り敵となる者多かるべし。先づ中の手虎口を持ち、大將には毛利平左衞門・四鬼丹波兩人を入替へて、別の人數七百人を斥けて、山田が五百人の組下は、赤星內膳が組に入替させ、扨申渡す趣は、山田右衞門事、本丸にて大將四郎太夫時貞の軍談相手に賴み、師範の列に付けらるゝ條、已來汝等は、赤星內膳が組に入替させ、下

知に從ふべき旨申渡し、五百人の者共、其外山田が彼家の子抔も、いかさまにも山田右衞門殿の人體學文、九州にも雙なき人なれば、大將の師範には尤なる事なり。五人の大老、赤星の組下に入る事なれば、さもあるべき事ぞと、此一手一人も疑はず。中の手矢倉の組下代つて、城中忽ち靜まる。斯る大變に當つて、少しも動轉せざる葦塚忠右衞門が智謀、感じても又餘りあり。山田右衞門が有馬の牢とて、城山の後谷合、嚴しく拵ひて、其中に禁獄し、手伽足伽首伽を入れて、少しづつ喰物を與へ、打込んで置きたり。然れども孝行の德、天に通じたる故か存命して、原落城の後、不思議に命助かり、親子三人、本の如く居座りける。去程に城中には、山田が事靜まりしかば、葦塚忠右衞門、さらば返忠して、敵を引入るゝたばかり返書して、城中へおびき寄せ、快く討殺して、智謀立する松平伊豆守に肝を潰させ、再び正しく向うて、城見せぬやうにすべしとて、先づ赤星內膳は、小細工能くて、手跡も能書なれば、山田右衞門が書捨てしを取集め、赤星に與へ、同筆と見ゆる程に返書を作らせ、文法は、小笠原殿の御取成悉く候。萬端吹擧に預り度候。老母赦免の儀、返すゞゝも有難き

事に候。左候はゞ、彌正月十一日亥の刻を限りに、御勢を寄せられ候へ。火の手を相圖にして、中の手の城戸を開き申すべく候と、懇に返書して矢を射返し、扨城中の手配を定め、中の手の櫓には、相圖の柴を積みて、毛利平左衞門・四鬼丹波七百人、松明玉火用意して、例の棒火矢大筒小筒を隙間なく伏せて、諸手の櫓前々の如く、其上遊軍救兵として、敵の強からん方へ馳合さんと、例の千々輪・大矢野なんど、勇を含んで待懸けたり。天晴此軍法、古來にもあらぬ方の術なれども、斯く城中、誠に混亂の時に當つて、斯く靜に手配を定むる、大勇妙計の仕方嚴然として、世の常の時ならば、寄手を城内迄もおびき入れて、城戸を打つて引包み、一人も殘らず討取つて、快き首實檢すべきものを。只今籠城も永々にして、軍民飢る勇氣の撓みし時、寄手より和議の謀にて引入れんとする詞耳に入つて、百姓共の心中、多くは山田が如く動き立つる最中なれば、萬一敵を城中へ引入れ、若又一手變を生じて、實の返忠の者に及ぶべし。大軍に向ひ、終に調略を以て城を守る時なれば、殘念乍ら城外にて打破る事と極めけり。誠にゆゝしき計らひなり。さればこそ天下の大軍、九州の英雄を

目の下に置いて、安然として兩年の籠城、一度も不覺の働なく、俄の土民を御して、勇將の士に對し、斯く迄傍若無人の振舞、さすが天下の大老名人松平伊豆守殿に手を取らせたる、葦塚忠右衞門老將の勇略、舌を卷く事にぞありし。

南島變亂記第十八畢

釣井樓の事幷山田右衞門返忠の事

南島變亂記第十九

正月十一日合戰の事并由井正雪傳の事

山田右衞門が返忠に依つて、既に十一日亥の刻、押詰めらるべしとの返答の來りし矢文、同筆と見えしかば、伊豆守大きに喜び、惜むべし板倉内膳、血氣の勇にして謀を知らず、久しく對陣の内、一つも斯くの如き謀なし。今夜必ず天草四郎を生捕るべしと、旗本を押出し、十一日の早天より、段々に詰寄り、先づ兼て相圖の備、一番に中の矢倉筋小笠原一家三人、相軍五千人、其次に立花左近將監父子八千人、追手は黒田一家三萬人、浦の手は細川家一類、彼是相圖を待つて取詰むべき支度なり。小笠原衆は、敵の相圖なれば、當城の一番乘、我手なりと上下喜び、竹束楯なんどさへ打忘れ、山田が相圖を賴みに、堀の岸矢倉の下に押詰めて、相圖遲しと待懸けたり。後

陣は立花父子、同じく坂中へ押上れば、御本陣も平草山の麓迄押寄せて、相圖遲しと見る所に、忽ち中の矢倉より、籠火狼煙ぱつと燃上れば、前軍すはやと一同に押込む所に、四方の櫓々一同に、松明ぱつと振上げ、只白晝の如く、天帝の旗數十流十方に飜り、秋風に飛ぶ白雲の如し。寄手、こはいかにと肝を潰しける所へ、矢倉より大音に呼ばはるは、山田右衞門事隱謀露顯に付、城内に召込め置き、外の者共此手を相守り申候。追に天下の御名代御軍立として、山田如き者の相圖を御賴あつて、夜陰に是まで寄せらるゝ事、諸國の聞え耳に恥かしく候。尤之に依つて御慰の爲、棒火矢二三十御目に懸け申すべく候。暫く御陣を召されて御見物候へ。前の御名代の如く、良もすれば逃尻にては、御無用たるべく候と、同音にどつと笑ひ、四方の櫓より、一同に鬨を上る。先陣の小笠原一族大きに驚き、上下震動する所へ、棒火矢數十本ひら〳〵と發せし程に、闇夜の中に火光散亂し、餘煙四方の草木に亂れ懸る有樣、夏の納涼の花火船、螢を分くる宇治・瀨田の眺も、斯くや見上ぐるに、先手の勢早棒に當り、火に焦されて半死半生の者、四百餘人出來ければ、恢へず亂れて引退く。二

陣三陣入替らんとする所に、則御名代伊豆守殿、兼て軍令に、旗本より半鐘を打鳴らすは、如何なる事なりとも、引取るべしとの軍令なる故、今宵山田が返忠僞にて、城中大きに備ありと聞えしかば、早速下知して、本陣より鐘を打ちければ、すは引取るべしと、先陣二陣同時に崩れ立てば、入替らんとしける立花勢も、伊豆守の號令、兼て嚴しきを知れば、心惑ひて半は進み半は退き、大きに混亂して、上を下へと騷ぐ所を、時分はよしと鐵炮五六十丁、同時に打つて放し、石弓を投下し、黑煙の間より、葦塚左内・千々輪五郎左衞門・大矢野作左衞門、何れも一揆の精兵を引連れ、鋒先三つに分つて突いて下る。小笠原の三陣、同時に崩れ立ちて、討たるゝ者夥しく、人なだれを突いて坂を下る。立花の本陣の前に崩れ懸るを、家老十時三彌、究竟の古き武士なり、敗軍の兵を左に引下させ、本陣を右の一段高き側へ引上げ、一揆の勢の入魂して切つて下るを、餘所目に睨んで堪へたり。是によつて城兵も、細川・鍋島・有馬等の陣々も、未だ攻め上らず、只立花の本陣に後を取られじと馳せ廻る故に、漸々と御名代伊豆守殿の陣も、事故なく引返されける。是を見て十時三彌、一揆は退くぞ。す

はや懸れと、眞先に鎗を入れ、土民原を追捲り、雷光の如く切つて廻る。一揆の先手散々になるを、大矢野作左衞門是を見て、馬駈寄せ飛下り、三彌が鎗に突結ぶ。三彌大音上げ、何者と思ふぞ。立花左近將監が先手の大將十時三彌ぞや。受けて見よと、直鎗を突込んだり。大矢野が左の腕の膕に突込む。大矢野大きに怒り、我が鎌鎗をからりと捨て、右の手に十時が鎗を引奪ひ、走り入りて無手と組む。大矢野は大力なれば、かさに懸つて押付け、十時が首を掻かんとする時、三彌も大矢野が小指を喰切りたり。されども大矢野上になり、十時が首骨に、短刀を取つてぐさと突込みたり。十時大剛の者なれば、咽笛を外して、あらぬ方を突かせたり。此時立花の家臣十騎計乘駈け〳〵、大矢野を生捕れと、呼ばはり〳〵駈寄する。千々輪・葦塚は、黑田の先手と睨み合ひて來り助けず、大矢野作左衞門此體を見て、十時を打捨て馬に打乘り、一散に一揆の陣へ馳込んだり。十時が働にて、立花の本陣は、崩れずして持詠へたり。然る時十時三彌は、老年の上深手なれば、翌日死したりとぞ聞えし。千々輪・葦塚も、勢を纏め引上る。黑田左衞門・黑田賴母、靜々と押慕ふ。千々輪も左内

も、此儘にて引き難し。如何せんと思ふ所へ、兼て城中より葦塚忠右衞門、大繩を兩邊の林の間に振上げさせければ、伏兵鳥銃多かるべし、殊に夜中といひ切所といひ、行先心元なしとて、終に物分れになつて引返しける。鍋島甲斐守直澄は、今晩城乘の事、小笠原殿の手に返忠の者あり、手筈の働なれば、定めて小笠原の手こそ一番乘ならめ。是を奪ふは法に非ずと、靜に用意して出でられけるが、本陣より引取り申すべき由、軍使頻なれば、今夜軍兵を出さず。是又大なる手柄の樣に沙汰しける。去にても今夜の夜討、城中にも殊の外大事なる事に取つてありければ、足長に出づる事はあるまじき事なりしに、伊豆守殿鉦の號令より惣軍崩れて、思はぬ敗軍に及び、小笠原の人數夥しく討死しける。殊に立花先手十時三彌迄討死なり。伊豆守の引鉦今少し遲きならば、小笠原の本陣にて盛返すべきに、いらざる軍法嚴命故に、惣崩れになりけると、人々の沙汰惡かりけり。伊豆守殿も、軍法心の儘に行かぬをば知られけるにや、江戸の早打の次に、先日辭し申されし北條安房守を差添へられん事を望まれし程に、水戸黃門公御滿足に思召し、近日北條殿下向ぞと聞えし。斯く

て城中の軍勢、大きに勝軍して、城中へ引返しければ、葦塚忠右衞門諸手の大將を集めて、今日勝を稱し、先づ以て當討手松平伊豆守殿も、一當當てゝ追崩したれば、當城運を開かずとも、盛名に於ては天下を轟すべし。堅く守つて二月三月に至つて、異國內談の軍船着陣するも計るべからず。各義を守り給へ。人は只義あらざれば、禽獸にも同じ。兼て宗門の同志を堅うして、約束の死を誓ひて城を守り給へと、懇に勇め或は勵まして、各山田右衞門が事を披露しける。諸人皆、山田が心の如きは持つまじと、齒たゝき拳を摺りて、いすまるを唱へ誓をなす故に、城中より足早き者共を下し、城外に立つる所の高札を皆切折り燒捨てゝ後、城中諸手の櫓々を守り、人質曲輪の足輕共を、又多く軍用に當て使ひて、樣々城中心衰へざる樣に取計らひける。されども籠城の日久しければ、去年とは何となく、勇氣衰へ見えたりける。爰に一揆の末將に、山本與茂作といふ者あり。彼は葦塚大矢野に心腹の者にして、元は由井正雪が親岡村彌右衞門が小者なり。不思議の才覺者にて、籠城以來今日迄、城外の事又京江戸の便宜迄、是が手より皆々術をなして通達ありけるが、伊豆守在

由井正雪の事蹟

陣已後は、國民號令に恐れて、通路殊の外不自由なり。されば内々葦塚・千々輪・大矢野に談じて、此體にては行末大義の計略も調ひ難しとて、與茂作は正法の出家となつて、肥前の國中に隱れ居て身を全うし、後の變事を謀れと密談極む。此の山本與茂作は、十一日の夜の合戰に、鐵炮に中り討死せし由言觸らし、密に正法の三衣等、悉く城中にありしを、僧衣法服に不足なければ、葦塚が計らひにて、淨土宗門の出家にぞ仕立てたり。されば龍は大なるべく、變化自在にして、終に上天する者なり。汝城廓に潛み居て功をなす。外にも内にもありしが、落城の砌、此者障なし。必ず慶安の由井正雪が徒に、增上寺の會下廓然と開えしは、此者なるべし。智といひ勇といひ、才覺同名、何角必ず此山本與茂作が事なるべし。增上寺へ立入りし事は知れずと雖も、大方此者ならん。抑慶安の由井正雪が事跡、其先祖或は後身の事に付き、不思議を諸書に表はすと雖も、皆僞作にして、其實は姓氏は正しからず。親は岡村彌右衞門といふ相州の民なり。伯父岡村次右衞門といふ者、由井村に紺屋を業とす。此所に養はれ居て、學文手習の爲め、山寺に籠り居る事六年、此山寺の奴、甲州

家浪人何某が家に、久しく仕はれたる者故、武一道の學を學ばざるものなし。其頃正雪は吉次郎といひ、天性武を好む。終に心誇り、足洗村半左衞門といふ百姓あり、身代富貴にして是又武事を好む。相州甲州の浪人多く此家に宿る。是に依つて彼の正雪、終に武者修行して、此足洗村に居す。甘歲の頃、諸國武者修業して、遠く天草島にも至る。此時は正雪變名して、高松與五郎といひ、天草にて森宗意・天草玄札が元にありて、武者修行し終りて、切支丹の密法など口授し妖術を授かり、諸國にて廣めんと約束す。然れども天下第一の制禁なれば、正雪大志あつて終に言出さず。幸に江戸に楠不傳が家に重んぜられ、大志あれば、志を枉げて能く諸人に仕へて、終に大勢の門弟を引廻す事を得たり。されば正雪未だ武者修行して、天草島にある日、葦塚等に會し、天下時勢の事に及ぶ。天草玄札曰く、我れ日頃大坂籠城の成功なき事を、甚だ不審に思ふ。赤星内膳、常に大坂籠城の人をして無能なりとす。我れ思ふに、皆英士なり。然るに何ぞ一戰の快き勝軍もなき事ぞや。葦塚笑つて答へず。正雪が曰、老君何の爲に笑うて答へざるや。葦塚が曰く、無能といふも、其所を得ず、

英士といふも、其所を得ず。我れ今一度小軍を以て天下に背く事あらば、縦ひ何十萬の寄手なりとも、二度も三度も駈惱すべし。然れども彼眞田・後藤に、我れ何ぞ勝らんや。只其所を得ると得ざるとに依るなり。玄札が曰く、天の時・地の理・人の和は、是必ず勝の利なり。大坂の事は、秀頼は主にして、秀忠公は臣なり。天の時を得るや。大坂の城は、天下の地の理を極む。城中諸士、一人も關東へ下る者なし、人和するなり。是何の背く者ありて、斯くの如く亡ぶるや。葦塚曰く、三事皆背かず。只時の一字違へり。秀頼主にして、家康公の臣なる者は天なり、時にはあらず。天の時とはいひ難し。時をいはゞ、今は蟄して時節を待つ。家康公死去ありて、兄弟心麁情なる時を考へ、天下の諸侯の中、二三の英雄を語らひて關東を征せば、理必ず大坂に勝ありて、縦ひ三才七騎揃ふとも、時の一字違へば、萬事皆瓦解す。今此地若し亂をなす事を得ば、僅に一隅の時にして、天下の時に非ず。功をなす事は難しと雖も、少しは天下の耳目を驚かさん。君若し天下の大志あらば、是より甘餘年を待ち給へ。萬一不思議の時至るべし。我輩老年にして、空しく土民の中に死せんよりは、武名の本に終らんと、内々に事を企む。君は早く東武に歸り、諸國の英雄に因みて、静に事を謀り給へ。當主家光公は、奇代の賢君なり。此世は必ず色にも出し給ふなといふ。正雪大きに喜んで、種々約談して別れける。正雪則同心誓約の家人に、山本與茂作を呼びて、葦塚忠右衛門に仕へしめ、不思議の通路を求めて、折々に通ず。正雪別るゝ時に至り、葦塚左内も正雪と同年なれば、同道して立去らんと思うて忠右衛門に問ふ。忠右衛門潜に占ふに、離爲火の卦を得たり。此卦吉兆と雖も、上明かに下密なれば、叛逆隱謀には不吉にて、事の顯はるゝ象あり。殊に一網を出でて一網に入り、終に繩目の恥あるに似たりと見てければ、甚だ愼みてこそ伴ふべしといふ。左内いひけるは、此事止むべし。老父を捨てゝ去る、不孝なり。清平の世に至つて逆亂を思ふ、不仁なり。同志の人々の約を變ず、不義なり。不義不仁不孝にて、何處にあつて何の功をかなさんといひて、終に正雪に同意せず。正雪も強ひて伴ふ事をせずして立別れけるが、正雪は原の一揆共落城して十三年、家光公御他界ありし程に、時至れりと見て、江戸に丸橋忠彌といふ者を語らひ、叛逆をば思立ちけ

る。葦塚がいひし如く、廿餘年を待ちなば、天下に如何なる一味の大名、或は近代の柳澤如き、荷擔の人もあるべきものを。早きにや、天下に一人も大名の一味なくて、終に松平伊豆守殿の智惠に碎れ、籌策に出でずして、慶安四年七月廿五日、功成らず して、駿河の府中七間町梅屋太郎左衞門が宅に死す。此時增上寺の所化廓然も、同じく時に自殺すといふ。事は慶安變に委しく記す、故に爰に略す。

南島變亂記第十九畢

南島變亂記第二十

北條安房守傳の事

御名代松平伊豆守殿、江戸注進の砌、軍中の要用、萬事心元なくやありけん、又はさすが無我の伊豆守といはれし程の人なれば、水戸黄門卿の志、察してやありけん、則北條安房守早速下着せられ、軍の意見ある樣にとありしかば、水戸公にも御安慮あり。頓て江戸進發と聞えし。抑此北條安房守氏長といふは、元來小田原早雲より五代にして、美濃守氏規の末葉なり。是は氏直弟なり。北條遠江守相續す。其別家龐子の家にて、黄八幡と號せし人の子、幼名は新藏、六歲より東照宮に仕へてより、不思議の性質、別して軍學に通達す。されば北條流軍法殘らず、一流此人に相傳する上、甲州の家流軍法、殘らず口授す。其師は、甲州の名士小幡勘兵衞景憲より受く。

北條氏長島原下向

されば東照宮、甚だ奇才として深く稱美あり、御子台德院樣の御師範となる。日本軍法流行も、たゞ此人の一身にあり。北條流とて、天然神妙の術、仰いでも又仰ぐべし。當時家光公の御師範として、朝暮御伽ありて登城暇なしと雖も、水戸公は卽ち東照宮の御孫、御父は正三位中納言賴房卿なり。只今黃門光圀卿とて、文筆全才の大器、殿中も只此人の御詞に、背く者一人もなし。今度天草一亂も、全く光圀卿の身に引受けて御取捌なり。此光圀卿より、今度伊豆守相願ひ候て、安房守氏長下向なくては、早速の功叶ひ難しと、强つて御意なれば、暫時も御用多きなれば、軍師の命を蒙りて、今度九州に下向す。北條安房守年積りて六十歲、勇壯にして少年の如し。若年の時より、所々にて戰功ありと雖も、他人に讓りて自ら譽とせず。平生詞寡く行足らず。廿五歲の時、秀忠公に隨ひ、上田の城に向うて、眞田父子が城を取扱ふ。畢竟の成功は、安房守氏長が積りに出づ。然れども顯露に功を顯さず、平生の詞皆驗ありて、行何にても遂げずといふ事なし。東照宮其器を知つて、牧中の麒麟と宣ひて、高祿を與へ給はず。事は末卷に悉く記す。始の名は新藏といふ。御寄合頭より上

り、下總國中田川崎・武州箕輪の城主となる。寬文十年庚戌五月廿九日に卒す。年八十二歲、法名趙州院相陽西意大居士といふ。其子代々安房守といふ。後は町奉行を勤めし人もあり、江戶景圖等板元、皆此安房守氏長が始むる所なり。されば軍學名高く高弟多く、其中に山鹿甚五左衞門といふ、第一の弟子あり。是は福者にして、浪人にて淺草に住す。或夏の夕暮、御三卿の中、此邊を通り懸り給ひしに、俄に夕立して、雨具を屋敷迄言遣さるゝの間、暫く此宿りにて御休あり、御家來の中、山鹿甚五左衞門を師とする者多ければ、則雨具の事を尋ねしに、山鹿御安き事にて候とて、淺き羅紗の雨合羽三百を出して奉りければ、公大きに驚き、謝して御歸ありしが、其頃慶安正雪が後なれば、公儀殊に御安慮なく御疑にて、山鹿甚五左衞門忽ち御預けにて、淺野內匠頭に渡り、播州赤穗に引移されし。是に依つて淺野家中、軍學大きに流布し、大石內藏之助、深く山鹿が門人となつて、道を得たりといふ。其次弟子佐々木四郎兵衞、水戶公の御家人にして、則加州金澤家中有澤采右衞門が師なり。事長き故、其頃の軍學師一二を記す。

北條安房守

佐々木四郎兵衛甲州御家人有澤氏師なり。

寺井三右衛門京極殿家人。加州前田駿河守内富山六右衛門師なり。

遠藤伊兵衛公儀御家人。

山鹿甚五左衛門浪人、播州赤穗住大石内藏之助が師なり。子山鹿藤介、江戸回向院の裏住浪人なり。

熊谷四郎兵衛酒井雅樂頭家人。

杉山八藏松平越中守家來。

仁科内藏助和武備志作州。

二月六日夜討の事

斯くて原の城には、葦塚忠右衛門、種々の方便を以て味方を計り、籠城の心を慰めけれども、日久しき籠城なれば、心怠り氣疲れて、勇士は早く討死を思ひ、弱卒は心草臥れて、勞れたる者多し。理かな籠め置く所の雜穀枡も、滅滅早く、廣野の樣に、跡の見ゆる所多く、隨分澤山に見すると雖も、何となく心淋しく、俵藏一つ二つになりて、最早是程の命かと心細く、若しや異國より救の兵も來るかと、空しく青海に立盡して身を悶ゆ。波の音風の響のみにして、漁火商船さへ行通はぬ折節に、白鷺の飛行くのみ、帆影の思をなして、慰む方ぞなかりけり。葦塚忠右衛門是を見て、さらば

土民の心勇みに、一夜討して納得させんと思立ち、先づ何にても所作あれば、さのみ心の疲れぬものぞと、長き計略を廻らしける。先づ惣軍の心を轉じ、勇を出す爲に、大篝を燒きて軍將を集め、細々謀を示し合せける。扨味方の一揆を五組に分けたり。千・天・大・赤葦の標を定む。其一組は大將葦塚忠右衛門代忠太夫・同左内、組下頭は四鬼丹波・時枝隼人、足強達者なる一揆五百人、皆鎗手鋒の類を持たせたり。二の組は千々輪五郎左衛門、相從ふ組頭は、大江治平・上總三左衛門・鹿子木左京五百餘人右同斷。三の組の大矢野作左衛門、大將として堂島對島・菅谷等、一揆五百人右同斷。四の組は天草玄札を大將として、組頭千束善左衛門・葭田三平同斷。何れも斧を持たせたり。五組赤星内膳を大將として、組頭會津宗印・毛利平左衛門、是又一揆五百人右同斷。其外別手組浮勢に、駒木根八兵衛を大將として、鐵炮方の者二百人、棒火矢十丁、相詞丸く丸しと定め、相印は繩襷に、鉢卷にくるすを差す。扨城中には大將四郎太夫時貞に、森宗意・柄木左京・佐志木左治右衛門が輩、四方を堅めて相守る。葦塚忠右衛門は、軍の後へ付いて、五の口より出張する。初日は寛永十五年正

月廿五日暮合頃に、靜々と麓の方へ押出す。寄手是を見て、すはや城中より夜討に出づるはと、惣軍震動して、面々具足を着し、馬に鞍置き旗押立て、鐵炮の手を配り相待つと雖も、寄手來らず。依つて御名代伊豆守殿下知ありて、いつ迄見合ふべき、早々押付いて討果すべしと下知故に、先日の黑田・有馬・小笠原・立花幷寺澤・松倉の諸軍、犇々と押出して、鐵炮をかけんとするを見て、城兵大きに驚きたる有樣にて、はた〳〵と一戰にも及ばず、から〳〵と逃籠る。偏に鼠の隱る丶にひとし。寄手大きに笑ひ、恥知らずの百姓原や、何として此大軍の堅陣を、夜討の體思ひも寄らず、出でて見たる一揆原の、志の優しさよと、笑うて陣を納めけり。翌日正月廿六日晩にも、又同じく出張する。前日の如くに、又むら〳〵と引退く。既に打續いて正月晦日迄、同じ姿にて騷がする事なり。寄手始の程は、兎角用意したりしが、此一兩日は油斷しける。仔細は伊豆守信綱下知として、是は城中の一揆原卷詰められて、大きに退屈し、味方の大軍を襲うて、城攻を誘引するなり。必ず〳〵調略に乘るべからず。夜討抔に極らば、兼て物見は附置きたり。本陣にて釣鐘を打つべき間、其時は

各出勢あるべし。嘗て恐れ驚くべからず。次第に兵糧盡きなば、色々の變あるべし。味方決して騷ぐべからずとの下知故、此觸を賴み、釣鐘の音を當に、諸勢大きに油斷して、寬々と休みけり。二月に入りては、次第々々に寄する事近しと雖も、每夜々々の事故、最早弓鐵炮の用意もなくて、多くは寢乍ら是を見る有樣なり。城中の者共見澄して、今は時分よし、事仕舞せたり。さらば一合戰、有無の勝負を決せんとて、日取して二月六日、夜討とは極めたり。既に六日の夜になりしかば、城中よりいつもとは遲く、暮六つ半頃に出勢せり。兼て皆兼々用意究竟の一揆、其組を守り、尤夫々に相分けたり。黑田家の大軍は葦塚忠太夫・同左內、小笠原家へは大矢野作左衞門、有馬家へは赤星內膳、立花家へは千々輪五郎左衞門、松倉・寺澤へは天草玄札、其跡備一勢々々引分け、棒火矢鐵炮を盡して持出づる。今晚は靜々と足輕なり。寄手の大軍、此頃中大きに侮り、何の用心もなく、又城兵の一揆奴原出でたり。いつもの如く引くべしと、嘗て取合はず。併しいつもよりは、今晚は近く來るぞやといふ內に、ばらばらと足早く押寄せて、今二町になる。寄手少し驚き、今晚は近邊迄相窺ふぞや。

用心せよといふ內に、駒木根・鹿子木棒火矢を仕掛け、はた〳〵と間近く打懸くる。すはや彼の棒火矢ぞと、大勢立騷ぎ罵り廻る內、棒火矢數十本打込んだり。殊に今晩は、合せ火能く十分に放し懸けたれば、黒田の先陣黒田將監・小刻屋始め、相備の足輕大將小川又右衞門・黒田佐二右衞門が組の陣迄、此棒火矢落懸り、同時に噇と燃え上る。陣屋は皆苫葺の小屋なり、殊の垣の事なれば、二月の春風に、乾き切つたる時なり。火の光四方へ燃え上る。日頃油斷の上なれば、馬に鞍よとうろたへ廻る。雜人原多く全裸の體なれば、一揆の鐵炮竹鎗に懸つて、討たるゝ者道を埋み、葦塚左內・四鬼丹波・時枝隼人眞先に乘入りければ、黒田家の先陣散々に亂れて逃走り、黒田佐二右衞門が組下十騎・雜兵足輕百人計、過半素肌の勢打交りたる儘にて、鎗を並べて切つて出づる。葦塚左內・時枝隼人、心得たりと喚て馳入り、十五六人討伏せければ、黒田の先陣鐵炮頭小川又右衞門、入替つて相働く。組下足輕悉く散つて一人もなき故、落し置く鐵炮を取つて、段々玉を込替へ〳〵打出しければ、是に依つて一揆七八人打倒され、しどろになつて退き出づる。一揆頭の四鬼丹波、鎗を打振り走り

入り、大の眼を怒らし、何者ぞ推參なりと呼ばはりしかども、小川又右衞門究竟の勇士なれば、ため込みたる鐵炮を郭に構へて立上る。四鬼丹波飛懸り、小川が鐵炮の筒先を確と握り、引奪はんとする所を、小川は逞しき男にて、少しも心を動せず、火蓋を切つて噇と打つ、玉過たず、四鬼丹波胸先を打拔かれて、横樣に倒れけるが、横擲りに打つ太刀の切先、小川が肋骨、下より三枚切上げたり。小川素肌にてありし程に、胴中半切られて、二人共に、同じく倒れて死失せたり。四鬼が討死を見て、一揆原大きに恐れ、已に元の堤へ引戻さんとする所に、葦塚忠右衞門馬を乘駈け來り、大音上げて下知し、軍は味方の勝利ぞや。何しに此所を退くぞやと、鎗を打振つて乘込む。黒田左二右衞門が働く所を乘懸けて、只一鎗にぐさと突立つる。左二右衞門尻居に倒れてどうと伏す。一揆共簇り寄つて、黒田が首を討ち、既に一番備敗れて、二の柵へ一揆亂れ入る。是に依つて惣軍敗走かと見る所に、黒田監物四方より下知し、爰を引きて何方へか逃ぐべきと、手廻を下知して踏堪へる。此中に黒田賴母、三軍悉く取堅め、靜に陣太鼓を打ち、列を定めて陣を出す。勢又山岳の如し。黒田監

黒田監物戰死

物は、我手の陣屋を、些とも去らず防戰し、流玉にて深手を負ひ、一寸も働き難し。家人原來つて助け退けんとする時、監物大に怒り、一揆原に仕負け、深手を負ひ助かりて、何の面目あらん。此深手を養ふ中に軍果てなば、千悔すとも甲斐あらじ。只此所にて討死せん、手廻の者共あらば、我を引立て敵に向はせよ。一鎗突いて討死せんと呼ばはりけるに、此監物が仲間在合さず、鎗持の下郎に、心逞しき者ありしが、走り來りて後より抱へて大音上げ、當手の大將黒田監物なり。夜討の大將出向ひて、勝負をせよと呼ばはりたり。葦塚左内是を聞き、天晴健氣の詞かな。當城の物主葦塚忠右衞門が一子左内なり。當手の大將黒田殿、鎗先試み給へと突出す。監物が胸先より突通し、後より抱へたる鎗持の孫右衞門が胴腹迄、一鎗に刺抜きしかば、一所に突かれて死にゝけり。誠に勇士の有樣なり。後に黒田三左衞門取置きて、孫右衞門が子を武士となし、楯孫右衞門という。二百石與へられけるとなり。去程に黒田の先手吉田壹岐といふ大剛の者も、亂軍に討死す。筑前守勢黒田縫殿之助殿も討死し、小林八左衞門、原吉三郎、何見太郎兵衞、猪山久太夫、二神七太夫等、數人の勇士

を討たれて、此陣悉く破れたりと雖も、黒田陣の法、諸陣は少しも騒がず、靜に備を押廻して、討取らんとする勢を見て、左内は一揆の味方を纏めて、本の堤へ引上る。

同日同刻に、大矢野作左衞門は、堂島對馬、菅谷吉兵衞、其外究竟の一揆五百人、有馬中務少輔殿の陣に、棒火矢を打込み、鐵炮を連べ放つ。有馬の先陣大きに驚き、馬よ鞍よと犇く所を、大矢野作左衞門、黒絲縅したる鎧着て、白き小旗を後に差し、常に得物なる十文字の鎗を以て一揆を下知し、柵を越えて一の備へ亂れ入り、短兵急に攻立つる。有馬勢多く素肌なれば、散々になつて、雜人は八方へ逃廻る。大矢野作左衞門は先陣にありて、既に有馬の一騎當千と聞えし兵共、十一人討取りぬ。然る所へ有馬の先陣秀島四郎右衞門、采幣を振つて下知をなし、味方比興の有樣や、大將の本陣近し、一揆共に後を見せんより、只討死せよと身を採んで下知すれば、只大きに騒動して、唯一人も、秀島に並んで戰ふ兵なかりしに、本陣より使來りて、石井九郎右衞門乘付け、秀島と馬を並べて、兩人の働激しく、既に一揆の勢七八人突伏せて、追返さんと働く體、石井は大坂にても、手柄ありと聞えしが、實にもと覺えて夥し。

大矢野作左衞門是を見て、僅の者共に追返さるゝやうやあると、例の鎌鎗を以て、卷落さんと乘向ふ。石井・秀島等、左右より追取り卷きて取つて懸る。大矢野右に鎗を取り、石井が鎗と搦み、左に太刀を拔いて、四郎右衞門に切結ぶ。秀島馬を一文字に馳入れて、眞向に打込む太刀を、大矢野引外して受け、太刀先馬の平首に打込んだり。大矢野馬よりひらりと飛びさまに、拂切に秀島に切付けたりしに、此太刀先、秀島が右の高股に當り、妻手へ落る所を、入替つて彼馬にゆらりと打乘り、石井九郎右衞門に打つて懸る。石井鎗を取直す所へ、堂島對馬馳せ寄つて丁と打ち、石井、堂島に向はんと振向く所を、大矢野馬を一つに寄せ、足を取つて逆に提げければ、堂島、終に石井を下切に打放す。秀島は半死半生になつて居たりしが、一揆共に踏み殺されける。此二人討死しければ、下知する人もなし。有馬の先陣大きに崩るゝ。一揆是に氣を得て、鬨の聲を作つて亂れ入る。有馬の先陣も、既に亂れんとする所へ、二の備有馬修理・同嫡子有馬藤九郎、勝つたる武者百餘人、鎗を揃へて突いて懸る。本陣の先手有馬帶刀、數十騎を引いて橫鎗に進む。一揆菅谷吉兵衞・堂島對馬、是に對する事能はず、引色になる所へ、毛利平左衞門來り助けて、漸々に勢を引上る。大矢野作左衞門は、大將を討たんと深く駈入りけるが、中々味方と、物別れては叶ふまじと、近く進む馬武者二騎、嘲いて切つて落し、味方の陣へ駈歸るに、味方物別れして引きければ、空しくは出で難しと、邊を見廻すに、逞しき馬に乘り、爽に出立つ若武者一騎、數十騎前へ見えければ、大矢野馳寄つて、上帶摑んで中に提げ馬に打乘り、一散に馳出す。此者、然るべき人の主人にやありけん、大勢押懸りけるに、彼若武者を、あらぬ道へ投捨て、こなたの道より一散に、味方の陣へ駈入りたり。後を慕ふ兵共、彼若武者を介抱してぞ歸りける。終に誰といふ事を知らず、大矢野は、菅谷・毛利と軍を集めて、葦塚と一所になる。

南島變亂記第二十畢

二月六日夜討の事

南島變亂記第廿一

大矢野作左衞門勇戰の事 并千束・赤星討死の事

大矢野作左衞門・堂島對馬・菅谷吉兵衞は軍を集め、葦塚・時枝と一所に堤を取つて、諸手の相圖を見合す所に黑田先手黑田左衞門尉二陣黑田賴母、諸手に勝れて、先陣を打散らされたる恥辱を雪がんと兵を揃へ、鐵炮を左右に立て、一揆を引かせじものと慕ひ來る。有馬の二陣有馬修理・長子藤九郎・三陣有馬帶刀、獅子の齒噛をなし、追縋うて大矢野に打つて向ふ。況や黑田美濃守養子なり。年若うして弓矢に才發の人故に、此間に鎧一縮して、白母衣を懸けて采幣を握り、勝れたる馬廻五百餘人、一揆の橫合へと志し、平草山に押登る。細川越中守忠利は、船手の軍功少なき故、家老長岡監物といふ練陣の老武者、米田監物の事なり、大坂陣手柄人なり、二千餘騎を率して、細野谷口より押廻し、一揆の後を取切れよと、陣を堅うして押向ふ。鍋島の一家は、陣屋元來城へ近しと雖も、甲斐守の武勇を恐る。其上出丸口は、良ともすると激しき軍ある故に、柄木右京・佐志木左治右衞門、只出丸を堅く守りて、一人も夜討に出でず。鍋島は身を堅めて、今や寄せ來るかと待ちけれども、軍勢向はざれば、同勢を揃へて、松平伊豆守差圖を待つ。一揆引かば、附入りに乘破らんと勵む勢なり。葦塚忠右衞門馬乘り廻し、今夜の合戰味方打勝つと雖も、退口殊に大事なり。爰を我れ防ぐべし。足輕く引取れよといひけるに、大矢野作左衞門いひけるは、敵陣近付くと雖も、味方の鐵炮をば恐る。我れ今敵陣を襲ふに、先陣は駈破れども、二陣皆堅し。思ふに赤星、天草の手を破るに難き事あらん。此口は我れ一人よく防ぐべし。葦塚父子・時枝の人人、速に諸軍の味方に加はり給へ。葦塚老將爰にある時は、諸陣に目なきが如し。早く此陣を捨てゝ諸手を下知し給へ。あの大軍に駈向ふは、小勢程引取るに勝手よしといへば、葦塚尤と同意し、さらば鐵炮の手を殘すべしとて、駒木根の二百餘人を堤の陰に伏せ、葦塚父子・時枝の者共一揆八百餘人、一文字に天草・赤星が陣に駈向ふ。

去程に黒田・有馬の兩陣向ひ進みければ、一揆の勢、味方の少しきを見て逃崩れんとす。大矢野大きに怒つて、我が手の働を見よ。敵何十萬ありとも、恐るゝ事なしと、駒木根に下知して鐵炮打たせ、我が聲をかくるを相圖に發せよと約束し、一揆五百人を一手になし、有馬の先陣に打つて入るに、忽ち先手の物主石田與右衞門・山田右平四面より切つて懸る。大矢野、一揆の勢を足輕く引かせ、加勢石田・山田を近々と駈けさせて、一聲喚いて引返し、忽ち兩人を左右に突殺しければ、其陣色めいて見える所、有馬藤九郎・有馬帶刀寄切つて懸る。大矢野、一揆を先に引かせ、後れ駈に堤へ駈上れば、有馬の二陣、雲霞の如く駈集る。大矢野一度鎗を振つて、すは打てよと下知すれば、堤を隔てたる駒木根、待設けたる二百挺一勢に切つて放す。唯將棊倒しの如く、先手の馬上の諸將共、犇々と馬より落つる。是を見て大矢野、再び切つて下り、一陣を追散らし、懸ると引取る。三陣恐れて附慕はず。其間に堂島と菅谷に下知し、一揆の勢を引上げさするに、さすが山道に馴れたる一揆共なれば、下知より早く、闇夜の山道を、何方の岩間よりかまりか、城中迄遠く引取りける。大矢野堤を越えて、

平草山の麓へ來れば、横合より進む敵あり。是黒田求馬なり。大矢野、横合の敵を、堂島・菅谷に防がするに、大矢野が馬廻百人に足らず。大矢野猶退かず、駒木根が鐵炮の手を、樹木の間に伏せさせて敵を待つに、入替つて黒田の先陣、一牧楯を翳し連れ、松明を白晝の如く點し立て、金皷法を守りて押上る。大矢野どつと叫んで駈下るに、黒田が横合備より、鐵炮を一勢に連べ放すに、眞先の一揆共廿四人、悉く打殺さるゝ。大矢野も、馬の鞍搖直すに、鉛子一つ來る。大矢野鞍の上にて躍り上るに、玉は草摺に中つて身に中らず。作左衞門事ともせず、喚いて駈入りて、先陣黒田左衞門が陣を駈行き、引歸して上へ懸りて陣を取るに、五十人には足らざりける。大矢野曰、爰を引かば、菅谷・堂島を捨殺すなりとて、山中にて鐵炮の手を打たせて山口を守るに、半時計りして菅谷來る。堂島は討死せりとなり。大矢野一所になりて二百餘人、山道をば上るに、黒田の先手、雲霞の如く慕ひ來る。大矢野、駒木根に語つて曰、諸方の味方も、多く引きたりと覺えたり。最早城中へ引くべし。爰にて奇功をなさずんば、此手の味方悉く討たるべし。細川勢の重ならぬ先に、一つの手柄を、

顯はし給へ。それを物別れの機となすべし。黒田の胴勢は、足重くして破り難し。横手に廻りし黒田求馬こそ、若輩といへども、只今堂島を討取りて、氣色ばうて見ゆるぞかし。此の二段の芝の上へ引上ぐべし。鐵炮にて透さず討取るべしと約束し、軍勢を段々引上げ、手廻卅人計り從へて、大矢野、道に堪へたり。黒田勢先を爭うて進む中、黒田求馬猶更に馳上る。大矢野も卅人を引きて、眞逆に駈落し、輕く引きて芝原の堤を緩く引上る。黒田求馬、猶更に馳上る。大矢野も卅人を引いて、一段高みに馬を立つれば、求馬遁さじと鎗打振り仰向く所を、鐵炮どうと響きて、黒田が胸板に、血煙立てゝ打込めば、少しも堪るべき、仰向にどうと馬より落つる。是に依つて先陣震動する所を、大矢野は山中の駒木根加勢と一所になり、二百人計り一同に、噇と鬨を上ぐるを、山上の味方城中の陣々、玉火を打下し鬨を合す。黒田の先手、敵出で來るかと陣脚を取定むる所を、さはあらずして、足輕に引いて歸りける。黒田勢も山中案内は知らず、所々鐵炮の音は聞え、伏兵もある樣に見えければ、勢を纏めて引返す。然るに同日同刻に、天草玄札大將にて、千束善左衞門・葭田三平先陣に進んで、立花將監の陣へ押向ふ。子息立花飛驒守は、年若と雖も、此程の一揆の體、心得ず思はるゝ上、今晩一揆の近寄らばと見て、多分夜討をすべしと、先手へ乘來つて揉合し、先陣の一相の陣場を悉く明け、傍に二陣を並べて備へさせ、本陣へも下知ありて堅固に守り、鐵炮を伏せて待懸けたり。城の一揆原は、嘗て是を知らず、一揆五百人鬨を作り、棒火矢を放つて燒立つる。其儘乘入りて見るに一人もなし。不思議に思ふ所に、二陣の逆茂木の內より、鐵炮二百挺を揃へて、一時に打立てたり。天草玄札、敵に備あり、此口引けと下知する所へ、立花飛驒守下知を傳へて、一揆は敗軍するぞや、鐵炮の手に及ぶべからず、鎗を入れて追立てよと、自身鎗を追取つて、眞先に馬を入れらるれば、騎馬五十人・足輕雜兵四五百人も、噇と叫んで追崩す。天草玄札が勢、しどろになつて崩れんとす。千束善左衞門・葭田三平、爰を返させては夜討の詮なしと、命を捨てゝ切結ぶ。又立花の先手を追込みける所に、吉弘市之進・立花主計、兩方より切つて入り、立花飛驒守眞先に馬を乘入れらるゝに、一揆勢、矢庭に五十人計り打殺されて、惣敗軍になつて行く。千々輪五郎左衞門は、今晩

手配替り、小笠原の陣に向ひしが、立花の陣、備ありと聞えしかば、玄札必ず敗軍すべしと知つて、引違うて立花の方へ向ふ所に、案に違はず、味方散々になつて引きしかば、五百人の一揆を眞丸に備へて、一の手は大江治兵衛、二の手は上總三左衛門となし、鹿子木左京、鐵炮を立花の二陣へ打込みて、横合より切つて懸る。千束葭田是に力を得て、味方の横矢、日本一の能き圖なり。盛返せや者共と、白晝の如き四方火煙の眞中に、五百餘人取つて返し揉合ひけり。一揆原は、兩方合せて千餘人、勝ち進みたる立花の同勢へ、出水の如く押懸るに、立花の軍追立てられ、本陣も崩れんとするを、立花飛驒守馬廻五十人眞先に、高橋重太夫・小野掃部之助、眞丸になつて打つて返す。一揆勢、又切退けんとする所を、千々輪五郎左衛門、鬼神の如き勢に、黒糸の具足に、同じ毛の甲を着て、十一日夜分捕せし具足なり。都て正月元日合戦の後より城中兵具夥し。鎗振廻し馳入り、高橋重太夫と鎗を合せ、千々輪が鎗先、雷光の如く當るべからず。忽ち高橋、馬より下に突落さる。時に高橋が從者小出七九郎といふ者、千々輪が馬を突かんと馳廻る。小出を追立て、再び高橋を刺殺して、小野掃部之助に打つて懸る。是故に小出、後より

突くを知らず、終に馬の後足を突かれて馬より落つ。五郎左衛門大きに怒り、小出を鎗にて叩き伏せけるが、鎗の柄ぽつきと折れければ、打捨てゝ刀を抜き起上る。小出七九郎を拝打に切殺し、吉弘市之進・立花主計心得たりと、馬上より鎗を以て千千輪を突く。千々輪今は絶命の場と思ひければ、父が讓の刀を以て、散々に切懸け、小野掃部之助に追付いて、鎧を取つて跳返し、ひらりと馬に乗替り、刀を上げて切廻る。小野が從者數十人、駈隔て防戰す。小野掃部之助漸々に引退く。千束善左衛門是を見て、爰を採めやと突廻る。元來千束善左衛門大勇氣にして、氣がさなる者なりしかば、千々輪に少しも劣らず、馬を並べて前後左右に乗違うたり。偏に萬夫不當の働なり。千々輪は、元來武道通達の者、其上加藤家百萬石の家中にて、隨一の馬の藝者、大坪流の名人にて、蛇に繩をかけても、乗る者と同じ樣に追立て、馬に乗廻れども、何とて千々輪に及ぶべき。もと千束は百姓なり。鵜の眞似する烏は、水を飲むといふ如く、何角千々輪と乗並べたる程に、頓て右の足を踏外して、左へがばと落ちたりける。一揆の歩の者は、危き時といへど、寄付く者なければ、落馬する

千束善左衞門戰死

と其儘、立花の兵士十人計りに取巻かれ、六七箇所鎗疵の深手を負ひたり。激しき鎗下、其上雷光の如き千々輪が働、立花衆、容易く千束が首を取る事能はず、千々輪も此時鎗はなし、太刀計りにて大きに難儀の所、千束深手負ひ乍ら、千々輪殿々々々と呼ばはりけるに、五郎左衞門駈寄つて見れば、千束深手負ひ、働くものは目計りにて、今は是迄ぞと、千々輪が鎗のなきを見て、我鎗を差出す。哀れ剛の心なると、千々輪見て後、獅々の齒噛をなし、心入あら不便なりと、則鎗を追取りて、いでや天帝の淨土に待ち給へと言捨て、只一鎗に止めを刺し、其儘敵中を馳廻るに、歷々の武士六人計り討取つて、終に立花の軍勢を、棚より内に追入れて、千々輪・天草一手になり、勝鬨作つて、山下に屯して息を繼ぎける。赤星内膳は、五百餘人の一揆を下知して、寺澤兵庫頭・松倉豐後守兩人の備に打入るに、最初に棒火矢を放ち、陣屋の燃上る相圖に、鬨の聲を上げ、平一面に押懸りたり。寺澤・松倉の軍兵も、兼々一揆に大きに仕付けられて、臆心直らず、大きに騷動して、先陣一捲りになつて敗北する。赤星下知して進みければ、一揆原は勝に乘り鬨を上る。本陣にも堪り得ずして、松倉勢大きに敗軍に及びけり。寺澤の先陣も、既に敗軍に亂れて、陰源左衞門・池田新助・松本平之丞・谷澤八左衞門、枕を並べて討たるれば、前後鳴動して既に崩れんとするに、松倉の家老三宅藤右衞門、只一騎踏悚へて、燃火の中に大長刀を振廻して働く。此頃の手疵未だ平癒せずと雖も、不變の兵にて、一揆を矢庭に五六人薙伏せ、味方進めと下知をなす。是に勵まされて、寺澤衆の松下半之丞・陰山五兵衞・谷崎八右衞門・小笠原齋之助・渡邊卜庵・柴田彌右衞門等、各進んで切崩す。寺澤兵庫頭も馬を乘返し、只討死すべしとて乘入る。此時一揆又押出されて、八方に散亂す。時に赤星内膳馬を乘出し、一揆三百餘人を從へ、喚と駈返す。寺澤勢又押立てらる。三宅藤右衞門少しも退かず、各身の上大事なり。今日爰を破られて、後日何の言譯あらんと、長刀を打振り立向ふ。赤星、惡鬼の如く立ちて鎗を突くを、松下半之丞是を見て、三宅が替りて鎗を合す。赤星怒つて突く。松下が内甲に、深く突込みければ、俯に倒れて死しけり。入替りて三宅藤右衞門、長刀を以て跳上るに、赤星が左の高股に深疵負ひたるに、あはや赤星討たれぬと見る所へ、相備毛利平左衞門・會津宗印、二百餘人を

赤星内膳戰死

引いて入り、赤星を救うて相働く。寺澤勢終に勝つ事能はず、討ちつ討たれつ、押込み押出し戰ふ所に、小笠原の先陣押廻つて、後より取包む。一揆是に氣を呑まれ退く所を、渡邊・柴田・三宅、得たりや爰ぞと、押續き打つて懸る。一揆を今塵にしけるにやと見る所に、小笠原の先陣、後より亂れて、葦塚左内一軍を引いて切つて入り、段々葦塚忠右衛門・時枝隼人抔も駈付くれば、赤星・會津も兵を立直す。葦塚左内會釋もなく、寺澤の陣へ切つて入り、忽ち陰山五兵衛を突いて落す。是に氣を得て、一揆喚いて駈返しければ、三宅藤右衛門も、一揆に新手加はりしを見て、速に傍へ本陣を引上げて、鐵炮の手を揃へて待懸けらるゝに、葦塚も横合より、小笠原の陣々に近付けば、是迄ぞと引返す。小笠原の先手寺澤・松倉も一所になつて、一揆の後を喰止むるに、赤星内膳、迚も深手を負ひぬれば、城迄引き難しと、引返し死にゝけり。猶も諸手附慕ひけれども、千々輪・葦塚引下りて追拂ひ〳〵、或は鹿子木左京、鐵炮を伏せさせて、切所々々を立切りければ、夜討の軍勢、終に功を全うして、城中に退きける。此夜討、古今稀なる働と、西國にても評判なり。大坂籠城蜂須賀の手、夜討とは、

事拔群に勝れてぞ見えし。本陣松平伊豆守陣大に騷動して、既に一揆の者共寄せ來らば、敗軍とぞ見えし。然れども別して立花の陣、働甚強うして、今度は本陣さまで敗北の色なし。鍋島の陣は、敵城近しといひ、殊に柵逆茂木なかりしかども、甲斐守の武勇に恐れて、一揆より夜討は懸けざりけり。一揆今少し引下り、遲々に及ば、細川の大軍後より向ひ、鍋島家の陣横合より懸らば、城兵一人も生殘るまじとぞ見えし。葦塚忠右衛門見積よく、足手纏めて引上げ、終に物離になつて、葦塚も城中へ引取り、諸軍を改むるに、討死二百八十餘人なり。然るに霞田三平・會津宗印も深手蒙り、城中にて醫療を盡す。其外隊將の中にも、死生を知らざる者多し。されば此夜の討死六千の内、赤星を始め四鬼丹波・千束・堂島が類、小頭の中には猶多く討たれければ、葦塚も寄せて戰ひし時は、一揆我が主を知らざる故に、物頭共多く討たるゝ事を思うて、重ねては打つて出づる事を止めければ、敵多く討取りけれども、城中長き籠城なれば、各退屈して、兵糧鹽味噌の藏を眺めて、志を失ふ者多かりし程に、城中の物頭共、慰め兼ねてぞ見えにけり。

大矢野作左衛門勇戰の事幷千束赤星討死の事

落穗集曰、此夜一揆の城兵、黑田左衞門佐忠之の陣へ駈向ふ時、其夜廻松平伊豆守家人岩上角之助・尼子八兵衞、幷紀伊大納言樣の使者山中作左衞門、夜討の所へ廻り合せ、敵多勢柵を破らんとするを見て、夜廻りの雜人も崩れ、岩上・尼子・山中は立堪へ、鎗を追取つて柵際へ走り行く時に、一揆共柵を踏破り押込み、則ち紀伊大納言樣の使者山中作左衞門、銀の甲熊毛の立物、十文字鎗一番に合せて、岩上角之助・尼子八兵衞と立並んで鎗を合す。一揆共柵外へ突崩す。山中は鎗の手を負ひ、岩上・尼子兩人は、注進の爲め引取る。其後へ黑田衆入替る。其後世間の沙汰に、夜討に鎗入るゝ事、なき法なりといふ。水野日向守勝成曰、太閤の代小田原陣に岩槻十郎氏房、家來廣澤兵庫之助重信大將にて、蒲生左內・同五郎兵衞・北川佐渡守・畑又右衞門鎗を合み、城方の鎗は先騎廣澤、扨內田又は其外三人鎗を合す。秀吉公御感にて鎗に極る。薩摩陣根川にて、宮部善祥坊が鎗に夜討なり。大坂陣、蜂須賀の家人稻田・樋口・長谷川が鎗合せ、家康公・秀忠公御感狀下されしぞ夜討なり。されば此度紀伊大納言殿內山中、又伊豆守內岩上・尼子、島原の鎗にてはなしと、不吟味なりといふ。故に感狀出でずとなり。其外立花の手先衆、多く吟味の上、感狀出さる。されば夜討の手強き事決定なり。又一說に、二月廿一日夜、再び夜討ありといふ。是追つて考ふべし。

南島變亂記第廿一畢

大矢野作左衞門勇戰の事幷千束赤星討死の事

南島變亂記第廿二

北條安房守軍法の事幷大物見の事

江戸表には、未だ天草動亂、勝軍の注進なきにより、取々評定あり。水戸公仰せらるるは、今度重兵島原表に陣し、追討の大將は、天下の大老武功の大名等、其の面々は細川・有馬・黒田・鍋島・小笠原・立花・毛利・水野等、九州の大兵都合十六萬餘人。然れば大將にも軍勢にも、少しも不足なき事なり。只軍配人の裁判にて分るゝものなり。然れば北條安房守差下され、軍の指揮然るべきなりと仰せらるゝ。此事然るべきに極り、早速北條安房守下向申すべき由にて召出され、仰渡さるゝ趣、今度島原表一揆追討使を遣さるゝ所、事難澁に及ぶの條、安房守早く伊豆守・左門其外諸大將等と相談仕り、萬事差圖致し、軍配を心一杯に下知仕り、落城隙入り申さぬやうにとの事なり。安房守謹んで畏り奉り、合戰の事、兼て勝負は有之候事勿論に候。併し今度は某手勢一人も召連れ申さず罷下り、御上使伊豆守殿へ軍法を談じ、諸大將を勵まし申さば、落城當日の中と存候。今我れ既に至らば、いと安き事と奉存候。さらば伊豆守へ、此旨仰遣され、萬事隔心なく申談ずべき由申さるゝ事、第一の要用に候。追付落去の旨を申上ぐべく候間、日を數へて御待ちなさるべく候と申上、御城より直に伴廻僅廿人、武具の用意をなし、自身具足一領鎗一筋計にて、早打にて本海道より大坂着致され候所、城代諸役人、御軍使御出の筈とて、嚴重に急ぎ御觸の事なれば、兼て二三千人も御出と待受けたる所へ、僅の體にて御出故、何れも思の外なり。早船の內を選み、早速大勢の水主大勢船頭用意の所、安房守申さるゝは、今度は大切の御用、勿論日積も有之間、陸地を罷下り申すべきとの事なり。大坂奉行衆申さるゝは、陸地は難儀多く、御老人の御苦勞に奉存候。此船路は、瀨戶內にて岸を傳ひ、風波も難もなき所に候へば、是非船路にて御出立御尤と是ある所に、安房守申さるゝは、尤此筋陸路海路同前の所と聞及ぶ。陸は播磨・備前・備中を經て、下の關迄百五十六里

北條氏長島原に着す

に、海上は却て百五十二里と聞く。然れば順風あり逆風あり、潮落潮込豈常に心の儘ならんや。我れ陸地を行けば、晝夜に二三十里、僅人足五十人に過ぎずして事足れり。是故にこそ、我れ一人下りしなり。早打駕御申付、早々陸路下るべしとて、陸地を下られける。誠に神通の人にやありけん、其四五日過ぎ風起りて、其頃出船せし外、用事の船の者共、大きに急ぎけれ共、安房守殿より、十四五日後に着しぬ。不思議なり。されば安房守陸地を急ぎ下られけるに、二月十六日、島原高久城へ着陣なり。頓て早速御名代伊豆守殿に對面し、伊豆守・左門殿も、別儀を以て門前迄迎に出でられ、師の禮を以てあしらはれける。段々軍立を聞いて、或は感じ或は恐れ、此城中に籠る者、只者にあらじ。只今迄落城せざるも理なり。中々猥に攻め難き術とこそ覺ゆ。然れ共天下の御下知として、食詰と申すも餘り穩便に候。近日樣子を待ち、一攻あるべき事と存候。先づ明日より、馬上卅騎の御使番衆を、御貸し下され候へ。城近く大物見仕るべきなりとなり。其後二月六日の夜討の前後、諸軍の手柄、篤と聞定められ、棒火矢松明抔取寄せて見られけるが、手を打つて、最早此城も程あるまじ。松明焚きやう、陣屋の火の掛けやう、見所ありといはれし。伊豆守申さるゝは、其夜一揆共退口に、多く腰兵糧を落して行きぬ。臆病氣生じてありしといはるゝを、其兵糧あらば、見せ給へとありしに、竹の筒に入れし兵糧多く集めて、安房守殿に見せければ、是れ臆病故に非ず。城中兵糧乏しからぬを、敵に示すの謀計にて、斯くは振舞ひしと覺ゆ。中々心入の優しき一揆の大將共やと、深く感じられける。松明陣屋の焼きやうの事は、見所やありけん、東武にても、紀伊大納言殿、陣屋の焼きやう惡しゝ。一揆落城程あるまじ。されども奇功は深く貯へたりと覺えたり。必ず油斷すべからず。重ねて飛使來りぬ。達人の見る所、千里と雖も變らざりし。北條安房守、翌日城近く大物見ありしが、退いて御名代松平伊豆守殿の陣屋へ入り、種々兵道相談あり。安房守申さるゝは、扨々城の構、諸事砦、皆能き繩張なれども、最早城中不和の象あり、何にしても近日落去すべし。然れども御本陣より御差圖なくば、敵出づるとも、攻上るべからずと御定めなり。安房守は御本陣を出でて、出丸先づ順見あり。直に鍋島の陣屋に入り、諸將の働を稱し、すぐに子息甲斐守殿の陣